ISSN 2432-8383

ヘルン研究

第３号

富山大学ヘルン（小泉八雲）研究会

2018 年 3 月

ヘルン研究第3号　目次

はじめに　1

Ⅰ　日本におけるラフカディオ・ハーン

二つの『心』――ハーンと漱石――　小森　陽一　4

文化資源としての作家と文学
――ラフカディオ・ハーンの可能性――　小泉　凡　15

ラフカディオ・ハーン「守られた約束」について
――原話と再話の比較から見えるもの――　川澄亜岐子　20

帝大講師小泉八雲
――講義「読書論」「創作論」「文学と輿論」を中心に――　服部　徹也　32

ハーンと日本人の表情　水須　詩織　47

ハーンと大正日本の想像力――佐藤春夫の場合――　河野　龍也　55

戦後高等学校国語教科書の中の小泉八雲・序説　西田谷　洋　64

文学教育の題材としての小泉八雲
――富山大学の近年の実践例をもとに――　小谷　瑛輔　74

Ⅱ　ラフカディオ・ハーン研究の今

ラフカディオ・ハーンの再話と日本人の文化的記憶の変容
――「和解」を中心に――　結城　史郎　79

ハーンはアメリカでどう読まれたか
――『日本――一つの解明』を中心に――　水野真理子　90

Some More Lafcadio Hearn Materials at the University of Virginia
WILLIAMSON, Rodger Steele　96

ハーン作品のドイツ語版とユダヤ系文化人たち　岩本真理子　105

ヘルン文庫書き込み調査報告
――『ギリシア詞華集』と『ルバイヤート』をつなぐもの――　中島　淑恵　110

執筆者紹介・奥付　128

ポスター　129

はじめに

富山大学ヘルン（小泉八雲）研究会の活動も 3 年目を迎え、これまでの成果を踏まえて各自の研究をさらに推し進めるほか、さまざまなラフカディオ・ハーン関連研究者をお招きして、講演会やシンポジウムも開催してまいりました。今年度の主な活動は以下の通りです。

Ⅰ． 2017 年度富山大学ラフカディオ・ハーン研究国際シンポジウム

2017 年 12 月 23 日（土）・24 日（日）富山大学人文学部第 6 講義室

【1 日目】日本におけるラフカディオ・ハーン

戦後高等学校国語教科書の中の小泉八雲・序説　西田谷洋（富山大学）

文学教育の題材としての小泉八雲―富山大学の近年の実践例をもとに―

小谷瑛輔（富山大学）

【基調講演Ⅰ】ハーンの『心』と漱石の『心』―日清戦争認識をめぐって―

小森陽一（東京大学）

ラフカディオ・ハーン「守られた約束」について―原話と再話の比較から見えるもの―

川澄亜岐子（東京大学大学院生）

帝大講師小泉八雲―講義「読書論」「創作論」「文学と輿論」を中心に

服部徹也（慶應義塾大学大学院生）

ハーンと日本人の表情　水須詩織（富山県美術館）

ハーンと大正日本の想像力－佐藤春夫を中心に―　河野龍也（実践女子大学）

【2 日目】ラフカディオ・ハーン研究の今

ラフカディオ・ハーンの創作と文化的記憶―「和解」を中心に　結城史郎（富山大学）

ハーンはアメリカでどう読まれたか―『日本―一つの解明』を中心に

水野真理子（富山大学）

【基調講演Ⅱ】文化資源としての作家と文学―ラフカディオ・ハーンの可能性―

小泉凡（島根県立大学）

Some more Lafcadio Hearn Materials from the University of Virginia

WILLIAMSON, Rodger Steele （The University of Kitakyushu）

ハーン作品のドイツ語版とユダヤ系文化人たち　岩本真理子（北九州市立大学）

ヘルン文庫書き込み調査報告―『ギリシア詞華集』と『ルバイヤート』をつなぐもの―

中島淑恵（富山大学）

Ⅱ．国際シンポジウム日本文学とヨーロッパ文学の交感

2018 年 2 月 9 日（金）13:00 ～ 17:30　　富山大学人文学部 3 階第 6 講義室

【基調講演】メリメを読む漱石　―幻想の語り方をめぐって―

柏木隆雄（大阪大学名誉教授）

小泉八雲の『心』から夏目漱石の『心』へ　　ダミアン・フラナガン（小説家、評論家）

文学のジャンルとしての近代断片から芥川の随筆を読み直す試み：侏儒の言葉の例

マリー・ノエル　ボーヴィウー（立命館大学嘱託講師）

流血の惨事―「幽霊滝の伝説」と「耳なし芳一」から―　　中島淑恵（富山大学教授）

今年は 2 回の国際シンポジウムを開催することができ、とりわけロジャー・ウィリアムソン氏には、ヴァージニア州立大学に収められたハーン関連資料について、詳細な報告をいただきました。また、ダミアン・フラナガン氏には、これまであまり言及されてこなかった、漱石を中心とした文学上の三角関係としての夏目漱石と正岡子規という視座の導入によって、独創的な漱石論をご披露していただきました。

また、12 月のシンポジウムでは、満を持して小泉凡先生のご登壇いただいたほか、夏目漱石研究の泰斗であらせられる小森陽一先生にもご講演いただき、富山の聴衆に耳福のひと時を提供することができたのではないかと自負しております。また、2 月のシンポジウムでは、ぜひ一度ご来富頂き、知見をご披露いただきたいと願っていた柏木隆雄先生にご講演いただく機会を設けることもできました。各国文学の枠組みを超えて文学研究者が研鑽しあい、新たな研究の糧とする機会が得られたのではないかと自負しております。また、外国人による日本文学研究の水準の高さにも瞠目させられるよい契機となりました。私どもの研究が世界を目指すのと同様、ハーン研究を通して得られる視野は、畢竟世界的なものとならざるを得ません。今年度はこのほか、日本比較文学会や日本フランス語フランス文学会秋季大会でも研究会のメンバーがハーン関連のワークショップを行ったり、また、日本ケルト学会では同じくハーン関連の発表を行ったりという対外的な活動も勢力的に行ってまいりました。

本論集は、これら今年度の活動のうち、12 月の国際シンポジウムの成果を中心にまとめたものです。恒常的かつ安定的な予算措置が望めない中、本年度も学長裁量経費の配分を受け、また科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究 16K13215）の交付も受けることができましたこと、関係者各位に厚く御礼申し上げます。また、富山大学人文学部および富山大学附属図書館からも物心両面で多大なるご協力を賜りましたことも申し添えておきます。今後も着実に結果を積み重ね、皆様にその成果を公表する努力を続けて参りたいと思います。

2018 年 3 月

富山大学ヘルン（小泉八雲）研究会メンバー一同

Ⅰ　日本におけるラフカディオ・ハーン

【論文】

二つの『心』――ハーンと漱石――

小森　陽一

はじめに

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）と漱石夏目金之助とは、奇妙な因縁で結ばれている。日清戦争のただ中であった一八九四（明治二七）年一一月、授業時間があまりにも多く執筆活動にさしつかえるので、また世話になっていた嘉納治五郎校長が転任することとも重なり、一八九一（明治二四）年一一月二四日から就任した熊本第五高等学校を去ることをハーンは決める。仙台、鹿児島の高等中学校からの話もあったが、ハーンはそれらを断り、神戸クロニクル社と毎日社説を書くという契約を結び神戸に移った。その一年後の一八九六（明治二九）年四月一三日、夏目金之助は熊本に到着する。愛媛県尋常中学校嘱託教員を依願退職しての熊本第五高等学校への赴任であった。

夏目金之助は一九〇〇（明治三三）年に、文部省第一回官費留学生として、大英帝国の首都ロンドンに英語研修のため留学する。

ハーンは、東京帝国大学学長外山正一から文学部でイギリス文学の講師として招きたいとの要請を一八九五（明治二八）年の年末から受けていた。翌年一月に受諾し、二月には帰化手続きを終え、小泉八雲と改名し日本人となる。そして牛込区市ヶ谷富久町に納得できる借家を見つけ、人力車で本郷まで通う生活が始まる。

ミルトン、シェイクスピアなどの古典から一九世紀の詩人たちまでに及ぶ、英語圏文学史を講じた。この一八九六（明治二九）年の三月に、アメリカのハラトン・ミフリム社から出版されたのが"Kokoro"（『心』）である。

夏目金之助が留学から帰国したのは一九〇三（明治三六）年一月。香港から長崎に向けて金之助が出航する直前の一月一五日、東京帝国大学文科大学長井上哲次郎は、この年の三月三十日限りでの約定打ち切りを、ハーンに通告した。これを知った学生たちはハーンの留任を要求する運動を始める。四月一〇日、金之助は第一高等学校英語嘱託に就任し、東京帝国大学英文科講師を兼任することが決まる。事実上、ハーンを追い出した印象を与える状況であった。

その時期のことを夏目鏡は次のように回想する。

狩野さん大場さんなどの肝煎りで、望みどほり熊本に帰らないで、東京に居て

一高で教鞭をとることになりましたが、それだけでは生活にも困るからとあって、文科大学の講師といふことになりました。どうしてさういふことになつたのか、其間の消息は私にはわかりませんが、當人甚だ不服でして、狩野さんや大場さんに抗議を持ち込んで居たやうです。夏目の申しますのには、小泉先生は英文学の泰斗でもあり、又文豪として世界に響いたえらい方であるのに、自分のやうな駆け出しの書生上りのものが、その後釜に据わつたところで、到底立派な講義が出来るわけでもない。又学生が満足してくれる道理もない。(『漱石の思ひ出』岩波書店、一九二九)

この回想の文脈から判断すると、帰国直後の漱石はハーンの学者としての業績や、「文豪として世界に響いたえらい方」という認識を持っていたのだから、当然代表的著作は読んでいたことになる。

二〇一六年は漱石没後百年であり、様々な出版や講演会の企画に私もかかわることになった。この年創業一三〇周年であった河出書房新社の、かつて私の授業にも出ていた編集者から、石原千秋氏との漱石をめぐる対談(『漱石激読』、二〇一六)の企画を持ちかけられていた頃、「『心』刊行一二〇周年記念出版」として、平川祐弘氏の「個人完訳」で『心　日本の内面生活がこだまする暗示的諸編』が五月に同社から出版されたのである。その『心』第九篇「業の力」についての「解説」の中で、平川氏は、ハーンと漱石とのかかわりについて、一つの推論を提示している。

本題から外れるが、夏目漱石が初期の作品で霊の感応のような心霊現象に言及し(『琴のそら音』)、さらに『趣味の遺伝』では「恋愛の神秘、心霊の不可思議の可能を信じるといふのみでなく、一歩進んで、それを遺伝学の立場から、十分可能である。と証明することができるとする態度が示されている」(小宮豊隆解説)。これは漱石がおそらくハーンから示唆を受けたからであろう。漱石はハーンのもっとも丹念な読者の一人であった。日本人作家として後年『心』という題で小説を書いたのも、東大での先任者ハーンに対する対抗心もあってのことだったのではあるまいか。

漱石がハーンを読んでいたであろうことは、鏡の証言における、「小泉先生は英文学の泰斗でもあり、又文豪として世界に響いたえらい方」という「夏目の」言い方からも十分推測できる。また初期短篇や『夢十夜』などにハーンの著作と深く呼応し合う表現があることも私は意識していた。しかし、「『心』という題で小説を書いたのも、東大での先任者ハーンに対する対抗心」があったからだという平川氏の推論は一つの

衝撃であった。確かに題名は同じなのである。しかもハーンがわざわざ「心」という漢字の読みを示す日本語の音声を、アルファベット表記した題名をつけ、本文の始まる直前に「心」という漢字を印し、「右に掲げた漢字で書かれるこの言葉は「心情」heart だけでなく情緒的な意味における「心意」をも意味し、「精神」sprit、「勇気」courage、「決心」resolve、「感情」sentiment、「情愛」affection をも意味する。そして「内なる意味」inner meaning をも意味する」と記したことと応答するかのように、漱石自身の手による「箱、表紙、見返し、扉及び奥付の模様及び題字」などの装幀が、徹底して「心」という漢字にこだわりぬいていることも、二人の応答関係を想像させる。

二葉亭四迷を中心とした明治前半期の文学研究をしていた私が、夏目漱石研究にかかわらざるをえなくなったのは、いわゆる「『こころ』論争」（詳細は『漱石辞典』（翰林書房二〇一七、コラム５大原祐治「漱石論の歴史③『こころ』論争」参照）による。その意味でもハーンと漱石についての講演を富山大学ヘルン（小泉八雲）研究会より依頼された際、平川氏の言う漱石の「ハーンに対する対抗心」について、しっかりと考えてみようと思ったのである。尚、ハーンの『心』からの引用は、先の平川祐弘氏の「個人完訳」版による。

一　『心』の転換点としての日清戦争

ハーンの『心』は、「停車場にて」（短）、「日本文明の真髄」（長）、「門づけ」（短）、「旅日記から」（長）、阿弥陀寺の比丘尼」（中）、「戦後に」（中）、「春」（短）、「趨勢一瞥」（長）、「業の力」（中）、「ある保守主義者」（長）、「神々の黄昏」（中）、「前世の観念」（長）、「コレラの流行期に」（短）、「祖先崇拝についての若干の考察」（長）、「君子」（中）といった、それぞれ長さの異なる十五の文章で成り立っている。短篇は基本的に小説的な読み物になっており、長編は日記形式の「旅日記から」以外は、文明論的な評論になっている。その間に小説と随筆の間に位置するような文章が配置されている。最も長い「ある保守主義者」は、『心』の献辞に「詩人、学者、そして愛国者なる我が友人、雨森信成へ」とあるように、雨森をモデルにした伝記的比較文明論になっている。

「日本は一隻の軍艦も失わず一回の戦闘にも敗れず、大国中国を打ち破った。朝鮮を新しい国に仕立て、自国の領土を拡張し、東洋の政治的様相を全面的に改変した」と始まる「日本文明の真髄」に端的にあらわれているように、ハーンの関心の中心は、日清戦争に勝利した大日本帝国の「力」を支えている、「日本の庶民」としての「日本人の性格」に向けられている。

「一八九五年五月五日」の日付が印された「戦後」においては、ハーンの眼から見ると「不思議な形のもの」、すなわち鯉のぼりの「はたはたと翻」く光景を紹介しなが

ら、「日清戦争の勝利」が「日本国民」にもたらした高揚についてふれたうえで、「ロシアはフランス、ドイツと手を結び、日本を威嚇しつつ干渉した」と三国干渉がもたらした日本社会への影響に言及している。そして「この麗らかな春の日、松島艦の乗組員がなにより喜ぶことは――各員戦闘準備、沖合に停泊中のロシアの大装甲巡洋艦を襲撃せよ、という命令がしたることであったろう」と、日露戦争の予感を記してもいる。

さらに「趨勢一瞥」では、日清戦争後の日本について「目下のところは人口圧力の増大と競争の増大が、日本人の頭脳の回転を速くさせもするだろうが、同時に性格を硬化させ、利己心を助長させるだろう」と強調している。

漱石の『心』の先生の運命が大きく転換するのが、日清戦争後の時代状況であったことは、様々な角度から論じられて来たが、改めてハーンの『心』とのかかわりで基本的な事項を確認しておくことにする。

先生の生活の転換は、「騒々しい下宿を出て、新しく一戸を構えて見ようかという気になつた」ことによってもたらされる。「駄菓子屋」の「上さん」からある「素人下宿」を紹介してもらうことになる。

> それはある軍人の家族、といふよりもむしろ遺族、の住んでゐる家でした。主人は何でも日清戦争の時か何かに死んだのだと上さんがいいました。一年ばかり前までは、市ヶ谷の士官学校の傍とかに住んでいたのだが、厩などがあつて、邸が広過ぎるので、其所を売り払つて、ここへ引つ越して来たけれども、無人で淋しくつて困るから相当の人があつたら世話をしてくれと頼まれていたのださうです。

「先生」が紹介されたのは「日清戦争」で戦死した職業軍人の「遺族の住んでゐる家」だったのだ。「市ヶ谷の士官学校の傍」にあった「厩」付きの「邸」に住んでいて、それを「売り払つて」、小石川に「引つ越して来た」のだから、この不動産売買の差額はかなりあったはずである。その差額を銀行に入れての利子と、亡き夫の軍人遺族恩給とだけでは余裕が無かったので、下宿人を入れようとしていたのである。

その意味で「先生」は、「相当の人」としてはうってつけの存在であった。なぜなら、このときの「先生」は「金に不自由のない」状態にあったからだ。そこにはハーンの言うところの「大国中国を打ち破った」大日本帝国の、「東洋の政治的様相を全面的に改変した」「力」が作用していたのである。

二　日清戦争賠償金と金本位制

「先生」が「金に不自由のない」状態になりえたのは、次のような事情からであった。

私の旧友は私の言葉通りに取計らつてくれました。尤もそれは私が東京に着いてからよほど経つた後の事です。田舎で畠地などを売ろうとしたつて容易には売れませんし、いざとなると足元を見て踏み倒される恐れがあるので、私の受け取つた金額は時価に比べるとよほど少ないものでした。自白すると、私の財産は自分が懐にして家を出た若干の公債と、後からこの友人に送つてもらった金だけなのです。親の遺産としては固より非常に減つていたに相違ありません。しかも私が積極的に減らしたのでないから、なお心持が悪かつたのです。けれども学生として生活するにはそれで十分以上でした。実をいふと私はそれから出る利子の半分も使えませんでした。この余裕ある私の学生生活が私を思いも寄らない境遇に陥し入れたのです。

『心』という小説の最大の事件は「K」の「自殺」である。「先生」が「陥れ入れ」られたと考える「思いも寄らない境遇」とはそこにいたる全過程にほかならない。その要因は「それから出る利子の半分」を使えなかったことにあるのだ。

「利子の半分」で学費と下宿代を中心とする学生生活を賄えるのであれば、「田舎」の土地を「売」った代金を、「先生」はすべて銀行に預金したということになる。「若干の公債」とは日清戦争を遂行するための戦争公債で、その利子と、さらに預金の「利子の半分」で生活が可能であるなら、一人で生活する場合は元金を取り崩すことなく、元金を毎月の利子の半分づつ増額していくことが出来る。

最も重要なのはここだ。「利子の半分」で「先生」が生活出来るということは、元金を取り崩すことなく、もう一人が生活可能だということだ。「先生」の「Kと一所にいる」ことを可能にしたのは、「利子の半分」で生活できるという、利子生活者としての条件だったのである。

月々の費用を金の形で彼の前に並べて見せると、彼はきつとそれを受取る時に躊躇するだろうと思つたのです。彼はそれほど独立心の強い男でした。だから私は彼を私の宅へ置いて、二人前の食料を彼の知らない間にそつと奥さんの手に渡そうとしたのです。しかし私はKの経済問題について、一言も奥さんに打ち明ける気はありませんでした。

「先生」は言わばだまし討ちのようにして、「K」の扶養者になっていった。それが

可能になったのは銀行から安定した利子の支払いがあったからだ。こうして「先生」が利子生活者になったことによって、「奥さん」と「お嬢さん」が二人で暮らす「素人下宿」に、「K」を導き入れることが出来たのであり、それが「お嬢さん」をめぐる三角関係から「K」の自殺にいたる、すべての条件を形成したのである。

そしてその前提になったのが、ハーンの言うところの「一隻の軍艦も失わず一回の戦闘にも敗れず、大国中国を打ち破つた」ことによる。大日本帝国は日清戦争の賠償金として清国から二億三一五〇万テール（テールは銀の単位）を獲得した。それまで清国を中心としたアジア地域は銀本位制であった。しかし大日本帝国は、日本円にして約三億六千万円（当時の一円はほぼ現在の一万円）にあたるこの賠償金を準備金として、欧米列強と同じように金本位制に移行したのである。ハーンの言うように「東洋の政治的様相を全面的に改変した」のである。

欧米列強と対等に国際取引を行うことを可能にする金本位制に移行する法的な前提となっていたのが、一八九七（明治三〇）年三月交付、一〇月施行された「貨幣法」であった。

いずれにしても「先生」が「東京へ着いてからよほど経つた後」に、土地が「売れ」て「利子の半分」で暮らせるようになったのである。では「東京へ着い」たのはいつ頃であったのか。

それは「先生」が「未亡人（びぼうじん）と一人娘と下女より外にいない」下宿に転居する際に、「大学の制帽」に過剰なまでの自信を持っていたことを「私」という青年にわざわざ強調しているあたりから推察できる。

> あなたは笑うでせう、大学の制帽がどうしたんだとゐつて。けれどもその頃の大学生は今と違つて、大分世間に信用のあつたものです。私はその場合この四角な帽子に一種の自信を見いだした位です。

「先生」の言う「自信」とは何か。そして「あなたは笑うでせう」と、一九一二（明治四五）年東京帝国大学を卒業した「私」という青年との世代差を、なぜこれほどまで意識化しているのだろうか。それは、この引越しのときにはまだ帝国大学がたった一つであったからだ。

京都帝国大学が創設され、唯一の帝国大学が東京帝国大学と相対化されてしまうのが、一八九七（明治三〇）年である。「私」という青年が東京帝国大学を卒業するときには、すでに東北帝国大学と九州帝国大学が設立されていたのである。

この設定から、「先生」が「未亡人と一人娘と下女より外にいない」「素人下宿」に引越した時期が、かなり明確になってくるのである。

もちろん京都帝国大学が創設されたのも、日清戦争での戦争賠償金の力が文部省の予算に反映したからであり、そう考えてみると一九〇〇（明治三三）年に漱石夏目金之助が「第一回文部省官費留学生」として、大英帝国の首都ロンドンに派遣されていた背後にも、同じ力が働いていたことがわかる。

日清戦争に勝利したことによる莫大な戦争賠償金が、安定した利子生活者、一人であれば「利子の半分を使」わないで済む、そうであればこそ「独力で己れを支えて行つた」（下二十一）Ｋを「私の宅へ置いて、二人前の食料を彼の知らない間にそつと奥さんの手に渡」すことが出来たのである。

三　「祖先崇拝」を捨てた者たちの運命

ハーンは「英語の教師として勤務していたとき」に「生徒の英作文」で「" to do honor to our ancestors "（ご先祖様に名誉をほどこす）よりも " to do honor to the memory of our ancestors "（ご先祖様の思い出に名誉をほどこす）の方が正しいなどと言ってしまったこと」を反省し、「新世代の懐疑主義的な青年たち」にも「亡き先祖が草葉の蔭でわれらの振舞を良しとしていると自負している」ことを強調している。彼らは「ご先祖様に恥をかかせては済まぬ」「ご先祖様に名誉をほどこすことは我々の義務である」といった言葉を口にする、とハーンは「日本人にとって死者は生きている」ことを強調する。

> 極東の人にとって死者がいつも一緒にいることは過去何十年にわたり確信に似た何かであった。それだから毎日ご先祖様に話しかける。ご先祖様の幸せのためにがんぱる。そしてよほどの悪者でないかぎり、先祖へのお勤めをないがしろにすることはない。(「祖先崇拝についての若干の考察」)

実は「先祖へのお勤めをないがしろにすること」をあえて選びといったのが、漱石の『心』の「先生」だったのである。自分を裏切って財産をごまかそうとした「叔父の顔を見まいと心のうちで誓つた」「先生」は、「永く故郷を離れる決心」をする。

> 私は国を立つ前に、また父と母の墓へ参りました。私はそれぎりその墓を見た事がありません。もう永久に見る機会もないでせう。

「先生」は「永久」に「父と母の墓」、それは明確に「父」につながる家の先祖が代々葬られていた「墓」を捨てたのである。自ら故郷という地縁を捨てた「先生」は、祖先としての死者たちとのかかわりをも切って捨てたのである。その意味で利子生活

者としての「先生」は、地縁血縁を切って捨てた近代的個人となったのである。

「先生」だけではない。「奥さん」と「御嬢さん」も、自分の夫あるいは父の記憶が刻まれた「市ヶ谷の士官学校の傍」の、「厩」のあった「邸」を売り払って「小石川」に引越したのだから、死者である夫や父との地縁を切り捨てたということになるだろう。

それだけではない。「先生」が「永久に父母の墳墓の地を去ろうと決心した年」に、「K」は、彼を医者にしようとしていた養家を裏切ったことを「手紙を出して、こつちから自分の詐つを白状してしまつた」のである（下二十）。そして「復籍」して「養家から出してもらった学資」を「実家が弁償する事」になり、その「実家」からは「勘当」されてしまったのである。

そうであればこそ、「小さなナイフで頸動脈を切つて一息に死んでしまつた」「K」は、「真宗の坊さんの子」（下十九）であったにもかかわらず、先祖代々の墓には埋葬されなかったのである。それは「先生」の提案であった。

> 国元から K の父と兄が出て来た時、私は K の遺骨を何処へ埋めるかについて自分の意見を述べました。私は彼の生前に雑司ヶ谷近辺をよく一所に散歩した事があります。K には其所が大変気に入つていたのです。それで私は笑談半分に、そんなに好なら死んだら此所へ埋めて遣ろうと約束した覚があるのです。私も今その約束通り K を雑司ヶ谷へ葬つたところで、どの位の功徳になるものかとは思いました。けれども私は私の生きている限り、K の墓の前に跪まずいて日々私の懺悔を新たにしたかつたのです。今まで構い付けなかった K を、私が万事世話をして来たという義理もあつたのでしょう、K の父も兄も私の言うことを聞いてくれました。（下五十）

日清戦争の戦争賠償金をもとに金本位制を実現した大日本帝国臣民であったがゆえに、「先生」は「永久に父母の墳墓の地を去」って「利子の半分」で「奥さん」と「御嬢さん」の住む「素人下宿」で生活し、もう「半分」で「K」のことを「万事世話をして来」ることが出来たのであり、そのことを理由に、「Kの墓」を「雑司ヶ谷」につくったのであった。

「私」という青年が、「先生」と東京で出会ったのは、まさに「日々私の懺悔を新たにした」直後だったのである。

> 私はその人の眼鏡の縁が日に光るまで、近く寄つて行つた。そうして出し抜けに、「先生」と大きな声を掛けた。先生は立ち留まつて私の顔を見た。

「どうして……、どうして……」
先生は同じ言葉を二度繰り返した。（上五）

そして「私」という青年も危篤状態の父を捨てて、つまりは先祖代々の土地と決別して東京に向かったのである。「先生」の遺書を読み直しながら。

「先生」は「K」について、「その男が私の生活の行程を横切らなかつたならば、恐らくこういう長いものを貴方に書き残す必要も起らなかつたでせう」と述べている。「先生」は、「K」が「横切」った「その瞬間の影に一生を薄暗くされて」（下十六）しまったのである。

「先祖へのお勤めをないがしろにすること」を選びとってしまった者たちの精神の葛藤が、漱石の『心』なのだ。それまでの「ご先祖様」との関係とは、まったく異った死者との関係を結んでしまった「先生」にとって、「K」という「死者は生きている」のであり、「静」そして「私」という青年にとっては、「K」と「先生」という「死者」たちが「生き」つづけているのである。

四　「編上げ」の「靴紐」による「拘束」

漱石の『心』と、ハーンの『心』とを読み比べたときに、最も気になったのが「革靴」についての叙述である。

ハーンは「日本文明の真髄」の中で、「日本人は好きでない土地をただ離れ、面倒もなしに、望みの土地へ行く」と述べたうえで、日本人が「生まれつき健脚で一日五十マイル以上歩いて平気」なのは、「革靴を履かないからだ」と言い切っている。

> われわれ西洋人の履物は世間で普通に考えるよりもその特性に意味があるように筆者には思われる。西洋の履物はそれ自体が個人の自由を拘束するものである。価格の高いことも自由の妨げだが、しかしそれよりもあの形こそが甚だしく自由を拘束している。西洋人は靴のために足が原形から歪んでしまった。足は本来そのために進化発展してきた仕事ができなくなっている。（中略）西洋の政治や社会倫理や宗教システムに欠陥があるらしいのは、多かれ少なかれ革の靴を履く習慣と関係しているからではないか。肉体の束縛に甘んじることは間違いなく精神の束縛に甘んじることを助長するはずだ。

ハーンは「靴」を「個人の自由を拘束するもの」としてとらえているだけでなく、二足歩行をするために「進化発展してきた」はずの足が「本来」の機能を果たさなくなっているとまで考えている。

そしてこの靴による「肉体の束縛」が「精神の束縛」につながっていると言うのである。

「K」を自分と同じ「下宿」に住まわせるようになった「先生」は、わざわざ「奥さんとお嬢さんに、なるべくKに話しをするよう頼」（下二十五）んだのである。そして、「Kの心が、段々打ち解けて来」たことを確認して「自分の成功に伴う喜悦を感」（同前）じていた「先生」の気持ちが、突然嫉妬に転換する瞬間を媒介しているのが「革の靴」だったのである。

「神田に用があつて、帰りが何時もよりずつと後れ」た「先生」が「門前まで来て、格子をがらりと開け」た瞬間、「Kの室から」「御嬢さんの声を聞いた」のである。

> 私はすぐ格子を締めました。すると御嬢さんの声もすぐ已みました。私が靴を脱いでいるうち、――私はその自分からハイカラで手数のかかる編上げを穿いていたのですが、――私がこごんでその靴紐を解いてゐるうち、Kの部屋では誰の声もしませんでした。私は変に思いました。ことによると私の疳違かも知れないと考えたのです。しかし私がいつもの通り K の室を抜けようとして、襖を開けると、そこに二人はちやんと坐つてゐました。K は例の通り今帰つたかといいました。御嬢さんも「御帰り」と坐つたままで挨拶しました。私には気の所為かその簡単な挨拶が少し硬いやうに聞えました。（下二十六）

「先生」の嫉妬のはじまりは、「靴の紐を解いてゐるうち」、「Kの部屋」に「K」と「御嬢さん」「二人」が「ちやんと座つてゐ」たのに、それまでの会話を「先生」から隠すように「誰の声も」しなかったからである。「K」と「御嬢さん」の間に、自分に知られたくない秘密があるのかもしれないという疑念が、この後「先生」の「心」にまとわりつくのであった。

この疑念が、一気に嫉妬に転換するのが、夏休みを経ての「十月の中頃」（下三十二）であった。この日「先生」は「寝坊」をしてしまったので、「日本服のまま急いで学校へ出た」のであった。したがって「穿物（はきもの）も編上（あみあげ）などを結んでゐる時間が惜しいので、草履を突つかけたなり飛び出した」のだった。

そして帰ってくると、「Kの部屋」から「御嬢さんの笑い声」が「先生」の「耳に響」いた。「私は何時ものやうに手数のかかる靴を穿いていないから、すぐ玄関に上がつて仕切の襖を開け」たが、「御嬢さんはもう其所にはいなかつた」のであり、「Kの室から逃れ出るやうに去るその後姿」を見たのである。以来「先生」は「御嬢さんがわざわざ私の室へ出るのを回避して、Kの方ばかりへ行くやうに思われる事さえあつた」と、告白している。

しかも「先生」はそうした嫉妬の感情が、「御嬢さんを専有したいという強烈な丁念に動かされていた」からだと自己分析していたのである。

「先生」の嫉妬心が芽生え、そして肥大化していく契機は、「靴の紐を解いてゐる」間の、「Kの部屋」における沈黙と、その「手数のかかる」「編上げ」の「靴紐」を解く「手数のかか」らなかった時の、瞬間的に「御嬢さん」が「Kの部屋」から立ち去る後ろ姿だったのである。

「靴紐を解いてゐるうち」に、なぜ「Kの部屋」のことがそれほど気になったのかと言えば、それはその直前に明らかにされているこの「軍人の遺族の家」の間取りにある。

> 声は慥にKの室から出たと思ひました。玄関から真直に行けば、茶の間、御嬢さんの部屋と二つ続いていて、それを左へ折れると、K の室、私の室、といふ間取なのですから、何処で誰の声がした位は、 久しく厄介になってゐる私には能く分るのです。

「靴」を批判した同じ「日本文明の真髄」でハーンは、「西洋建築は永続を目指すが、日本の建築は束の間のものである」と指摘している。「Kの室」と「私の室」の間の襖に「K」の頸筋から一度に迸しつた」「血潮」（下五十）に「その夜の記憶を繰り返すのが苦痛」（下五十一）だったので「奥さんも御嬢さんも」一緒に「私が今ゐる家へ引越した」（下五十一）のである。小石川の「素人下宿」の運命は「束の間」であったのだ。やはり漱石の『心』は、ハーンの『心』を強く意識していたと思えてならない。

【概要】

文化資源としての作家と文学

――ラフカディオ・ハーンの可能性――

小泉　凡

はじめに

作家や文学は、従来、愛読者の鑑賞対象、研究者の研究対象、愛好者の顕彰対象としておもに機能してきたと言えるのではないだろうか。近年、ハーンに関していえば、さらにこの枠が拡大され、研究成果を活かした資源化の傾向が世界各地でみられる。本稿では、地域に蓄積された未評価の文化に光をあて、現代社会に活かそうという文化資源学の着想に基づき、主として筆者自身が関わる実践活動を通して、「資源」としてのラフカディオ・ハーンの可能性について考えてみたい。

１．資源化の基盤となる研究の広がりと深化

近年のハーン研究の広がりと深化は、ハーン自身の多面性が根底にあると考えられる。かつて精神医学者のイアン・スティーブンスン博士はバージニア大学でハーンの「勝五郎の再生」に出会い、医療資源としての前世記憶の研究の必要性に気づかされたという。

ハーンが昭和の戦後史に与えた影響も、マッカーサーや側近ボナー・フェラーズの資料調査が進めば、新しい側面が見えてくるかもしれない。戦後の象徴天皇制の推進に、ハーンの愛読者ボナー・フェラーズが果たした役割の重要性はすでに指摘されてきたが、筆者が 2017 年 9 月にマッカーサー記念館アーカイブスを訪問したところ、マッカーサーの個人蔵書中に 7 冊のハーンの著作があり、マッカーサー自身がハーンを読んでいた可能性もでてきた。

研究は資源化を考える際のベースとなるもので、多分野からのアプローチによる研究活動の深化、発展は極めて重要である。

２．小泉八雲記念館の役割

2016 年 7 月に 32 年ぶりに増床・リニューアルした松江の小泉八雲記念館では、ハーンの基本情報を通して、ハーンの基底にある「五感の力」と「オープン・マインド」という 21 世紀に必要な感覚や思考を訴える展示としている。第 2 展示室に設置した「怪談ルーム」では、松江出身の俳優・佐野史郎氏の朗読、ギタリスト・山本恭司氏の音楽による山陰の怪談 5 話の視聴ができるようにした。企画展に因んだ関連イベントによる集客、子どもたちや島根県立大生を対象に教育活動にも力を入れている。開館後、入館者総数は増加していないが、外国人観光客

は3－4倍に、一人あたりの滞在時間は3倍にも増加している。焼津小泉八雲記念館、池田記念美術館、富山大学ヘルン文庫などとも連携をはかり、世界への発信とともに地域の生活者の誇りとなるようなミュージアムを目指していきたい。

３．社会に活かされる「ハーン」（地域教育、地域活性化、文化創造、国際交流）

(1)子ども塾―スーパーへるんさん講座―

2004年から松江市ではハーンの追体験を通して五感力を育む「子ども塾」を開催し、参加した小学生の地域文化への関心の高まりを生み出している。ハーン没後百年を迎え、未来の松江を担う子どもたちに、現代社会におけるハーンの意味を継承する企画として実施した。バーチャルの世界にいる時間が長くなった子どもたちにとって、五感力の欠如は、「感覚を統合して現実をリアルなものとして感じ取る回路がうまく機能していない」（斎藤孝・山下柚実『「五感力」を育てる』中公新書ラクレ,2002）ことであり、自分と他者の存在感さえ希薄になるという。ハーンを学ぶのではなく、ハーンが明治の松江で五感を研ぎ澄ませて観察した行為を現代の松江で追体験することから、「スーパーへるんさん講座」と名付けた。

「子ども塾」の効果を数字で測ることは難しい。しかし、毎回実施する参加者のアンケートや記念誌『子ども塾スーパーヘルンさん講座の10年』に寄せられた文章から総合的に判断すると、「五感を使うことで地域の気づかなかった魅力を発見できた」「さらにそれを追及して見たくなった」という点に収斂される。その点では、「子ども塾」の実践は、広い意味の「地域教育」であり、教育を通じた「地域おこし」であるといえるだろう。

(2)松江ゴーストツアー―怪談の資源化をめざす文化観光―

城下町松江に伝わる豊富な怪談を資源化する試みをNPO法人松江ツーリズム研究会と連携し手がけている。2005年にアイルランドの首都ダブリンで「ダブリン・ゴースト・バス―ダブリンのとり憑かれた聖堂の謎解き」を体験したが、そのアイディアと充実した着地型観光プランの内容に刺激され、松江でも2006年8月に試験的に怪談ツアーを実施した。その後、2008年度の国土交通省「ニューツーリズム創出・流通促進事業」の助成金を得て、同年8月から「松江ゴーストツアー」を開始した。

実施にあたり語り部を公募し、24名の中から4名の語り部を選任し、ハーン研究・地域文化研究・口承文芸研究・語りの技法・ホスピタリティという5つの観点で研修を実施した。ガイドの質の保証は耳で楽しむ夜の文化探訪ツアーではきわめて重要な意味をもつからだ。内容は、日没後に松江城内のギリギリ井戸・月照寺・清光院・大雄寺など主にハーンが再話、発信した怪談ゆかりの地を語りに耳傾けながら2時間余り徒歩で巡るものだ。

2011年を境に県内者と県外者の比率が大きく逆転し、現在では県外からの参加者が7割以上を占めている。2017年も集客は堅調で、2008年の開始時からののべ人数は5172人、回数は316

回に及んだ。全国的にも着地型観光のひとつの見本として注目を集めている。

さらに、松江ゴーストツアーから、焼津ゴーストツアー、彦根ゴーストツアー、琴浦ミステリーツアーという同じ趣旨の着地型観光プランが誕生し、地域の文化資源を活かした活性化に貢献している。

(3)松江怪喜宴「松江怪談談義」「怪し会―八雲―」

2012 年から、作家・怪異蒐集家の木原浩勝氏と共に、怪談の可能性を探求する目的で、「松江怪談談義」を行っている。そのなかで、木原氏は「境港は妖怪のふるさと、出雲は神々のふるさと、雲南は神話のふるさと」と目に見えないものを文化資源として謳っている。ならば、ハーンが採集、再話した豊かな怪談をもつ松江を「怪談のふるさと」にしようと発言されたことがきっかけで、松江の新しい魅力として「怪談」に光を当てるまちづくりが本格的に動き始めた。

その後、声優の茶風林氏が率いる「怪し会」のメンバーにより、ハーンの怪談と現代怪談を交互に語るイベント「怪し会―八雲―」も同時開催されるようになり、県外からのファンもこれに合わせて訪れるようになってきている。

松江を含む山陰地方にはもともと怪談を育む土壌として、人知を超えた力、すなわちご縁を大切にする精神風土が存在していたと考えられる。「怪談のまち」は「ご縁を尊ぶまち」でもあること、また怪談に「一面の真理」を見出したハーンの思いを念頭において、今後も自信をもって怪談をまちづくりに活かしていくべきだと考えている。

(4)島根県立短大「ゴーストみやげ研究所」の活動

筆者の勤務先短大では、怪談やハーンを地域活性化につなげたいと願う学生たちが「ゴーストみやげ研究所」というサークルを立ち上げ、「芳一の耳まんぢう」、「ろくろ首だんご」、絵本『耳なし芳一リターンズ』などをすでに制作している。これは、島根県立大学が学生の夢を叶えるために経済的支援を行う「キラキラドリーム・プロジェクト」での採択がきっかけとなって誕生したサークルだ。学生中心の産学官連携の在り方として、ふさわしいものと考えている。「芳一の耳まんぢう」は JR 松江駅で販売され、人気みやげ商品にもなっている。また地域のイベントの際には積極的にブースを出してアピールにつとめている。

静岡県立大学でも細川光洋教授のゼミ学生が、ハーンと怪談を活かして、焼津のまちに賑わいを創出しようという意図で資源化に取り組み、同地でも手ぬぐい、シールなどいくつかの商品がすでに製作されている。

2017 年 10 月には、焼津小泉八雲記念館開館 10 周年記念事業として、「地域資源としての文学」のテーマで両大学の学生がシンポジウム発表を行った。来場者からは、斬新な内容が好評だった。地域活性化だけでなく文学の若年層への広がりという視点でも注目されよう。

(5)小泉八雲朗読のしらべ

松江出身の俳優佐野史郎氏と、同じく松江出身の世界的なギタリスト山本恭司氏による、ハーンの作品を朗読と音楽で堪能するユニークな文化イベントを、2008年から毎年、テーマを変えて実施していている。筆者は朗読に先立つ導入のトークと監修を担当している。2017年のテーマは「夢幻―夢とうつつのあわいに現れるものたち―」。すでに11回目を迎え、全国からファンも来松するようになり、文化創造への寄与とともに交流人口の増加にも貢献している。今では佐野・山本両氏のライフワークともなり、また松江以外の各地から公演依頼が届くようになった。（2017年は彦根、下関）2014年にはギリシャのレフカダとコルフ、2015年にはアイルランドのダブリン、ウォーターフォード、ゴールウェイでの公演も行い、字幕付きの日本語の朗読であったが、会場はスタンディング・オベイションとなった。従来とは異なる文学の表現法、楽しみ方として今後の進展が期待される。

(6)アートで活かす小泉八雲の精神性～”The Open Mind of Lafcadio Hearn展”の開催～

ギリシャ人のハーン愛好者でアート・ディーラーのタキス・エフスタシウ氏の提案により、2009年より「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン」のテーマによる造形美術展や国際シンポジウムを行ってきた。発端は2008年にタキス氏が、ハーンの精神性の根幹を「オープン・マインド」ととらえ、共生社会が求められる21世紀に必要な思考として、世界中の人がわかりやすいアートを通して広めようと提案したことによる。

2009年にはギリシャ・アテネのアメリカン・カレッジで第1回目の造形美術展が開催され、翌、2010年は松江城の天守閣で、2011年はニューヨークの日本クラブで、2012年にはニューオーリンズのテュレーン大学で、主催者と作品を変えて実施された。いずれもハーンと関わりの深い土地である。主としてウェブ上でアーティストに呼びかけ、ハーンのオープン・マインドに共感する作家に造形作品を寄贈してもらうというやり方は文化資源学的着想に基づくものだ。初回のアテネでのオープニングには500人が訪れ、松江開催時にも、期間内の松江城登閣者数が例年の1.5倍となった。

2014年にはハーンの生誕地ギリシャ・レフカダで、あらためて八雲の「オープン・マインド」とは何かを検証する国際シンポジウムを行い、ギリシャ・アイルランド・マルティニーク・日本出身の9名のパネリストによる発表とパネル・ディスカッションを実施した。ここで導かれた方向性は「自分がこうだと思っていることが絶対ではなく、それが最終の結論でもなく、そこから次に新しい道が開かれていく。子どもたちには常にそういう新しい道を開いていくという場を提供しなければならない」という内容だった。

シンポジウムにあわせてレフカダにオープンしたラフカディオ・ハーン・ヒストリカル・センターには、その後、ギリシャ各地から子どもたちが遠足や社会科見学で訪れ、ワークショップも開催されてハーンのオープン・マインドや異文化理解の大切さを学んでいる。

(7)トラモア「小泉八雲庭園」(Lafcadio Hearn Gardens)のオープン（2015年6月26日）

幼年期のハーンがよく訪れたアイルランド南部の保養地トラモアでは、2012 年、歴史家のアグネス・エイルワード氏が中心となり、ウォーターフォード市が保有する 1 ヘクタールの土地をに「ハーンの庭」をつくる構想が持ち上がった。トラモア開発トラスト（Tramore Development Trust）という既存の NPO 組織を活用し、その下部組織として「ラフカディオ・ハーン・ガーデン・プロジェクト」を組織し、日本万国博覧会記念基金やアイルランド政府の支援を得て、わずか、2 年半ほどで完成にこぎつけた。ジャポニズムを反映した日本庭園ではなく、ハーンの人生を「旅の始まり―トラモアとの縁」「船出―未来の予感」「アメリカへの旅」「ギリシャの庭」「日本への到着」「せせらぎの庭」「森林」「平和と調和の庭」「生き神様の伝説」というテーマを設定した 9 つの庭を配置し、回遊することでハーンの多様性や自然と人間の関係の在り方を探求しようという趣旨のユニークな庭園だ。

維持管理に際して CE スキームという失業者対策の助成を利用し、庭園管理技術とハーンの知識を学んだ訓練生がガイドにあたっている。雇用対策とも連動した管理運営システムも現代にふさわしい。2017 年 7 月の訪問時には、ビジターセンターや案内看板も整い、トラモアの新しい文化資源として、定着、発展する状況がみられた。

おわりに：持続可能な共生社会をめざす動きの中で

経済学者のガルブレイスは、将来は GDP(gross domestic product)から GNE(gross national enjoyment)の時代へとシフトすると予言した。また宗教学者のハービー・コックスは“to have”から”to be”の時代に移行すると指摘した。つまり、「どれだけものをつくるか、もつか」から「どれだけ人生を楽しむか、どのように生きるか」へと価値観がシフトするということだ。そういう時代を考える時、文学研究や普及活動の蓄積を踏まえた資源的活用は非常に有効だと思われる。ただ、文化がソースとしてしっかり活かされているか、一過性のエンターテインメントではなく持続可能な文化創造になっているかをしっかりと見極めなければならない。

上記の例からはその効果としての地域活性化、とりわけ「関係人口」（定住人口でも交流人口でもない、地域に多様に関わる応援団）を育む点で貢献しているのではないかと感じる。また、人文科学の新しい社会貢献のあり方としても有意義であると考えている。

【論文】

ラフカディオ・ハーン「守られた約束」について

――原話と再話の比較から見えるもの――

川澄亜岐子

一．テクストについて

「守られた約束」（“Of a Promise Kept”)は、1901 年に刊行されたラフカディオ·ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904)の著作集『日本雑記』(*A Japanese Miscellany*）に収められている再話作品である。原話となったのは「菊花の約」という物語で、上田秋成『雨月物語』（安永 5 年刊）に所載されている。ただし、ハーンが自分で原話を読んだ可能性は低く、日本人の家族や知人を通してこの物語を知ったと思われる[i]。

『雨月物語』は中国などの物語を原拠とする翻案小説 9 編から成り、今日につながる怪談文学の嚆矢的作品と位置付けられてきた[ii]。その怪奇は超自然的な出来事を扱う単純な怪異にとどまらず、現実生活に対する秋成の屈折した思いがその背景として見出されてきた。高田衛は、秋成の翻案の手法を日本古典の伝統と中国文学の伝統との縒り合さった中に「自己の説話と文章」を織り込んだものと捉え、この方法によって「言葉の自立的世界としての文学性」が担保されていると述べる。その上で、ここに収められた物語は「封建社会のさまざまな社会現実や、人の世の日常性の卑小や醜悪や不幸のみじめさ、そうしたものへの作者自身のはけ口のない憤りや焦燥などの反発力」によって支えられているとの見方を示す[iii]。

作品の深層に現実社会に向けられた作者の批判的意識を読みとる解釈は、ハーンの「守られた約束」についての論考にも受け入れられてきた。田代三千稔は生育環境がハーンと秋成の性格に与えた影響に注目し、二人には共通する気質が見られるとしたうえで、ハーンの潔癖な性格とそれゆえの社会に対する幻滅が、秋成の類似する側面に共鳴して「守られた約束」に結晶したという見方を示す[iv]。この立場は宮嶋夏樹にも共有される。宮嶋はさらに踏み込んで、田代が社会への幻滅と大きく捉えた点を、ハーンの近代日本社会に対する反発に限定する。

> 欧米の文化殊にキリスト教の影響が、「旧日本」の美しい徳の一つであつた信義の念を、現代の人びとの心から奪ひ去つていくといふ嘆きが、「約束」［「守られた約束」］といふ作品の底を流れてゐるのだと思ふ。さうして、周囲の俗物を嫌ひ、その意味で孤独な彼の心が、俗界を離れた境地に自適の生活を求めたいと願ふやうになるのも自然のなりゆきであらう。[v]

明治維新以来、日本は近代化の名の下に猛烈な勢いで西洋化を推し進めた。だが、その一方で失われるものもあり、ハーンがそれらに心を寄せて著書に繰り返し書き留めたことは周知の通りである。上の引用では「信義の念」が前近代的な精神として挙げられ、それが近代化に伴って失われることへの懸念が「守られた約束」に通底する主題であることが説かれている。

田代と宮嶋の研究は、ともにハーンと秋成の伝記的な共通点や類似性から作品を読み解いてきた。その結果、二つの作品はともに書き手が抱える現実社会への鬱憤が反転し、昇華したものという点で一致することが説かれてきた。その一方、作品の中核に関わるような議論は深められていない。それぞれの作品の文体や、場面の構成、その特徴などについて部分的に言及されることがあっても、作品全体を見渡すような議論はほとんど進んでいないといえる。その理由の一つとして、再話とは原話を書き直したものであるという認識に求めることができる[vi]。「守られた約束」においても、原話の主題を引き継いでいることが自明視されているように思われる。しかしながら、原話で頻繁に繰り返される「信義」や「まこと」といった言葉は、再話には訳出されておらず、またこれらの語が多用される場面の多くは省略されている。

本稿では、「信義」がどのように扱われているのかという点から秋成とハーンの作品を読んでみたい。原話において「信義」が形成される過程を辿り、それがどのような概念として示されるのかということを検討したうえで、それがハーンの再話ではどのように書き換えられているかという問題を考える。これらの作業を通して、ハーンが秋成の原話に何を読みとったのかということについても考察する。

二. 「菊花の約」――「信義」の過程

「菊花の約」は、序文、本編、結びという三つの部分から成る。ハーンが再話したのはその本編の部分で、次のような話である。

播磨の国加古の駅に丈部左門という博士がいた。ある時、彼は知人の家で病気の武士と出会う。武士は赤穴宗右衛門という松江出身の武士で近江に滞在していたが、故郷の富田城が襲撃され、主君が討死にしたとの知らせを聞いて故郷に戻る途中だという。左門は献身的に武士を看病し、二人は友人同士となった。そして宗右衛門の病が癒えると、二人は義兄弟の契りを交わし、左門は宗右衛門を自宅に滞在させた。

初夏、宗右衛門は旅を再開することを決め、左門とその母に別れの挨拶をする。この時、左門からいつ帰って来るのか決めてほしいと請われたので、宗右衛門は9月9日に再会することを約束して出発する。

約束当日、左門は朝早くから宗右衛門を迎える準備を整えるが、彼が帰ってきたのはすっかり夜が

更けてからだった。家に通された宗右衛門は、物思いに沈んだ様子で食事にも手を付けない。左門が訝ると宗右衛門はようやく口を開き、自分はもはやこの世の者ではないと言って旅の一部始終を次のように語った。宗右衛門は松江に着くと従弟の赤穴丹治を訪ね、彼の勧めで尼子経久に会見した。その帰り道、宗右衛門は経久の命令を受けた丹治によって、彼の自宅に監禁されてしまう。なすすべもないまま約束当日となり、宗右衛門は悩んだ末に、「魂よく一日に千里をもゆく」という諺を思い出して自害した。そして、左門との約束を果たすべく、幽霊となって会いに来たという。語り終えると、宗右衛門は消えてしまった。残された左門は大声で泣き、その声を聞いて起きてきた母親とともに、その夜は泣き明かす。

翌朝、左門は改まって母親に挨拶し、出雲に向かう。そして松江に着くと、左門は真っ先に丹治の家を訪ね、彼の宗右衛門に対する仕打ちを厳しく非難する。そして家族の目の前で彼に斬りつけると、騒ぎに紛れて逃げ出した。だが、この知らせを聞いた経久は、あえて家臣に左門の跡を追わせなかった。

この作品において、「信義」はどのように描かれているのだろうか。ここでいう「信義」とは、「まこと」、「実」、「情」などとともにこの作品における重要な概念で、左門と宗右衛門のそれぞれの人柄や、二人の関係を表す語としても重要である。

まず、左門の「信義」について確認する。本編の冒頭には、「播磨の国加古の駅(うまや)に丈部左門(はせべもん)といふ博士(はかせ)あり清貧(せいひん)を憩(あまな)ひて。友とする書(ふみ)の外はすべて調度(てうど)の絮(わつらはしき)煩(いと)を厭ふ」とあり、左門が質素ながらも高尚で、潔癖な人物として設定されている[vii]。また、病床の宗右衛門を紹介された際は、彼に同情し、「士(し)憂(うれ)へ給ふことなかれ。必救(すく)ひまいらすへし」と声をかけて手ずから薬を処方したり、病人に粥を与えたりして、その様子は「病を看(み)ること同胞(はらから)のごとく。まことに捨かたきありさまなり」といわれる[viii]。左門にとっての「まこと」とは、困っている者がいればすかさず手を差し伸べ、親身になって接する態度であるといえよう。だがこれは、ひとえに彼の性格によるとは言い切れない。江戸時代、儒者には医学の心得があることも多かったことを踏まえれば、左門の思いやり深い態度は儒者としての意識の表われであるといえる。彼は儒者としての自己を強く意識しており、その役割を全うしようという気持ちを持っている。このように考えると、左門の「まこと」には儒者という社会的立場が影響しているといえる。

次に、宗右衛門の「信義」に移る。秋成の原話において、宗右衛門の人柄は左門を通して報告されることが多く、左門の場合のように語り手の判断が直接示されることは少ない。左門が宗右衛門に対して初めて「信(まこと)」という言葉を使うのは、二人が義兄弟となり、宗右衛門が左門の母に挨拶したいと言った時である。左門は宗右衛門の申し出を「信(まこと)ある言(ことば)」と受け取って喜ぶが、この判断に至るには、宗右衛門が信頼に足る人物であるという左門の確信が不可欠である。では、左門が宗右衛門の信義を確信するようになった根拠はどこに求めることができるだろうか。

左門が最初に宗右衛門の信義に触れたのは、宗右衛門が病床で語った身の上話であると考えられる。宗右衛門が主君の塩冶掃部介に兵学を講じていたことや、密使として近江の佐々木氏綱の元に送られたことから、彼が主君から厚い信頼を受けていたことがうかがわれる。また宗右衛門の方でも、掃部介が亡くなったと聞くと「もとより雲州は佐々木の持国にて。塩冶は守護代なれば。三沢三刀屋を助けて。経久を亡ぼし給へ」と氏綱に直訴したり、それが聞き入れられなければ「己が身ひとつを竊みて国に還る」ことを決めたりするなど、主君に対する忠誠な態度が語られる[ix]。

宗右衛門の場合、忠誠心は主君だけに向けられているのではない。彼は見ず知らずの自分を看病してくれる左門に対し、「愛憐の厚きに泪を流して」、「死すとも御心に報ひたてまつらん」と言ったり[x]、「身にあまりたる御恩にこそ。吾半生の命をもて必報ひたてまつらん」と言ったりしている[xi]。これらの宗右衛門の言葉は後の展開の伏線であるが、左門との関係に引き寄せると宗右衛門が左門に対して深い恩義を感じていることを示すものである。左門に対する恩義は、その後の宗右衛門の行動を決定する規範として作用しているように思われる。

三. 「守られた約束」――「勇気と友情」の物語

ハーンの「守られた約束」は大筋で原話の展開を踏襲しており、原話との間にあらすじ上の大きな違いはない。ただし、再話が原話よりも大幅に短い物語になっていることは注目に値する[xii]。ここでは、ハーンがどのように原話を書き換えたのか、三つの場面を取り上げて検討する。

最初に取り上げるのは、左門と宗右衛門が約束を交わす場面である。まず、原話から引用する。

> 赤穴母子にむかひて。吾近江を遁 来りしも。雲州の動静を見んためなれば。一たび下向てやかて帰来り。菽 水の奴 に御恩をかへしたてまつるべし。今のわかれを給へといふ。左門いふ。さあらは兄長いつの時にか帰り給ふへき。赤穴いふ。月日は逝やすし。おそくとも此秋は過さじ。左門云。秋はいつの日を定 て待べきや。ねがふは約し給へ。赤穴云。重陽の佳節をもて帰来る日とすべし。左門いふ。兄長必此日をあやまり給ふな。一枝の菊花に薄 酒を備へて待たてまつらんと。互 に情 をつくして赤穴は西に帰りけり。[xiii]

故郷の様子を確認したら帰ってくるという宗右衛門に対し、左門はいつ帰って来るのか、日にちを定めてほしいと食い下がる。結局、確たる理由もないまま、宗右衛門は9月9日に帰ることを約束して出発する。この約束について、宗右衛門が「左門の激情に引きずり込まれた結果」であるという指摘がある[xiv]。確かにこの場面だけ見れば左門の性急さが際立ち、それに押し切られる形で宗右衛門が左門の頼みに応じたというように読める。しかし、そうであるならば、なぜ宗右衛門は左門の頼みを断ることができなかったのだろうか。滞在先の近江から身一つで逃れてくるほどの行動力の持主が、な

ぜ求められるままに約束を交わしてしまったのだろうか。それは、彼が左門に対して恩義を感じていたためではないかと思われる。二人の間には、旅先で病に倒れた宗右衛門を左門が看病し、回復した後は義兄弟の契りを結んで宗右衛門を左門の家族の一員に加えたという経緯がある。宗右衛門は左門の親切に十分報いていないという思いから、義弟である彼との約束に応じてしまったのではないだろうか。

一方、再話では約束の場面は次のように描かれる。ハーンは原話にあった左門の生活環境、宗右衛門との出会いの経緯などの情報を一切省略し、この場面から再話を始める。

> "I shall return in the early autumn," said Akana Soëmon several hundred years ago, —when bidding good-bye to his brother by adoption, young Hasébé Samon. The time was spring; and the place was the village of Kato in the province of Harima. Akana was an Izumo samurai; he wanted to visit his birthplace.
>
> Hasebe said:
>
> "Your Izumo—the Country of the Eight-Cloud Rising—is very distant. Perhaps it will therefore be difficult for you to promise to return here upon any particular day. But, if we were to know the exact day, we should feel happier. We could then prepare a feast of welcome and we could watch at the gateway for your coming."[xv]

再話でも、約束は左門から切り出される。しかし、ここには原話のような切迫感はなく、むしろ加古と出雲の間の距離を考慮して、遠慮がちに約束を切り出す左門の姿が描かれている。また、再話には宗右衛門が武士であることは書かれているが、左門の職業や身分など社会とのかかわりを示す情報や、宗右衛門と義理の兄弟になった経緯などへの言及はない。約束はただ二人と未来をつなぐものとして提示され、過去のとのつながりは断たれているといえる。

この違いを通して、信頼関係の捉え方をめぐる秋成とハーンの違いが見えてくる。秋成は当事者の過去や、関係が深まっていく過程の中で信義を捉えようとする。ここでは、信義は相手に対する誠実さばかりでなく、過去によっても左右されるのである。これに対し、ハーンは信頼関係と過去の事情を切り離し、約束そのものに焦点を当てる。そして、約束を左門と宗右衛門が築いてきた関係の蓄積の中で捉えるのでなく、それぞれの個人がどのようにして約束と関わるかという観点から作品を描こうとしているように思われる。

次に、松江から帰ってきた宗右衛門が、旅の経緯を左門に説明する場面を取り上げる。まず原話では、宗右衛門が部屋に通された後も口も利かず、酒や肴にも手を付けないなど不自然な様子であることが強調される。それを左門が訝ると、宗右衛門はようやく重い口を開く。

賢弟が信(まこと)ある饗応(あるじぶり)をなどいなむべきことわりやあらん。欺(あざむ)くに詞なければ。実(じつ)をもて告(つぐ)るなり。必しもあやしみ給ひそ。吾は陽世(うつせみ)の人にあらず。きたなき霊(たま)のかりに形(かたち)を見えつるなり。左門大に驚きて。兄長(このかみ)何ゆゑにこのあやしきをかたり出給ふや。更に夢ともおぼえ侍らず。[xvi]

ここにおいて、宗右衛門の話が自分は死者であるという告白から始まる点は重要である。にわかには信じがたい内容であるが、宗右衛門は「信(まこと)」、「実(じつ)」といった言葉を重ね、話が真実であり、誠意ある告白であることを左門に伝えようとする。この告白によって宗右衛門の不自然な態度の謎は解かれるが、読者は即座に次の謎に直面する。宗右衛門がなぜ、どのようにして亡くなったのかという謎である。したがって、原話において、この場面の主眼は宗右衛門が亡くなった経緯に向けられているといえる。

続いて宗右衛門の亡霊は、丹治によって監禁されたといういきさつを説明し、その間の苦悩を次のように語る。

此約(ちかひ)にたがふものならば。賢弟吾を何ものとかせんと。ひたすら思ひ沈(しず)めども遁(のが)るゝに方なし。いにしへの人いふ。人一日に千里(ちり)をゆくことあたはず。魂(たま)よく一日に千里をもゆくと。此ことわりを思ひ出て。みづから刃(やいば)に伏(ふし)。今夜陰風に乗(のり)てはる／＼来り菊花の約(ちかひ)に赴(つく)。この心をあはれみ給へといひをはりて泪わき出るが如し。[xvii]

宗右衛門の義理堅い性格を考えた時、「あはれみ給へ」という言葉はあまりに重い。宗右衛門にとって、約束を守ることは左門への信頼を証明するだけではない。病床の彼を看病し、義兄弟として家族に迎えてくれた左門に対して、せめてもの感謝を示したいという思いからも、宗右衛門は約束にこだわったのではないだろうか。約束が守られなければ、宗右衛門は左門への恩を仇で返すことになり、左門から恩知らずと蔑まれるかもしれない。そのことが、宗右衛門の苦悩の内実だったのであり、彼を自害に追い込んだ一因だったのではないだろうか。ゆえに、常になく切迫した様子で宗右衛門が発した「この心をあはれみ給へ」とは、約束を守ることができなかったことへの無念、左門に対する罪悪感、そしてこの状況に対するやりきれない思いなどが混ざりあった深刻な言葉なのである。また左門にとっても、この言葉は特別な意味を持ったものと思われる。左門が丹治に対して怒りを覚えることは宗右衛門の話によって十分納得できるが、「泪わき出るが如し」という宗右衛門の様相は彼の怒りをいっそうかきたて、復讐を決意させるのに決定的な役割を果たしたと思われる。

これに対して、ハーンの再話では、宗右衛門の正体をめぐって原話との間に違いが見られる。再話

においても、宗右衛門は口をきかず、食事にも手をつけないが、宗右衛門の様子を左門が不思議に思ったり、ことさら不自然さが示唆されたりするような表現が見られないことは再話の特徴である。加えて、宗右衛門の生死が直接には明かされないことも原話と再話で異なる。再話では、宗右衛門は"Now I must tell you how it happened that I came thus late."と言って旅の経緯を語りだすが、直接には自分の生死に言及しない[xviii]。

宗右衛門の話が緊張感を帯びてくるのは、後半になってからである。彼は松江で監禁されたことを話し、今日まで囚われの身だったと言う。

> ["]After I left his [Tsunéhisa's] presence he ordered my cousin to detain me—to keep me confined within the house. I protested that I had promised to return to Harima upon the ninth day of the ninth month; but I was refused permission to go. I then hoped to escape from the castle at night; but I was constantly watched; and until today I could find no way to fulfil my promise...."
>
> "Until to-day!" exclaimed Hasébé in bewilderment; —"the castle is more than a hundred ri from here!"[xix]

加古と出雲が遠く離れていることや、厳しい旅路であることは原話でも触れられているが、再話は原話以上にこの情報を強調し、繰り返し言及してきた[xx]。それが、ここでにわかに不気味な意味を帯びてくる。加古と出雲は百里以上も離れており、片道だけでも数日かかる道程である。しかし、宗右衛門は今朝まで松江の赤穴丹治の家にいたという。「今日まで！［中略］城はここから百里以上も離れているというのに！」という左門の言葉は宗右衛門の話の矛盾点を浮き彫りにし、改めて宗右衛門の存在を不気味な者として提示する効果がある。だが狼狽する左門とは対照的に、宗右衛門は落ち着いた調子で話し続ける。

> "Yes," returned Akana; "and no living man can travel on foot a hundred ri in one day. But I felt that, if I did not keep my promise, you could not think well of me; I remembered the ancient proverb, 'Tama yoku ichi nichi ni sen ri wo yuku' ('The soul of a man can journey a thousand ri in a day'). Fortunately I had been allowed to keep my sword;—thus only was I able to come to you.... Be good to our mother."
>
> With these words he stood up, and in the same instant disappeared.
>
> Then Hasébé knew that Akana had killed himself in order to fulfill the promise.[xxi]

再話では、明確な形で宗右衛門の生死が明かされることはない。宗右衛門は左門に向って「魂よく一日に千里をゆく」という古い諺を思い出したことや、最後まで帯刀を許されていたと話すことで、

自害したことを示唆するにとどまる。そして、左門は宗右衛門の姿が見えなくなってから、赤穴が約束を守るために自害したことを悟るのである。

宗右衛門の話は淡々と進行し、原話のような重苦しさがないこともまた再話の特徴である。原話にあった宗右衛門の絶望感や、自害に関する具体的な表現が再話にはないことが、このような印象の違いを生んだのであろう。中でも、宗右衛門の最期の言葉の違いは大きい。すでに見たように、原話では宗右衛門は涙ながらに「この心をあはれ見給へ」と言い、無念の思いを吐露した。だが再話では、宗右衛門は最後まで冷静な様子を貫き、最後の言葉も“Be good to our mother.”という儀礼的なものであった。

続いて、左門による丹治への復讐の場面を取り上げる。秋成の原話では、翌日、左門は母に向って次のように丁寧な挨拶をして、松江に向けて出発する。

> 明る日左門母を拝していふ。吾幼なきより身を翰墨に托るといへども。国に忠義の聞えなく。家に孝信をつくすことあたはず。徒に天地のあひだに生るゝのみ。兄長赤穴は一生を信義の為に終る。小弟けふより出雲に下り。せめては骨を蔵めて信を全うせん。公尊体を保給ふて。しばらくの暇を給ふべし。[xxii]

左門の言葉からは、彼が宗右衛門の帰還を「信義」の行為と捉えていることがわかる。そして、約束を果たすために命を断った宗右衛門の「信義」に応えるべく、左門は「せめては骨を蔵めて信を全うせん」と決断するに至る。そして寝食も忘れるほどの勢いで道中を急ぎ、十日かけて松江に着くと、まず丹治を訪ねた。そして、中国の故事を引くなどして「士たる者」の「信義」を説くと、次のように述べて丹治を非難する。

> 伯氏宗右衛門塩冶が旧交を思ひて尼子に仕へざるは義士なり。士は旧主の塩冶を捨て。尼子に降りしは士たる義なし。伯氏は菊花の約を重んじ。命を捨てて百里を来しは信ある極なり。士は今尼子に媚て骨肉の人をくるしめ。此横死をなさしむるは友とする信なし。経久強てとゞめ給ふとも。旧しき交はりを思はゞ。私に商鞅叔座が信をつくすべきに。只栄利にのみ走りて士家の風なきは。即尼子の家風なるべし。さるから兄長何故此国に足をとゞむべき。吾今信義を重んじて態々こゝに来る。汝は又不義のために汚名をのこせとて。いひもをはらず抜打に斬つくれば。一刀にてそこに倒る。[xxiii]

左門は「信(まこと)ある極(かぎり)」、「友とする信(まこと)」など「信(まこと)」という言葉を繰り返し使いながら、丹治にはこれらの「信(まこと)」がないと責めたてる。ここで注目したいのは、左門が「信義」の有無を正義と悪という二項対立の論理で捉えていることである。彼にとっては、丹治の「不義」を非難してこれを咎めることは、宗右衛門への「信を全う」することにつながる。さらにいえば、これは「この心あはれみ給へ」という宗右衛門の最期の言葉に対する左門なりの応答でもあった。ゆえに、左門の考え方に沿えば丹治の「不義」は十分に復讐の動機となりえる。このことはまた、左門のひとりよがりな論理ではなく、経久の理解を得られるものであった。

尼子経久此よしを伝へ聞て。兄弟信義(しんぎ)の篤(あつ)きをあはれみ。左門が跡を強(しひ)て逐(おは)せざるとなり。[xxiv]

ここにおいて、丹治を襲撃した左門の行動は「兄弟信義の篤き」こととして正当化される。経久にしてみれば、家臣が襲われたのだから左門を捕えて厳しく処罰せねばならない。だがあえて、経久は左門を見逃すことにした。それは、彼自身も武士として「信義」の重みを理解していたからであろう。

以上の場面は、ハーンの再話では次のように描かれる。

At the earliest dawn Hasébé set out for the Castle Tonda, in the province of Izumo. [...] Then Hasébé went to the house of Akana Tanji, and reproached Akana Tanji for the treachery done, and slew him in the midst of his family, and escaped without hurt. And when the Lord Tsunéhisa had heard the story, he gave commands that Hasébé should not be pursued. For, although an unscrupulous and cruel man himself, the Lord Tsunéhisa could respect the love of truth in others, and could admire the friendship and the courage of Hasébé Samon. [xxv]

原話に比べて、再話はずいぶんと短く、内容も簡潔である。特に復讐の場面は、左門が丹治を責めて家族の目の前で斬りつけたという出来事は原話も再話も同じだが、みずからの論理を中国の故事によって正当化し、一方的に丹治を責めたてる左門の言葉や、彼の激烈な怒りを示すような原話の描写は、再話には見られない。また、左門が丹治の罪とした「不義」も再話では「裏切り」（“treachery”）という言葉に置き換えられており、道義や倫理よりも行為そのものに注意が向けられている。さらに、経久が左門を見逃した理由も原話と再話では微妙に異なる。原話では、経久が左門と宗右衛門の「信義」が経久の胸を打ったとされるのに対し、再話では「左門の友情と勇気」として経久の心は左門にのみ向けられている。経久は他者をいつくしむ心を解する人であったゆえに、左門の「友情」にかける思いとそのための「勇気」に心打たれたとされている。

四．約束のために命をかけるということ

「守られた約束」は大筋で原話の展開を受け継ぎながら、大胆な省略によって原話とは趣向を異にする。まず原話では、秋成はそれぞれの人物の経験や人間関係を通して「信義」を描きだそうとした。その際、左門や宗右衛門の過去を掘り下げ、人間性を細かく設定したことで、原話では特殊かつ一回的な経験として一連の出来事が提示される。

原話において、左門と宗右衛門は博士と武士として職業や身分は違うものの、どちらも社会的な立場によって自己を捉え、その規範を意識して生きてきた点は共通する。しかしこの規範意識こそが、宗右衛門を死へと追い詰めることになる。彼の死は、いわば左門に対する恩義に押しつぶされた結果ということができよう。また左門にとっても、規範意識は「信義」と結びついている。彼は丹治に復讐する際、相手の事情を考慮せず、一方的に糾弾して斬りつけるが、この時彼が引いたのが『史記』にある公叔座の故事である[xxvi]。実生活とかけ離れ、故事の論理のみに拠って立つ左門であるが、彼の「信義」はそれによって正当化されているのである。

これに対して、ハーンの再話では登場人物の過去や約束の背景に踏み込まないことで、特殊で一回的な物語から約束をめぐる説話へと作品の性格が変更された。それに合わせて、「信義」という原話の主題も再話では書き換えられている。原話では、「信義」を支える要素として、宗右衛門の左門に対する恩義に加え、死者となった宗右衛門の絶望や無念を前景化した。一方、再話では宗右衛門の内面には触れず、主題も「信義」から「勇気と友情」へと変更された。ではなぜ、このような変更が行われたのだろうか。

それは、宗右衛門が抱く恩義が欧米の人びとの目には独特の感覚として映ることがあったためかもしれない。ルース・ベネディクトは、『菊と刀』の中で「恩」とは、「人ができるだけの力を出して背負う負担、責務、負荷である」と定義し、アメリカで「義務の拘束を受けることなく自由に与えられるもの」とされる「愛」と比較する[xxvii]。彼女はまた、「「義理」にどうしても従わなければならないのは、世間の取沙汰が恐ろしいからである」とも述べている[xxviii]。これに従えば、義理や恩義を義務と捉える原話の宗右衛門の感覚は、確かに欧米の読者の共感は得づらいのかもしれない。このような理由から、ハーンは義理や人情に支えられる「信義」ではなく、「友情と勇気」の物語として「守られた約束」を書いたのではないだろうか。

左門と宗右衛門が知り合った経緯を省いたのは、左門の親切がかえって宗右衛門の負担になるとハーンには思えたのかもしれない。宗右衛門の意思だったとはいえ、彼が自害を決めた根底には左門への恩に報わなければならないという義務感があったのではないだろうか。ハーンが原話に読み取ったのは、「信義」の美談ではなく、死後も解決されない宗右衛門の無念だったのかもしれない。そしてそれ以上に彼の注意を引いたのが、命がけで約束を守るという出来事だったように思われる。彼が「守

られた約束」に書いたのは、約束の程度に関わらず、そのために死を選ぶ人々がいるということであり、それに対する驚きだったのではないだろうか。

---

i ハーンの妻であった小泉セツ（節子）は、後年、「幽霊滝の伝説」や「耳なし芳一」をハーンに語りきかせた時のことを次のように述懐している。「私が昔話をヘルンに致します時には、いつも始めにその話の筋を大体申します。面白いとなると、その筋を書いて置きます。それから委しく話せと申します。それから幾度となく話させます。私が本を見ながら話しますと「本を見る、いけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考でなければ、いけません」と申します故、自分の物にしてしまっていなければなりませんから、夢にまで見るようになって参りました。」（小泉節子・小泉一雄『小泉八雲　思い出の記　父「八雲」を憶う』、恒文社、1976 年、22 頁。）

ii 井上泰至『上田秋成の怪異の正体　雨月物語の世界』（角川学芸出版、2009 年）、7 頁。

iii 高田衛「作品解説」（中村幸彦・高田衛・中村博保校注・訳『英草子　西山物語　雨月物語　春雨物語』、日本古典文学全集 48、小学館、1973 年、49 頁）

iv 田代三千稔「ラフカディオ・ハーンの怪奇物語（II）――“Of a Promise Kept”について――」(『鶴見女子大学紀要』第 7 号、1969 年 12 月)、17 頁。

v 宮嶋夏樹「小泉八雲と上田秋成――雨月の二作品をめぐって」（『明治大学和泉校舎研究室紀要』第 18 号、1961 年）、28 頁。

vi これは『雨月物語』研究においても共有される問題意識である。例えば、中田妙葉は次のように述べて、趣向の新しさに注目するあまり作品の全体に意識が行き届かない研究態度に警鐘を鳴らす。「部分的な趣向の新規にのみ意が向けられることは、主題との緊密な調和への考慮がおろそかになり、主題の一貫性が保たれなくなる「趣向倒れ」という破綻をもたらす。それでも読本作家の評価は、ほとんどが趣向の運用の巧拙如何によって定められ、作家の技量を定める基準となっていたのである。しかしこのことは、読本作家の技量と認識は、先行作品に学ぶ場合でも、趣向または措辞といった第二義的なものの継承に止まり、第一義的な主題理法を継承するという、高度の摂取には及ばなかったことを示すに他ならない。」（中田妙葉「「菊花の約」における「信義」について――中国白話小説「范巨卿鷄黍死生交」との関係による一考察――」、『高崎経済大学論集』第 48 巻第 4 号、2006 年、128 頁。）

vii 上田秋成全集編集委員会編『上田秋成全集』第 7 巻（中央公論社、1990 年）、236 頁。ルビは原文による。以下、「菊花の約」は同書から引用する。書名は『秋成全集』と略記し、巻数とページ数を記す。

viii 同書、237 頁。

ix 『秋成全集』第 7 巻、238 頁。

x 同書、237 頁。

xi 同書、238 頁。

xii ハーンの再話は、原話に対して 7 割程度の分量であるという試算がある（森亮『小泉八雲の文学』、恒文社、1980 年、38 頁）。

xiii 『秋成全集』第 7 巻、239 頁。

xiv 木越治『秋成論』（ぺりかん社、1995 年）、334 頁。

xv Lafcadio Hearn, *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. 10 (Kyoto: Rinsen Books, 1973), 193. 以下、ハーンの

文章の引用は同作品集による。書名は *WLH* と略記し、巻数とページ数を記す。

xvi 『秋成全集』第 7 巻、241 頁。

xvii 同書、242 頁。

xviii *WLH*, vol. 10, 196.

xix *Ibid.*, 196.

xx 先に引いた約束の場面のほか、約束の当日、宗右衛門を待ちつづける左門に母が言う“The province of Izumo, my son, is more than one hundred ri from this place; and the journey thence over the mountains is difficult and weary[.]” (*Ibid.*, 194)という言葉においても、加古と出雲が遠く離れていることは言及されている。

xxi *Ibid.*, 197-198.

xxii 『秋成全集』第 7 巻、244 頁。

xxiii 同書、245 頁。

xxiv 同書、245 頁。

xxv *WLH*, vol.10, 198.

xxvi中村幸彦ほか校注・訳『英草紙　西山物語　雨月物語　春雨物語』、357 頁、頭注。

xxvii ルース・ベネディクト、長谷川松治訳『菊と刀』（社会思想社、1967 年）、115 頁。

xxviii 同書、164 頁。

【論文】

帝大講師小泉八雲

――講義「読書論」「創作論」「文学と輿論」を中心に――

服部　徹也

はじめに

帝大講師小泉八雲の後任となることについて、漱石夏目金之助は妻鏡子に次のように不満を漏らしたという。

> 小泉先生は英文学の泰斗でもあり、又文豪として世界に響いたえらい方であるのに、自分のような駆け出しの書生上がりのものが、その後釜に据わったところで、とうていりっぱな講義ができるわけのものでもない。また学生が満足してくれる道理もない[(1)]。

八雲の死後四年経って、漱石は第五高等学校（熊本）から東京帝大への進学のため上京した小川三四郎を主人公とする小説『三四郎』（『東京朝日新聞』、1908 年連載）に次のように八雲の姿を描いた。

> 赤門を這入つて、二人で池の周囲（まはり）を散歩した。其時ポンチ画の男は、死んだ小泉八雲先生は教員控室へ這入るのが嫌（きらひ）で講義が済むといつでも此周囲をぐる／＼廻（まは）つてあるいたんだと、恰（あたか）も小泉先生に教はつた様な事を云つた。何故控室へ這入らなかつたのだらうかと三四郎が尋ねたら、
>
> 「そりや当り前ださ。第一彼等の講義を聞いても解るぢやないか。話せるものは一人もゐやしない」と手痛（てひど）い事を平気で云つたには三四郎も驚いた[(2)]。

では帝大講師小泉八雲の講義は、どのようなものだったのだろうか。本稿では学生達による回想、講義録の読解を通してその性格を明らかにしたい。

１．回想のなかの八雲講義

八雲帝大講義について、受講生はどのように語っていたのだろうか。安藤勝一郎は、次のようにハーン講義中の教室風景を描いていた。

> 講義は静かに緩やかな速度で始められる。思ふに、先生は松江中学、熊本高校に於て教鞭

を執られた長い経験で、日本の学生の語学力の程度限界を能く知悉されてゐたと考へられる。決してそのため許りではないであらうが、先生は常に平明な表現同時に流暢な調子で学生が充分書き取りうる程度のテムポで講演の口述を進められる。絶対に必要なき限り異常な難解な語句表現は避けられた。然るにその講義のノートを後に読み返して見ると、盤上に珠を転ばすやうな名文となつてゐるのに感歎する、否先生の講義の書き取りに夢中になつてゐる間にも、先生の名文の名調子は我々の耳朶を打つてその快い楽音に我々を陶酔させるのであつた。（略）講義が蔗境（しゃ）に入れば、先生の声に熱を帯び調子も自然に高められテムポが速まつて来る。筆記のペンの音のみが、先生の緩やかな跫音に和して聞ゆる瞬間である。（略）先生は「メモ」を持参される（略）それは極めて小さい精々二三寸のもので、之を参照されるのは、講義中に現れる詩人・作家等の生没年を書取らせるため稀に用ゐられる。其時は近眼の右目を揉み込むやうに眼スレ／＼に近寄せて看られるが、その間でも講義の進行は妨げられることはない。初〔ママ〕て出る題目とか特に難解と思はれる語句引用文・書目・人名以外は黒板に書かれない。口授講述の際、散文は問題ないが、詩にはそれ／"＼何か或る形式が存するから、原詩の行間の排列の形式に凹凸出入ある場合は、『一字引込める』とか『二字凹（くぼ）めて』とか書写上の注意が与へられる、又は「行を改めて」とか其他、文の終止、挿入句の括弧、引用符等迄、叮嚀懇切に細かく口授しながら、而かも講述中の本筋の文章そのものは、何の淀みもこだわりも停頓も渋滞もなく、水の流れるようにすら／＼と講義は継続されて行く。（略）我々学生はうつとり夢心地の中に懸命になつて筆記のペンを走らせ続けた。何か特別に注釈的説明を加へられる場合以外、大抵は講義そのものに追ひ掛けられてゐたからである。授業終了のベルの音が聞こえて、一同は緊張の夢から醒めてほつとする。そして書取つた講義に就て、文字通りのコムペア・ノーツ〔情報交換〕が始められるのであつた[3]。

また、八雲と漱石に教えを受けた金子健二は、後年その克明な日記をもとにやや脚色[4]をまじえた回想録『人間漱石』（いちろ社、1948）を著した。同じ英文学者としての『文学論』批判や、講師夏目金之助の姿をいきいきと描く筆致は読み応えがある。同書で金子は入学当初（1902 年 9 月、つまり八雲の帝大最終年度の初め）の八雲講義を次のように回想している。

ヘルン先生は私達が初めて英文科に入学した時「諸君は文学を創作する為に私の講義を聴いてくれなければならない。又仮令創作家にならないとしても文学を鑑賞し、且つこれを愛好するだけの用意を持つてほしい。若し諸君が卒業後中学校や高等学校の英語の先生になるといふ目的で私の英文学の講義を聴かうとするならば、必ず諸君は失望するであらう。私は決して諸君の為に職業を与へる為の英語は授けないのであるから……故にこのや

うな職業意識を持つて英文科に入学した者があるならば速かに他の学校か又は法科に学籍を移す事を忠告する」といつたやうな申渡しがあつた。私達はかねて噂に聴いてゐた此の大文豪の、しかもその荘重な又神秘的な言葉を目前で肉声を通して聴かされたのであるから皆大いに感激すると共に、各自は既に一かどの創作家にでもなつたやうな自負と法悦とに小さな胸を躍らせたのである[5]。

ただし、解任が決まった後（一九〇三年三月頃か）の様子を安藤の同級生、岸重次は次のように率直に記している。

先生が去られることがきまってからは、講義も調子がかわり、非常に速くなり、発音もはっきりせず、筆記に困難となりました。最後の講義は Note on Whittier であったが、これを完全に筆記し得たものはぼくぐらいなものだった。後年昭和９年９月北星堂で先生の講義を出版するとき、はるばる金沢にいるぼくのところまで、ノートを借りにきたほどでした[6]。

なお、こうした文脈のなかで小泉八雲留任運動が起こるのだが、金子健二（前掲）は先の引用のあとこう続けている。

　このやうな自己陶酔の夢に満たされてゐた時代に、そしてこの陶酔の夢は純乎たる芸術愛好への手引きとなつて、その横にひろがつた多方面の趣味は少なくとも私達の一生涯にとりて非常に大きな幸福と成つた事を私は今でも感謝してゐるが……そのやうな主情主義の高潮に達してゐた時代に突如として漱石先生の如き理知の人、叡智の人、批評的の人、鋭いメスを手にして文学の手術台に現はれて来た外科医の先生が教壇に現はれて来たので当時の「坊ちやん」や「三四郎」が驚異の目を以て漱石先生を見上げたのは当然である。（略）特に漱石先生の講義は、その研究のシステムが文学それ自身を鑑賞する時に必要と考へられる批評学の一端を分析的に取り扱はふとする所に重点が措いてあつた為に、ヘルン先生の如く立派な芸術は理くつぬきにして直覚的に鑑賞すべきものであるといふ立場とは、既に根本的に異つてゐたのであるから、多年此の空気の中に育てられて来た「坊ちやん」と「三四郎」はヘルン先生をありがたく思つてゐた事は当然である。加之、ヘルン先生の名は海外の文壇で宣伝されてゐたのに反して、漱石先生の名は僅にこの頃の『ホトトギス』で其の道の人達の間にしか識られてゐなかつたのであるから、漱石先生は誠に不利の立場に在つた[7]。

『人間漱石』によれば、1903 年 3 月 2 日、留任運動の議長は 3 年生安藤勝一郎に決まる〔田部隆次によれば石川林四郎、落合貞三郎も代表者であった[8]〕。2 年生は西川巌、森巻吉が総退学決行論者であるのに対し、厨川辰夫は反対派であった。急先鋒となったのは当時 1 年生の小山内薫、川田順。総退学を辞さぬ強硬路線が優勢であったが留任ならず、春休みが明けると新講師が赴任した。5 月 4 日には小山内薫、川田順らが受講拒否、卒業の近づいた 3 年生は神妙に出席。2 年生は厨川だけが熱心に聞いており、「他の諸君は出席だけはしてゐるが、心の中ではさう興味を寄せてゐないのだ」と同郷の森巻吉が後輩金子健二に話したという。高田力の伝えるところによれば、川田順にいたっては「ヘルン先生のいない文科で学ぶことはない」といって法科へ転科した。後年その事実関係を問われて事実であることを認めたうえで、川田は「夏目なんて、あんなもん問題になりゃしない」と述べたという[9]。

２．小泉八雲の帝大講義録

厨川白村は八雲講義録出版の報に接して、講義を次のように回想した。

> 先生の講義は毎週九時間であつた。英文学概論が三時間、作品講読が三時間の外に、詩歌小説戯曲などに関する色々の題目に就いて、断片的の講義がまた三時間あつた。先生の豊かな天分と、断じて他の模倣を許さないその独創性（オリヂナリテ）が遺憾なく発揮せられ、またその特有の趣味鑑識に基づける批判が十分に聴講学生の前に披瀝せられたのは、主として此断片的講義の三時間であつた。幸ひなるかな、このたび世に公にせられたものは即ち講義の此部分のみである[10]。

ただし、田部隆次『小泉八雲』（早稲田大学出版部、1914）によれば、授業時間数については週に 12 時間であったらしい[11]。染村絢子によればその内訳は、「①テキストを使用した詩の講読（５時間）②テキストなしの英文学史（３時間）③同じくテキストなしの特殊講義（４時間）」であるという[12]。田部『小泉八雲』付録「講義の題目」には、「〔明治〕二十九年の一年生であつた我々の講義筆記から〔八雲退任時の受講生〕石川〔林四郎〕、落合〔貞三郎〕の諸君のものまでにある題目」（田部らが 1 年生当時の 2・3 年生向けの講義は含まず）が列挙されている。しかしそれぞれの講義題目の年次は明記されておらず、現時点で一部の題目のみ講義時期が判明しているが[13]、今回は講義時期の推定には立ち入らないことにする。

八雲帝大講義の受講ノートについては、染村絢子が下記のとおり田部隆次ら 7 名のノートを参照して研究の基礎を築いた[14]。

（一）茨木清次郎　一八九九年（明治三二）七月卒業　　**茨木家蔵**

（二）田部隆次　卒業年同上　**染村蔵**

（三）栗原基　一九〇一年（明治三四）七月卒業　**栗原家蔵**

（四）小日向定次郎　卒業年同上　**染村蔵のコピーより**

（五）藤村作　卒業年同上　**お茶の水女子大学英文科研究室蔵**

（六）岸重次　一九〇三年（明治三六）七月卒業

金沢大学附属図書館蔵

（七）筆記者不詳　**天理大学附属天理図書館蔵**

（八）森巻吉　一九〇四年（明治三七）七月卒業　**東京大学**

〔大学院総合文化研究科・〕教養学部〔駒場博物館〕蔵

（九）金子健二　一九〇五年（明治三八）七月卒業　**金子家蔵**

〔一部が金子三郎編『記録　東京帝大一学生の聴講ノート』

［リーブ企画、二〇〇二］に掲載〕

（一〇）野間真綱　一九〇三年（明治三六）七月卒業

神奈川近代文学館蔵

染村が言及していないノートについては、若月紫蘭（若月保治）のノート（山口大学図書館若月紫蘭文庫蔵）がある。また筆者未見であるが、近藤哲は皆川正禧の八雲講義受講ノート 10 冊（いずれも 21.5×16.5cm、日付記載なし）を報告している[15]。

白村によれば講義録出版の際には「一通りパラフレイズで本文の説明を終り、難解の語句を釈し」た部分が「大抵省略されてゐる」（前掲）が、言わば「書き言葉」を書き取らせた八雲講義は、受講ノート間の筆記がほとんど一致すると思われる。八雲側の資料としては、年号などの基本的事項を書き留めた東大講義のための覚え書き（天理大学所蔵）が天理図書館善本叢書洋書之部編集委員会編『Lafcadio Hearn : mss. & letters.』（天理大学出版部、1974）六巻中の第四巻に影印版として収録されている。

八雲は生前、自身の校訂による講義録出版を希望し学生の受講ノートを入手しようと試みたこともあったが、果たさずに亡くなったという[16]。だがその後、かつての受講生達の尽力により多くの講義録が出版された。このことから師弟愛が窺えるのは勿論のことだが、出版事業として見れば当時、受講ノートは講義録出版の元手となる価値を有していたともいえようか[17]。現代も八雲の人気は根強く、熊本第五高等中学校での英語講義受講ノートが翻刻出版されてもいる（平川祐弘監修『ラフカディオ・ハーンの英語教育　《友枝高彦・高田力・中土義敬のノートから》』弦書房、2013 など）。

八雲没後の講義録出版は、次のような経緯による。

ハーンが東京帝大で一八九六年（明治三十九年）から一九〇三年まで行なった主要な英文学講義（四十四編）を編纂（略）その経緯は、当時ハーンの学生であった大谷正信、田部隆次、内ヶ崎作三郎、小日向定次郎、落合貞三郎、石川林四郎らの講義の克明な筆記ノートを基に――ハーンは学生が充分書き取れるほどゆっくり、澄んだ美しい英語で講義をしたと言われている――まずハーン文学の共鳴者であり友人であるミッチェル・マクドナルドという人物が横浜のホテルの一室でタイプさせ、原稿を作らせたことに始まる。そしてマクドナルドが帰米した折、たまたまコロンビア大学のジョン・アースキン教授にその原稿を示す機会があった。これがいたく彼を感動させ、ハーンの講義録出版の直接のきっかけとなったという。そして一九一五年にアースキンみずから編纂した『文学の鑑賞』二巻が、ニューヨークのドッド・ミード社から刊行されることになった。するとこれが予想外に反響を呼んだので、同じ編者によってさらに二冊のハーン講義録が追加されることになったのである――一九一六年『詩の鑑賞』、一九一七年『人生と文学』がそれである[18]。

八雲の日本（人）論を正宗白鳥は「作者の異常の努力にかゝはらず、彼の手からは現実が逃げて、捉へられたものは、ハーン好みの夢であることが多い」と批判しつつ、彼の講義録について「東京の大学で講じた英文学史、その他いろゝゝの西洋文学論などこそ、日本の学生に取つて、良好の指導者として役立つのである」と評した[19]。他方、今日では英文学史については「時代後れなものである。大半は他人の説の受け売りであるし、平凡である」と酷評しつつ、特殊講義のうち「小説における超自然的なものの価値」（The Value of the Supernatural in Fiction）、「イギリスの近代批評、および同時代の英仏文学の関係について」（On Modern English Criticism, and the Comtemporary Relations of English to French Literature）、「創作論」（On Composition）、「読書論」（On Reading in Relation to Literature）、「散文芸術論」（Studies of Extraordinary Prose）などを高く評価する声もある[20]。また芥川龍之介のスウィンバーン受容やボードレール受容を研究する上でも、八雲の講義録に言及されることがあった[21]。

アメリカで小泉八雲の講義録 John Erskine（eds.）(1915). *Interpretations of Literature*. 2 vols. Newyork: Dodd, Mead and Company.等が出版されたとの報に接し、白村は八雲の講義に賛辞を寄せた。『小泉先生そのほか』（積善館、1919）で白村は八雲講義を「日本人の詩観、日本人の思考法に適するやうに」「日本人の為に、日本人の美感に訴へやうとして説かれた西欧文学の講説」であり、「情緒本位の文学教授法」であるとして、次のようにいう。

一通りパラフレイズで本文の説明を終り、難解の語句を釈して後（出版せられた講義集には説明解釈の部分は大抵省略されてゐる）、先生は自分の美しい言葉で美しい詩の句を批評し、その芸術的意義を説かれた。（略）講壇に立つて理を説き事実を伝ふるに巧みなる

人は多からうが、詩文を説いて貴き霊感を与へ、之によつて青年学徒を指導し得る教授は、天下果して幾人あるだらう。（略）年々歳々題目を新にして、沙翁以後幾百幾十の作家と作品に就いて、毫も受売でない自己の鑑賞（アプリイシエイション）を語り得る者が、多士済々たる英米の学界に於てすら果して何十人あるだらうか。（略）この講義集に用ゐられたる英語は、中学卒業程度の語学力を以て何等の苦痛なしに理解し得る極めて平易明快なるものである。単に詩文のみならず、晦渋（くわいじふ）なる哲学思想の解説に於てすらも、先生は殆ど難解の語を用ゐずに説かれてゐた。評隲（ひやうしつ）論議の書にしてかくも平明なる文辞を用ゐたるものは他に多く類例は無いが、これは学殖文才共にすぐれた小泉先生の如き人にして始めて出来る藝当だと思ふ。（略）私は平易なる英文を読み得る凡ての日本の読者に向つて、この珍らしい講義の書を最良の文学入門書として、或は手引草として推薦するに躊躇しない[22]。

この賛辞から数年のうちに、1921 年に英和対訳著作集全 9 巻、1926 年に翻訳全集全 18 巻という流れに連動して講義録の翻訳刊行が相次ぐ（一連の講義録日本語訳出版のうち最初期のものは、アースキン版に先だって刊行された、田部隆次による評伝『小泉八雲』（前掲）の付録の講義抄訳である）。その後、アースキン版の恣意的な校訂方針に対して、完全版と冠した田部隆次・落合貞三郎・西崎一郎による校訂版講義録が以下の通り刊行される（1941 年には四巻セット筐入りの改訂特装版が刊行された）。

Lafcadio Hearn（1932, Revised in 1941）. *Complete Lectures on Art, Literature and Philosophy*. Tokyo: The Hokuseido Press.

――（1934, Revised in 1941）. *Complete Lectures on Poets*. Tokyo: The Hokuseido Press.

――（1934, Revised in 1941）. *Complete Lectures on Portry*. Tokyo: The Hokuseido Press.

――（1938, Revised in 1941）. *A History of English Literature*. Tokyo: The Hokuseido Press.

３．小泉八雲講義における撞着語法的論理

では八雲の講義の内容とはどのようなものだったのだろうか。本稿では、八雲の「英文学史」講義ではなく、より特色の現れやすい自由テーマのオムニバス講義から「創作論」「読書論」「文学と輿論」を取り上げ、その文学教育の基底にある構図を取り出したい。なお、これらの三編の選択の根拠は、八雲没後の田部隆次による伝記『小泉八雲』（前掲）の附録として掲載された三編の講義抄訳と同じであること、またその後の八雲講義録出版・講義録日本語訳出版において中核を為す三編であることに拠る[23]。

八雲の「読書論」と「創作論」に共通する図式として、「知識」を身につけることの必要性とその不可逆性をいうと同時に、「知識」によって簡単に損なわれてしまう「子供」のように

新鮮な感性こそが芸術の命であるという撞着語法的論理が、文学研究者・批評家と大衆との関係のなかで説かれている。

「読書論」においては、娯楽目的で表面的に「筋」を追う「大衆」（common person / the average public）に対し、「自分の持っているすべての知識、学識、経験にもかかわらず、子供がお伽噺を読むのと同じように〔徹底的に、飽きることなく、注意力と想像力を悉く注ぎ込んで〕、本を読む」と「忍耐」を兼ね備えた「プロの読者」を対比して後者の意義を説いたうえで、初めの大衆読者とはまた異なる意味合いでもう一度「大衆」（the public）の語を持ち出している。

> 最終的には最も偉大な批評家は大衆である――一日とか一世代の大衆という意味ではなく、数世紀を経てきた大衆、時というすさまじい試練を経てきた本についての国民的、あるいは人類の意見の一致という意味での大衆である。名声は批評家によって作られるものではなく、数百年にわたる人類の意見の集積によって得られる[24]。

ではその場合、「プロの読者」としての批評家の発言と、「人類の意見の集積」はどのような関係にあるのか、ということが問題にならざるをえないが、「読書論」は不朽の名作、何度でも読みたくなる古い作品を読めというに止まってしまう。そこで「創作論」に目を転じる。

八雲は創作とは「感情の表現」であり、そのための一つの方法が「他の人たちの描写とは驚くほど異なっている」自分自身の言葉で「ものの特質」を捉えて描写することであるという。そして創作と文学研究との関係について、八雲は再び撞着語法的な論理を用いる。

> 子供の本能的な知識、何百万もの過去の生命から受けつがれてきた知識は、教育や個人的体験の数かぎりない影響の重みに鈍らされることなく、いまだに新鮮である。（略）これと同じような本能的な力が、芸術家の真の力であり、それがたんなる文章と文学との相違を生じさせるものである。（略）ほとんどの場合、知識は、ある非常に貴重な天性の能力を犠牲にしてのみ手に入れることができる。すべての知識を吸収しているにもかかわらず、精神と心が子供のように新鮮なままでいられる人こそ、文学において偉大な仕事をなしとげると思われる[25]。

文学研究により知識を身につけつつも、精神と心を「子供のように新鮮なまま」で保ち（keep the freshness of the child in his mind and heart）、自分自身の（つまり手垢のついていない）言葉で感情の描写を行うことが必要であるという。そして創作のもう一つの方法は、モーパッサンのように「いっさい描写をせずに、あらゆる表情や行動が暗示されるように、述べること」だという。このように二つの方法による創作論を述べたあとで、八雲は学生達に呼びかけるように、

次のようにいう。

> 日本文学は多くの点でいまだ古典的な状態にあり、過ぎ去った世紀の慣習から解放されておらず、言語の十分な能力が近代の作品の中に表現されていないと思う。母国語で書くのに、日常会話や民衆の言葉はいまだ卑俗だと考えられている。諸君がいつか、それらの慣習に大胆に戦いを挑むことを望むと、あえて私は言わなければならない。（略）どの国においても、教育を受けた階級は、大きな全体のほんのわずかな部分を代表するにすぎない。彼らは教師でなければならない。しかし、学士院の言語では教えることができない。（略）日本には、確かに新しい大衆文学が必要とされるだろう。（略）それは、すすんで大衆に母国語で話し、何百万もの人の心に触れようとする学者か、少なくとも文芸を解する人によって供給されねばならない。これが、いずれの国においても、文学の真の目的である。（略）一億人の人びとに話しかけることのできる人は、王より力がある。しかし、彼は学士院の言葉で話してはならないのである[26]。

このように「創作論」の末尾で、専門的な知識を身につける「プロの読者」たる学生達に、「教師」として「新しい大衆文学」を通して一億人の人びとに話しかけるという創作者の使命を八雲は期待する。創作を通して大衆に語りかけ教化するならば、「人類の意見の集積」に対して批評家はただ手を拱くだけではなく、働きかけることができるだろう。同様の見解は、トルストイ『芸術とはなにか』（1897）を評した講義でも繰り返される。

> この主題〔実地の生活になじんでいることこそ、美や力に関するあらゆる知識の奥義を授けてくれるということ〕は、私がしばしば主張してきたことが真実であると確証してくれる。それは、やがて日本の作家たちは普通の人びとの話し言葉で書くようになるだろうが、それが早ければ早いほど、日本文学にとっても、近代知識の一般への普及にとっても有益であるという主張であった[27]。

エリート知識人であると同時に子供の様に読み・描写する者が、「新しい大衆文学」によって「近代知識」を普及させる。それにより、時の試練という最大の批評行為が優れた文学を後世に伝えていく。このように整理していくと、八雲の文学論の根底には美化された社会ダーウィニズムが横たわっているように思われる。

４．スペンサーの進化論哲学と八雲講義

八雲が記者時代にハーバート・スペンサー（Herbert Spencer, 1820-1903）の進化論哲学を応用

した評論を書いていたことは知られているところだ。八雲の招聘に尽力した当時の東京帝国大学文科大学学長外山正一はスペンサーの進化論哲学の普及に貢献したことでも知られる。また外山との間を取り持ったバジル・ホール・チェンバレンと八雲はスペンサーについて書簡で議論を交わしており（1985 年 3〜4 月）、招聘の意を伝える外山正一の手紙（1895 年 12 月 13 日付）は「英文学を進化論の原理によって、情緒的歴史的に教えること」を求め、ハーンはこれに応じた（なお、外山に八雲を推薦したのは神田乃武であったという[28]）。青年夏目金之助もスペンサーを熱心に読んだことが知られるが、留学期の研究はむしろ社会進化論の批判に重きを置いていたことはこれまで多々論じられてきた通りである[29]。

では八雲講義の文芸批評と進化論哲学はどのように関わるのだろうか。文学批評の方法を論じた数少ない講義「イギリスの近代批評、および英仏文学の同時代の関係について」には次のようにある。

> サント＝ブーヴの最大の弟子は、歴史家のテーヌであった。(…) しかし、テーヌはサント＝ブーヴほど博識でもなければ、俊敏でもなく、魅する力が弱い。彼はやや一方に片寄った方法を用いる傾向があった――これはその方法の欠陥ではなく、困難さを示している。(…) サント＝ブーヴの方法は将来、たぶんほかの大人物によってさらに完璧なものとされるだろう。その最も有力な理由もある――すなわち、それが進化論哲学と完全に一致している点である。サント＝ブーヴが若かったころ、進化論哲学は存在しなかったが、ある面でそれを予想していたと言えるだろう。今日、進化論哲学に従っている批評家たち――私は、文学上のすべての歴史を幾世紀も越えてその始原にさかのぼり、その事物がどのように成育し、発芽し、花咲いたかを描く人びとを指しているのだが――彼らの大部分はハーバート・スペンサーの弟子ではなく、サント＝ブーヴの模倣者たちなのである[30]。

つまり、ここでサント＝ブーヴの名を借りて語られているのは、「どのように成育し、発芽し、花咲いたか」という予定調和的な進歩史観ということになる。これまで、ジェームズ・バスキンド「ラフカディオ・ハーンの仏教観――十九世紀科学思想との一致論を中心として」（『日本研究』第 37 号、国際日本文化研究センター、2008・3）や鬼山暁生「ラフカディオ・ハーンの社会進化論的家族国家観―― *Glimpses of Unfamiliar Japan* の日本表象における「母」「父」「虫」」（『文学研究論集』第 46 号、明治大学大学院、2016）などが初期評論や日本論にスペンサー進化論の影響を指摘してきた。以上見て来たように、スペンサー進化論の影響は、隠微な形で八雲の帝大講義の基底をも形作っていたといえるのではないか。

その先に八雲は何を見ていたのだろうか。八雲の言葉遣い、とりわけ「新しい大衆文学」と「近代知識」という言葉には注意が必要だ。「新しい大衆文学」は私たちの今日イメージする

「大衆文学」とはまた別のものであろう（従来の意味での「大衆文学」は、筋を楽しむ読書として「読書論」冒頭で斥けられている）。このことは、「文学と輿論」を見てみるとよりはっきりする。

> 西欧諸国は日本について何を知っているのであろうか？　ほとんど皆無である。（略）世論は、おおむね感情の問題であって、思想の問題ではないからである。国民感情とは、頭脳を通して伝達され得るものではなく、心情を通して伝達されねばならないものなのである。しかも、それが可能なのは、ただある一つの階層の人々――日本の文学者――のみである。（略）一人の偉大な小説家、一人の偉大な詩人がいさえすれば、彼らはたった一人でこれを首尾よくやりとげるであろう。血のつながりもなく、言葉も異なる人々には、どんな手段によろうと、これをなし得るものではない。それは、日本人によって考えられ、日本人によって書かれ、また外国流の思考や感覚によってまったく影響されていない日本文学によってのみ、なし得るのである。（略）単なる旅行記とか随筆とか、また西欧人の感情とは何ら共通点をもたない文学の翻訳とかによっては、大衆の心を動かすことはできない。もっと人間的な文学、すなわち創作や詩歌、小説や物語によってのみ、人々の心を感動させることができるのである。（略）すべての偏見は、無知によるのである。無知は、より崇高な感情に訴えかけることによって、最もよく解消され得る。そして崇高な感情は、純粋な文学によって最もよく鼓吹されるのである[31]。

このように外国に日本を知らしめるために必要な文学を、八雲は唱える。「人は一冊の書物を著すことによって、戦争で勝利を収めるのと同様に、大いに自国に報いることができるのである。（略）このような人間こそ、その国にとっては、王よりも確かに価値があるのである。諸君がこのことを記憶にとどめておくなら、私のしてきたこの講義は、将来いつかよい結果を生むだろうと信ずる[32]」という講義の結びは、そのまま「創作論」と共通の論理を有している。そこで「新しい大衆文学」と呼ばれていたものが、ここでいう「日本人によって考えられ、日本人によって書かれ、また外国流の思考や感覚によってまったく影響されていない」「より崇高な感情に訴えかける」現代日本文学にあたると考えてよいだろう。それが「新しい大衆文学」であるというのは、大衆に向けて語りかける文学だからである。では大衆にむけて、「近代知識」を伝えるとはどういうことだろうか。ここでいう「近代知識」は自然科学や理論的知などではないように思われる。ここにも、「文学と輿論」でいう「崇高な感情」に「心情」を通じてふれることによる理解が関わっていると思われる。「読書論」には次のようにある。

> 読むに値する本はすべて、科学書と同じように読むべきである――たんに娯楽を目的とし

ではならない。また、読むに値する本にはすべて、価値の種類は違っているかもしれないが、科学書と同量の価値がある。と言うのは、小説であれ、ロマンス小説であれ、詩であれ、良書は結局、科学的な作品であるからだ。それは複数の科学に通じる最高の原則に従って、とくに人間性に関する知識という人生の崇高な科学的原則に従って作られているからである[33]。

ここでいう「人間性に関する知識という人生の崇高な科学的原則」（the principles of the great science of life, the knowledge of human nature）こそが、八雲の講義の最終目標にあるものではなかったか。芸術は「言葉、音楽、色彩または形を手段として、情緒を伝える能力」であり「感覚によって人に真実や美を感じさせる諸手段」であるという（「トルストイの芸術論」、314頁）。母国語で書いた文学を通して、大衆の心に訴え、「人間性に関する知識という人生の崇高な科学的原則」を広めること、その先に外国からの日本理解が広まり、諸国間の偏見は解かれていく。

多くの学生達が魅了されたのは八雲の平易な語り口とそのまなざしの向かう先にあったのかもしれない。普遍的な知への志向性のもとに、世界が大いなる調和を迎えるこのヴィジョンのなかには先進国と日本があるのみで、たとえば植民地は予め議論の枠の外にあるように思われる。八雲自身のマイノリティ性やクレオールへの関心についての研究が進んだ現在から見れば余りに素朴に思えるほどに、八雲の英文学講義は美化された社会ダーウィニズムという理論的基盤に忠実である。近代的な英文学研究の成立前に、アカデミックな訓練を受けずして教壇に立った八雲個人については様々な制約を考慮して論じる必要もあろう。しかし、あまりにも無防備に恍惚とした体験を語る八雲講義の受講者共同体、あるいは読者共同体とでも呼ぶべき英文学者達の問題として考えるならば、「帝大講師小泉八雲」を特異な一挿話として捉えるのではなく、感性を重んじる文学教育への憧憬として変奏・再話されていく根強い物語として戦前・戦後の文学研究を考える一視角とできるはずである。

---

(1) 夏目鏡子述、松岡譲筆録『漱石の思い出』（文春文庫、1994［初版：改造社、1934］）、123 頁。

(2)『三四郎』（3 の 3［第 17 回］、『東京朝日新聞』1908・9・17）。

(3) 安藤勝一郎「Lafcadio Hearn 先生の追憶――東大を去られた当時の真相」（『東山論叢』1、京都女子大学、1949・10）、91-92 頁。

(4) 鈴木良昭『文科大学講師夏目金之助』（冬至書房、2010）は『人間漱石』における「日記の引用」と日記実物の記述とを比較し、脚色があることを指摘し、『人間漱石』は「日記では

なく日記文学のようなもの」と捉えること、日記実物との照合なしに『人間漱石』を伝記資料として扱わないことを勧めている。

(5) 金子健二『人間漱石』（いちろ社、1948）、42-43 頁。

(6) 岸重次「ラフカディオ・ハーン先生の追憶」（『北国文化』61、北国新聞社、1951・1）。

(7) 金子健二『人間漱石』（前掲）、43 頁。

(8) 田部隆次『小泉八雲』（早稲田大学出版部、1914）、227-228 頁。

(9) 高田力『小泉八雲の横顔』（北星堂書店、1934）。

(10) 厨川白村『小泉先生そのほか』（積善館、1919）。

(11) 田部隆次『小泉八雲』（前掲）、190 頁。

(12) 染村絢子「小泉八雲と岸文庫について」（『こだま　金沢大学附属図書館報』100、金沢大学附属図書館、1997）。

(13) 銭本健二、小泉凡共編「ラフカディオ・ハーン年譜」（『ラフカディオ・ハーン著作集』15、恒文社、1988）、726-727 頁。

(14) 染村絢子『ラフカディオ・ハーンと六人の日本人』（能登印刷出版部、2017）、57 頁。より詳しくは「東大講義」（『へるん』26、八雲会、1989）、「東大講義メモ帳と浮世絵展覧会」（『へるん』27、八雲会、1990）、「小泉八雲と周囲の人々」（『金沢大学資料館紀要』2、金沢大学資料館、2001・3）。また小林清一「ラフカディオ・ハーンの講義」（『Mimesis』5、帝塚山学院大学英米文学会、1973）も参照せよ。

(15) 近藤哲『夏目漱石と門下生・皆川正禧』（歴史春秋社、2009）、24-27 頁。

(16) 染村絢子「小泉八雲と岸文庫について」（前掲）。

(17) 講義録が果たした教育学史的役割については天野郁夫「講義録と私立大学――知識伝達の日本的形態――」（『教育と近代化　日本の経験』玉川大学出版会、1997）に詳しい。

(18)『ラフカディオ・ハーン著作集』（7、恒文社、1980）、巻末解説。

(19) 正宗白鳥「ラフカディオ・ハーンの再評価」（『国際評論』2・9、日本外事協会、1933・9）。

(20) ジョージ・ヒューズ「批評家としてのハーン」（平川祐弘編『世界の中のラフカディオ・ハーン』河出書房新社、1994）、262-263 頁。

(21) 澤西祐典「芥川龍之介と卒業論文'Young Morris'――旧蔵書中のウィリアム・モリス関連書籍を手掛かりに――」（『京都大学國文學論叢』34、京都大学、2015）によれば、芥川旧蔵書中「アンカット本であるラフカディオ・ハーンの講義録 *Appreciations of Poetry* を見ると、William Morris, Rossetti に加え、Swinburne の詩について論じた章はすべてカットされ、読める状態になっていた」という（16 頁）。また小谷瑛輔「芥川龍之介「煙草」と切支丹物の出発

――ラフカディオ・ハーン以降の日本のボードレール受容を視座として――」（『ヘルン研究』2、富山大学ヘルン（小泉八雲）研究会、2017・3）は芥川が扱う「南蛮趣味や「悪魔」表象が、ハーンから受け継がれてきているボードレールのモチーフの流れを汲んでいる」ことを様々な文献を博捜して跡づけている。

(22) 厨川白村『小泉先生そのほか』（積善館、1919）。

(23)「創作論」「読書論」の 2 編については、国語教科書に掲載された「教材」という観点から西田谷洋「小学校・中学校国語教科書の中の小泉八雲・序説」（『ヘルン研究』2、富山大学ヘルン研究会、2017・3）が取り上げ、「感情の普遍性は現在の分析者の価値観を特権化する。なぜなら、それは古典への評価が大衆のものではなく、階層集団の文化、教育の効果、伝統の発明に由来するという観点がないからである」と批判している。この批判は、教科書に単独で部分的に採録された八雲評論を教育の場で扱う際のみならず、講義録の各章を通読する際に得られる八雲の文学観に対しても有効である。他方で、講義録という形態で通読すると、〈大衆の言葉で語りかける文学〉というモチーフに八雲が階層集団の文化を跨ぐコミュニケーションを期待していたことも読み取れることを本稿では取り上げたい。

(24)「読書論」（『ラフカディオ・ハーン著作集』9、恒文社、1988）、14 頁。本章におけるハーン講義録の原文底本としては田部隆次・落合貞三郎・西崎一郎校訂 Lafcadio Hearn（1941）. *Complete Lectures on Art, Literature and Philosophy*. Revised Edition. Tokyo: The Hokuseido Press.を参照した（以下同じ）。

(25)「創作論」（『ラフカディオ・ハーン著作集』9、恒文社、1988）、58-60 頁。

(26)「創作論」（前掲）、75-76 頁。

(27)「トルストイの芸術論」（『ラフカディオ・ハーン著作集』9、恒文社、1988）、321 頁。

(28) 田部隆次『小泉八雲』（北星堂書店、1950）、125 頁。

(29) 北川芙生子『漱石の文法』（水声社、2012）第 4 章、佐々木英昭「漱石・子規の共鳴と乖離――千代女、スペンサー、Rhetoric,気節」（『比較文学研究』103、東京大学比較文学会、2017・9）などを参照。

(30)「イギリスの近代批評、および英仏文学の同時代の関係について」（『ラフカディオ・ハーン著作集』9、恒文社、1988）、97 頁。

(31)「文学と世論」（『ラフカディオ・ハーン著作集』6、恒文社、1980）、481-483 頁。一部訳文を改めた。なお本文中のタイトル「Literature and Political Opinion」の訳語としては、佐藤卓巳『輿論と世論――日本的民意の系譜学――』（新潮選書、2008）の「輿論：Public opinion／世論：popular sentiments」という区別にならい前者を採った。ただし本文にみえるとおり、講義中では「輿論」を形成する感情が焦点となっている。

(32)「文学と世論」（前掲）、484 頁。

(33)「読書論」（前掲）、9 頁。

【論文】

ハーンと日本人の表情

水須　詩織

はじめに

近年、ノンバーバルコミュニケーションの一つとして「表情」に関する研究が幅広い領域にわたって進められている。たとえば最新のスマートデバイスにも人間の表情を認識し再現する機能「アニ文字」が搭載され話題を呼んだことは記憶に新しい。顔の見えない他者との意思疎通をより円滑にするための新しい伝達手段として、こうした表情解析技術は通信の発展とともに今後さらなる展開が約束されている。しかしその根底には、表情を定量的に捉えるまなざしが暗黙裡に想定されているのであり、その側面について私たちは依然無防備なままである。「感情を量的に把握すること」は表情解析の実践をよぎる欲望の一つといえるが、いわゆる「無表情」で感情表現に乏しい者にとってこの事は切迫した問題として立ち現れてくる様に思える。たとえば表情解析によって再現された自身の表情と自身の感情にズレを感じた場合、表情を介したコミュニケーションは失敗しているわけで、そこでつきつけられるのは不安でなくて何であろうか。

今日よくしられるステレオタイプの一つに「感情表現に乏しい無表情な日本人」というものがあるが、これがセルフイメージとして立ち上がってくるのは近代以降のことである。とりわけ 1919 年第一次世界大戦後のパリ講和会議の場で西園寺公望が無表情で黙っている事に対して、各国から「象牙の面（Ivory　Mask）」と揶揄され非難を集めたこと等はある種のトラウマとして今日まで残っている様に思える。

> 日本人の顔の表情は西洋人には余程解り悪いと見えて巴里会議の時にも西園寺公の面を象牙の面などとアダ名を附けて無表情を唱たが今度のローザンヌ会議でも我林大使の面附を米国のネーションの通信員は馬鹿なのか悧巧なのか到底西洋人には解することが出来ないと評している。(1)

後述するように、日本人の表情に対する劣等感は明治期において既に胚胎されていた。その契機を探るときハーンの存在は避けては通れない。日本人自身が知らなかった日本人像を書き残したものとして、とりわけ「微笑」については、古き良き日本の精神を象徴するものとしてこれまで度々参照されてきた。しかしどのような表情であったかという問いの立て方では必然

(1) 記者不詳『東京朝日新聞』大正12(1923)年3月5日

ノスタルジックなトーンに回収されざるを得ず、かつてあったが既に失われた表情を再描出するといった試みには議論の限界がある様に思われる。むしろ重要なのはその様な表情に関する言説の契機がどこにあり、いかにして咀嚼されたのか検討することではないだろうか。本発表はこの様な問題意識の下、ハーン「日本絵画論」を取り上げ、そこで胚胎された「無表情な日本人像」がどのように醸成されていったのか分析するものである。

「日本絵画論」　日本の画に描かれた顔に関する西洋的まなざし　提示と誇張

「日本絵画論」は明治 30 年「帝国文科大學教師ラフカヂオ、ハーンの近稿」として雑誌『太陽』巻頭に掲載された[(2)]。この前年当時ボストンの有力誌であった『Atlantic Monthly』に掲載された記事の邦訳で、元は「About Faces of Japanese art」という標題が付けられていた[(3)]。邦訳にあたってより包括的な改題がなされているが、先行研究でも指摘がある通り内容面では両者に大きな違いは無く章構成（章区切り）が若干変更されたに留まる[(4)]。

同論は原題にある通り日本美術とりわけ浮世絵などの版画に描かれた顔について論ずるもので、その発端としてこの二年前 1895 年ロンドンで開催された「第 5 回倫敦日本協会」[(5)]での出来事が第一章で紹介されている。同協会会員 Edward F. Strange による研究発表は日本の美術とりわけ浮世絵を自国のデザイナー達に着想の参考として提案するというものであったが、この後のディスカッションで話題を集めたのは日本の美術に描かれた顔面の無表情さについてであった。この反応はハーンにとって意外だったらしく、嘆息まじりに報告している[(6)]。

> 現に或る紳士は何故か日本の美術は全然顔を描くの妙を欠くと嘆じ、他の紳士は日本の絵画の描ける如き容貌の婦人は世に有り得べからず其の顔の如きは全く癲狂の相を有すと迄断言せり
>
> 日本協会席上の某批評家は日本画は真の肖像をなし得ざる類型的約定のものなりとして非難し、此点を以て日本美術を古代埃及希臘の美術に劣るものと断ぜり

---

(2) 小泉八雲「日本絵画論」『太陽』明治30(1897)年7月20日

(3) Hearn, Lafcadio, About Faces in Japanese Art. 本稿ではGleanings in Buddha-fields : studies of hand and soul in the Far East(1897) 所収を参照。

(4) 高成玲子「ハーンは浮世絵に何を見たか」『富山国際大学現代社会学部紀要』平成21(2009)年3月

(5) Edward F. Strange, The Japanese Collections in the National Art Library, And their uses, South Kensington Museum, Transactions and Proceedings of the Japan Society , VolumeⅣ, London, 1895.

(6) 小泉八雲「日本絵画論」『太陽』3(15)、明治30年7月。

ここで日本の顔の表現について向けられた批判として挙げられているのは主に次の二点、つまり顔に生気が無い（表情が描かれていない）こと、また実在性の無い類型的＝紋切り型の表現であることである。またこのような批判的な見解について、「日本絵画の顔にして多数の西洋人に奇異、失魂と見ゆべくんば是れ渠等が之れを解し得ざるが為のみ」とある様に西洋人一般に共通のものとされる。「日本絵画論」はそのような西洋人に対して、日本人が自己の感情を内に秘めて外面に表さないのは東洋特有の思想に基づく美徳ゆえであるとして日本画に描かれた顔の理解を促す様な構成となっている。

ただし私たちはここで提示される批判には若干の誇張が施されていることに留意しなければならない。同論は一見、日本の美術に対する西洋人の批判的なまなざしを諌める様でいて、実のところそういったまなざしを却って強調している様にも思われるのである。たとえば、同協会において表情の乏しい顔の表現それ自体について寄せられた意見は実際には批判的な意見ばかりという訳ではなかった。同論の中では省かれているが、美の表現の一類型として「失魂の面（soulless　mask）」を捉え、古代ギリシャや 1830-40 年代のイギリス美術においても類例が見受けられるものだと弁護する意見もあった。また古代ギリシャとの類比によって日本画を評価（弁護）する、という構図は同論において何度も反復されているが、そうした弁護の論法自体は日本協会の場で既にみられたものであった。

なによりもまず、親日的な西洋人である協会会員にとってでさえ日本画に描かれた顔が「奇異、失魂」に見えるということはそれだけで既にある程度の説得力を持ちうるが、更にはハーンでさえ同様の印象を抱いていたことが同論中で告白されてしまう。ハーン自身も来日以前は日本美術の「顔面的表様の皆無なるを怪」み、「実際の容貌としてかくの如きもの存在すべきやを疑」う西洋人の一人であったという。しかし日常的に実際の日本人を目にする内に来日後二年ほど経った頃から、浮世絵に描かれた顔は生気を有しており、また市街至る所で見られる実在性を伴う表現であると感じられるようになったという。(7)

ここで興味深いのは、描かれた顔面（表情）とその国民の顔面とが接続されている点である。既に見たように、協会ではあくまでも表現類型の一つであるとして両者の相関は切り離されていた。一方、「日本絵画論」ではハーンの実経験を伴いより一層説得性を帯びるかたちで両者は連結されているのである。描かれた顔と実際の顔が重なる場合、ハーンによって弁護されているとはいえ、日本画に描かれた顔に多くの西洋人が抱いた印象（生気の無い、奇異な顔）は実際の身体の問題へと直結しうるものとなる。

『太陽』冒頭に掲載されたということから、同論は多くの日本人の目に触れたことは言うま

(7)「日本画工の描きたる顔は現実にして生気を有し何人にも適合すべきもの」「余は日本市街至る所、所謂浮世絵に描かれたる如き容貌の婦人を見る」

でもない。同時代の直接的な反応を見つけることはかなわなかったが、西洋人が日本の美術に対してどのような印象を抱いているかという観点はある程度関心をひくテーマであったと推察される。近代日本における西洋へのまなざしの特性について、吉見俊哉はその変化の重大な契機として万国博覧会との接触（1862 年、ロンドン）を挙げ、西洋と日本が相互にまなざす構図を強調している。

> 必ずしもヨーロッパが一方的に「日本」をまなざし、位置をづけていく関係ではなかったことである。ヨーロッパにまなざされていた日本は、確実に、そして熱烈に「ヨーロッパ」をまなざしてもいた。[(8)]

日本絵画論が『太陽』に掲載された明治 30 年はこの万博との接触時から何年か経ているわけで、この頃には日本をまなざす西洋人を更にまなざそうとする欲望が育まれていたに違いない。同誌次号には「日本の美術に対する外国人の観察二三」という記事が掲載され、標題の通り日本人の美術に対して外国人＝西洋人が抱く印象をいくつか紹介しているが、「日本絵画論」もその一つとして挙げられている。

> 文科大学教師小泉八雲氏の本邦絵画中の人面に関する意見は、外人一般の意見と異なる者あり。可一読也[(9)]

しかしこれまで見たようにそこで送り返されるまなざしは、却って自国の美術ひいては自身の身体における表情のあり様に不審感をもたらすものであった。ハーン「日本絵画論」はそれを弁護するものではあったが、却って日本の読者に対し批判的なまなざしを提示し、不安を胚胎させる契機となってしまっていたのではないか。

大町桂月と長谷川天渓　不安の顕現

大町桂月「藝術と面貌」　表現を規定する身体

明治 38 年『太陽』に掲載された大町桂月「藝術と面貌」および長谷川天渓「表情なき面貌と藝術家」は、ハーンによって喚起された不安の一つの結実として考えられる。桂月といえば国粋主義者的な人物として知られているが、そんな桂月でも唯一あまりの劣等感に嘆息せざるを得なかったのは日本人の面貌、とりわけその表情であった。

---

(8) 吉見俊哉『博覧会の政治学』平成4（1992）年

(9) 記者不詳「日本の美術に対する外国人の観察二三（一）」『太陽』第3巻第16号、明治30(1897)年

日本国民は、世界一等の人種と騁馳するを得べし。されど、面貌だけは、到底、白皙人種に比すべくもあらず。（中略）日本人の面に至りては、残念ながら、甚だお粗末也。男も、女も、尊げなさまなし。男に多きはひよつとこ面也。女に、お多福的美人あるも、女神的美人なし。全体の形が、まづき上に、殊に著しき欠点は、幾んど表情なきこと也。[10]

桂月によると、芸術が人の心を動かせるためには画家の技量だけではなく、そのモデルとなる国民の身体も無関係ではないという。ここにおいて日本人の表情の無さは芸術制作上の「ハンヂキヤツプ」として致命的な問題となって現れる。ハーンへの直接的な言及は無いが、「日本絵画論」でみた様な描かれた表情と実際の身体上の表情の連結が再現され、またそこで暗示されていた日本人の無表情さが劣等感として顕れているのをみとめることができる。

長谷川天渓「表情なき面貌と芸術家」

桂月の論の応答として、長谷川天渓「表情なき面貌と芸術家」が二ヶ月後同誌上に掲載された。「日本人は、藝術、殊に絵画、彫塑のモデルとしては、余りに表情なき面貌と姿勢とを有す」という点において桂月と意見を同じくするものだが、天渓の場合はその感情をこらえる様を「武士道の訓練を受けた」、「修練ある人物」の特徴として肯定的に捉え、むしろ積極的に画題とすべきだと主張する。

制情主義の鍛錬が、生理的関係より、邦人の顔面に表情なく、また表情に適せざらしめたるは、争ふべからざる事実なり。さはれ如何に情緒を隠蔽すればとて、人木石ならぬ限りは、何処にかこれを表現すべし。たとひ直接の感情を表せざるにもせよ、これを蔽はむとする意志の発動なかるべからず。是に於てか静寂沈痛の表情あり。これ画家の好材料ならずや。[11]

いずれもハーンへの直接的な言及は無いものの、描かれた表情と実際の身体に浮かぶ表情が地続きに捉えられている点で通底するところがある。このように日本人が無表情であるという問題は、芸術表現とりわけ美術の問題とからみあいながら何度も反復し醸成されていった。これが展開される場として今回『太陽』を挙げたが、同誌は日清戦争後の知識人層をはじめ大衆の知的欲求に応えるものとして当時有力な雑誌の一つであった。つまり、この問題意識は一部知識人のみならず広く大衆に同期されていったとみることができるのである。

---

(10) 大町桂月「藝術と面貌」『太陽』第11巻1号、明治38(1905)年1月

(11) 長谷川天渓「表情なき面貌と藝術家」『太陽』第11巻第4号、明治38(1905)年3月

明治 30 年代における表情と美術批評の結節点

近代語「表情」の生成

ではなぜ「日本絵画論」で提示された問題、描かれた表情と実際の表情の関係はこのようなかたちで顕在化したのか。これには「日本絵画論」から桂月、天渓の時代にかけて起こった表情認識の形成と無関係ではないように思われる。後述するように「表情」という語が形成され、また美術作品の批評言説に登場し始めるのは丁度明治 30 年代半ばのことであった。そもそも日本語「表情」は近代以降の知の再編に伴い新たに生成された近代語で、出典は中国の古典漢籍『白虎通』にまで遡行できるとされている[(12)]。近代日本において新しい西洋の知を翻訳するなかで古代中国の漢語が転用されることがあり、「表情」もそのように「近代に改造された漢字語」の一つに分類できるという[(13)]。語の定着について国語辞書への採録をそのメルクマールとするならば、それは明治 40 年まで待たねばならない。ハーンの「日本絵画論」では expression の訳語として「表出」という表現がされていた様に、表情は当時まさに揺らぎのなかにあったのであり、同論はそうした中で受容されたものであった。次の引用は明治 35 年東京人類学会誌に掲載された前田不二三による表情に関する記事だが、当時の表情に関する認識の度合いが伺えて非常に興味深い。

> 表出の研究は今日までに着手した人が少ないのみならず、之に関係した出版物も甚だ少ないものでありますから、表出といふことを知つて居らるゝ人は能く知つているし、知らない人は何の事であるか全く知つて居られない様子で、今日までに私に向つて表出といふ事は如何なる事かと質問されたる人が沢山あります。[(14)]

美術界限における「表情」問題の生起

これらのことを踏まえると明治 37 年の美術に関する記事において「表情」が散見されるのは、用例として比較的早いものとみなすことができる。その一例として『日本美術』に掲載された「表情寫生の一法」という記事があるが、実はその中にハーン「日本絵画論」に言及した箇所がある。

> それぞれの面相を改良して描写せんには、偶々以て良好なる性質を表するに足るべきか。又た嘗て大學教師たりし洋人某氏が、普通の相貌なる白人の老媼の図などを示して、日

(12)諸橋轍次『大漢和辞典』修訂第二版、大修館書店、平成1(1989)年

(13)金光林「近現代の中国語、韓国・朝鮮語における日本語の影響―日本の漢字語の移入を中心に―」『新潟産業大学人文学部紀要』第17号、2005年8月

(14)前田は坪井正五郎の弟子にあたる人類学者で、明治35～36年にかけて表情に関する記事を複数掲載している。

本の児女等に品評させしに、多くは不気味に恐ろしく感ぜしといふ。[15]

明らかにこれは「日本絵画論」第 7 章のくだりであり、「洋人某氏」はハーンであると同定できる。同記事の焦点は標題の示す通りいかにして表情を描写するかについて、画家の技量ではなく写生用モデルの問題に向けられている。「大体の態度すら殆ど示し難く、微妙の活相に至りては全く見得る」ことができないモデルに対し催眠術の応用を提案するといったものだが、日本人の身体の問題として言及されているのではない。ただ「日本絵画論」がこのような美術制作におけるモデルの表情の文脈で参照される文献の一つとして存立していたことは、翌年の桂月、天渓の論におけるハーンの影響を考えるうえで興味深いものといえる。またこの同年の白馬会評においても、表情がいかに描かれているかという観点で評価するものが散見された。

藤島武二氏の出品は孰れも表情を主として描いたものと察せらるゝが、此点から云ふと蝶、婦人肖像、エチユード、朝の四図が最も成功して居ると思ふ。[16]

お七の態度、表情共にこれ死物のみ木偶のみ、顔面一点の嬌羞を帯びず、態度些の艶冶なし。[17]

女の着眼点が真個に指にある、無邪気なる恋としては差支へもなからうが、此を男の瞳と合はしたならば、燃ゆるが如き表情は完全に現はされたのであらう。[18]

おそらくこの頃から美術界隈少なくとも「白馬会」周辺において「表情」の問題が一つのキータームとして浮上してくるのであり、それがモデルとなる日本人の身体の問題と接続していくのは既に桂月、天渓の例で見た通りである。[19] このような反復を通して広く同期された表情の不安は、この後も繰り返し変奏されていく。新渡戸稲造もまた同様に日本の美術における表情

(15) 記者不詳「表情寫生の一法」『日本美術』明治37年3月

(16) 記者不詳、『朝日新聞』明治37(1904)年10月23日

(17) 「藝苑雑感」『帝国文学』明治37(1904)年11月（小泉八雲記念号)。(和田英作「あるかなきかのとげ」評)

(18) 記者不詳「今年の白馬会（八)」『毎日新聞』明治37(1904)年10月31日。(和田英作「あるかなきかのとげ」評)

(19) 明治38年5月に刊行された白馬会の機関誌『光風』創刊号には、「表情の話」という標題でダーウィンの『人類及動物に於ける感動の表現』の抄訳が掲載されている。また、藤島武二自身、明治43年帰朝後の所感として、「ことに目立つて感じられるのは、日本婦人の顔面が表情に乏しいことである」と述べている（「表情とモデル」『趣味』明治43年3月)。

の問題を日本の身体の問題と直結するものとして次の様に慨嘆する。[20]

> 百姓の絵にしても、子供の絵にしても、顔に更に其表情と云ふことがない、精神が現れて居ない、即ちエキスプレッションとい云ふものが無い。
>
> 是は絵許りではない、一体日本の弁士でも文客でも、御互の話する場合でもさうである。
>
> 是は喜怒哀楽の外に現さぬと云ふ一個の褒むべき趣意から割り出して居るのかもしれぬが、又一方に此支那の―日本人に余り適しない所の―支那の美術思想が入ッて来た結果ではないかと思ふ。

ここで注目したいのは無表情の責任を中国からの影響に転嫁させている点である。日本人に特有の抑制された表情について、ハーンは東洋特有の思想に基づく美徳として、また長谷川天溪はそれを「武士道」の名残として捉えていた。表現こそ違えど日本人の無表情さは、旧来の思想に基づくものとして捉えられている点でいずれも共通しているのである。もちろん、実際に儒教思想が日本人の無表情の原因であるかどうかは重要な問題ではない。周知の通り旧思想の克服は近代化に奔走する明治大正という時代に通底する重要なテーマだったのであり、日本人の表情を「無表情」として非難することそれ自体に意味があったといえる。つまり、それは暗黙の内に旧来からの儒教的思想やそれに基づく振る舞いのコードを否定する事と通じており、その一つとして「表情」にその尺度が当てられていた。本稿冒頭でも表情の度合いをめぐる違和感について触れたが、他者の表情をみるまなざしは時に他者あるいは自身を計ろうとする欲望とは無関係ではないのである。

以上見た通り明治 30 年代という期間は、近代日本において表情という語が生成し、それが美術批評の言説と結びついていく時期であった。また同時に「無表情な日本人」という像は美術における再現表象の問題、また近代化のための旧習の克服の問題と密接に重なり合いながら醸成されていったのであり、ハーン「日本絵画論」はそれら言説の根底に潜む結節点（始点）として捉えることができるのである。

---

(20) 新渡戸稲造「日本人は凡べて表情が足らぬ」『新公論』明治40年6月。ちなみに富山大学ヘルン文庫には新渡戸からの寄贈書『武士道』(1900)が所蔵されている。

【論文】

ハーンと大正日本の想像力――佐藤春夫の場合――

河野　龍也

１．佐藤春夫におけるハーン文学との出会い

幻想や無意識、怪奇や恐怖といった人の心の深層を文学上の大きなテーマに据えたのが大正期の日本であるならば、志賀直哉、芥川龍之介、佐藤春夫はこの分野の代表として最初に名前が挙がる作家だろう。そして単にテーマの上から言えば、ラフカディオ・ハーンに対する彼らの関心は当然高かったと思われるのだが、志賀や芥川による言及が意外にも少ないのに対し、佐藤春夫は文字通り生涯にわたる心酔者だった。現に彼は、デビュー当初からハーンの『中国霊異談』（*Some Chinese Ghosts,* 1887）所収「孟沂（もうぎ）の話」（“The Story of Ming-Y”）を『解放』1919 年 7 月号に翻訳紹介しているし、またハーンの没後 30 年にあたる 1934 年には、豪華限定本『小泉八雲秘稿画本　妖魔詩話』（1934.9 小山書店）の出版を小泉一雄（ハーンの長男）に勧め、自らも在米記者時代のハーンの記事を『尖塔登攀記』（1934.11 白水社）として翻訳刊行するなど、知られざるハーン文学の発掘と普及に貢献している。

『尖塔登攀記』に収録された解説「小泉八雲が初期の文章に就て」（初出『文芸』1934.9）によると、春夫のハーンに対する傾倒は古く、〈上京後間もなくだつたから、わが十九歳の春、二十年余の昔〉〈本郷通りの古本屋で田部隆次氏著の「小泉八雲」の原刊本――忘れもせぬが色箔で青竹の幹を現はした白つぽい表紙の菊判の厚手なのを、一円八十銭か六十銭か少々不廉な価ではあつたが〉喜んで買い、〈以前から折にふれてはその作品を愛読してゐた作家の為人（ひととなり）を追慕〉したことがきっかけだったとされている。だが、春夫の上京は 1910 年 4 月（数え年 19）、田部隆次による伝記『小泉八雲』（早稲田大学出版部）の出版が 1914 年 4 月であることを考えると、春夫の記憶には明らかな年代の混乱がある。現在確認し得る限りでは、「孟沂の話」の翻訳直後にあたる 1919 年 7 月 24 日、父豊太郎に宛てて〈昨今「小泉八雲」伝記愛読。この人はきつと父上に気に入ります〉と書き送っているのが本書に関する最古の言及である。むろん初読はもっと早いはずで、少なくとも「田園の憂鬱」の構想段階に本書が強く影響したことは疑う余地はない。また、同時期までには「孟沂の話」の底本である『中国霊異談』のほかに、『骨董』（*Kotto,* 1902）を原書で読んでいた可能性もある。

上京後、詩歌から散文への転向に苦しみ、25 歳（1916 年）で神奈川県都筑郡中里村（現横浜市青葉区）で節約生活を始めるほど逼迫した春夫は、その「若隠居」としての体験をもとに「病める薔薇」（『黒潮』1917.6）を、そして「田園の憂鬱」（『中外』1918.9）を書いて起死回生を果たした。作家・佐藤春夫誕生のこの最も重要な時期にハーンの伝記を愛読したと

事実が意味するものは一体何か。

本稿では、大正作家に対するハーンの影響力が最も顕著に現れた例として佐藤春夫を取り上げ、まずは春夫の直接的な言及からそのハーン観を観察する。次にデビュー作「田園の憂鬱」と翻訳「孟沂の話」を取り上げ、ハーンの思想や文学手法が春夫の創作活動にどう活かされたかをより具体的に検証することで、第一書房版『邦訳小泉八雲全集』（1926-1928）刊行以前の近代日本文学におけるハーン受容の一端を明らかにしてみたい。

２．春夫が描く３つのハーン像

佐藤春夫がラフカディオ・ハーンの名に触れる文章は生涯で 30 篇以上に及ぶが、そこに示された春夫のハーンへの理解の仕方には 3 つの柱がある。

第一に、「生活態度が東洋的文人に通じる特異な西洋人」としてのハーン像である。例えば春夫の代表的評論として著名な「「風流」論」（『中央公論』1924.4）は、1924 年 2 月の「新潮合評会」で、室生犀星の小説に意志的な「風流」の態度を見るという久米正雄・徳田秋声の〈風流意志説〉に異議を唱え、「風流」を徹頭徹尾感覚的なものと主張した自身の〈風流感覚説〉を展開したものである。春夫によれば、〈花鳥風月やその他一切の自然物に対して全く同胞〉であるという〈汎神論的の哲理〉こそ「風流」の本質で、〈人間が全く自然に服し切つて人間的意志を＋的にも一的にも一切働かせな〉いことがその絶対条件であるという。そしてこの〈「花鳥風月を友」とするといふ表現〉に驚嘆した人物としてハーンの名を挙げ、彼を〈西洋人としては最高の風流文人〉と位置づけるのである。同様の見方は「邦訳小泉八雲全集に就て」（『報知新聞』1926.4.29）にも顕著に見られる。〈青春時代には浪漫的な唯美的な且つやや所謂頽唐派的な傾向にも同感があつた〉ハーンの作風は〈晩年に近づくほど心境的な人格的なものに〉変化し、〈一種東洋の文人などと実に似通うた或物を示〉すようになったという。その精神は〈東洋から学ぶ所があつたなどといふ外面的なものではなく〉〈内面的〉な変化であり、ハーン自身の本性に根差すものだったからこそ日本文化に深い共感が持てた。この「文人」としてのハーンのイメージを、春夫は〈田部（註・隆次）氏の著作になる評伝「小泉八雲」を愛読した時〉〈痛切に感じた〉と言っている。

第二に、「庶民の心情に寄り添う芸術家」としてのハーン像である。「大衆文芸私見」（『中央公論』1926.7）には、〈ラフカデオ・ヘルンがトルストイの芸術論に讃同して、「よい文芸は百姓にでもわかるとトルストイの言ふのはまだ足りない。百姓のごとき生れながらの心を持つた人々にこそ最もよく判る筈だ」といふ意味を力説してゐるのは名言である〉〈このやうな大衆文芸は決して片手間の小使銭稼ぎのつもりでは出来ないだらう〉とあり、「小泉八雲に就てのノート」（『文芸研究』1928.9）にも、〈「或る女の日記」（といふ題であつたと思ふが、或る不幸な日本の女の結婚前後から間もなく死ぬまでの事を書いたもの）を紹介した八雲には、

トルストイの芸術論は或る点で充分同感であつたに違いない〉と述べている。

第三に、「自然（特に小動物や虫）を愛でる先天的な感性の持ち主」としてのハーン像である。『私の享楽論』（1956.12、朝日新聞社）には〈小泉八雲は自然の美を知ることや魚虫小動物に対する愛情などは先天的なもので後天的にこれを与へにくいと云つてゐたやうにおぼえてゐる。これは一面の真理で、原始人の素質をより多く遺し伝へて保存してゐるか否かが彼の云ふ先天的な素質の問題であるが〉〈わたくしはこれを先天的の素質といふよりも一種の精神的習慣〉〈格別に天分といふほどのものとは思つてゐない〉と述べている。同様の言及は「自然の童話」（『群像』1947.4）や「愉快な教室」（『マドモアゼル』1960.5）など数多い。

春夫はハーンをロマン主義の天才というよりも、より庶民的な存在として捉え、自然を享楽するその文人的な人生態度に敬意を抱いていたことが分かる。もちろん、それが学術的に「正しい」ハーン理解であったかどうかは当面の問題ではない。例えば第一のハーン像は、大正末期の日本文壇で大きな論議を巻き起こした「私小説（心境小説）論争」の中にハーンを担ぎ出したものであるし、第二のハーン像もまた、関東大震災からの復興を背景に、ラジオ放送や映画の流行、娯楽雑誌や長篇連載小説への需要の高まりという現象となって出現した大衆文化の時代に歩調を合わせながらも、いかに反俗的な文学者の良心を保つかという春夫自身の危機意識を反映したものだ。また第三のハーン像は、信州佐久の疎開先から戦後の頽廃を嘆き、自然を享楽する隠遁の姿勢を示すことで表現者としての自己を立て直そうと図った時期のものである。それらはいずれも春夫がその折々に必要とした理想的自画像としてのハーンであろう。

もちろん重要なのは、春夫が文学者として試練の時期を迎えるごとにハーンへの言及を繰り返し、彼の文学や人生態度の中に自分の進むべき道を見出そうとしていた事実である。そしてまた、春夫は戦争詩人として積極的に国策協力しながら、日本文化の卓越性を自己確認するような目的でハーンを安直に利用することは決してしなかった。春夫の敬意がそれだけ根差しの深いものだったことを物語っている。「風流」という感覚や「文人」という態度は、何も日本人や東洋人の特権として東西文化を切断するものではなく、まして芸術家を権威づける特殊な才能でもない。それらはすべての人間が自然への親しみという形で生来持っている普遍的感覚なのだということを、春夫はハーンという実例から学び取っていたようなのである。

３．田部隆次『小泉八雲』と「田園の憂鬱」

それではここからデビュー作「田園の憂鬱」を取り上げ、春夫の出発期にハーンが果たした内面的な役割を検証してみたい。本作の主人公は都会生活に疲弊した芸術家志望の青年である。彼は郊外の農村に安息を求めてやってくるが、感性がますます過敏になり、かえって幻視や幻聴に悩み始める。ある秋晴れの朝、自分の芸術的才能を象徴する存在として丹精してきた庭の薔薇が、哀れな虫食いの姿で発見されたとき、彼の身体は〈おお、薔薇、汝病めり！〉という

謎の声を繰り返し奏で始めるという内容である。本稿での引用は、決定版の『田園の憂鬱』（1919.6、新潮社）に基づくものとする。

さて、本作の主人公が病的に見える理由を一口に言えば、それは自然現象をことごとく彼自身の象徴に見立ててしまう思考習慣の問題と言える。克明な自然観察がすぐに自己省察へと折り返し、観察する自分がいつの間にか観察される側にまわっているという反転現象。そこには観察対象への同化という自己溶解の願望が現れていると同時に、同化した自分を外から観察する別個の自分を生み出す所に自己分裂の契機が含まれている。溶解と分裂を繰り返す運動体としての彼の心の状態は、ランプに来た馬追いをじっと観察する次のエピソードに集約的な形で現れている。

> この青い細長い形の優雅な虫は、そのきやしやな背中の頂のところだけ赤茶けた色をして居た。彼は螢の首すぢの赤いことを初めて知り得て、それを歌つた松尾桃青の心持を感ずることが出来た。この虫は、しばらくその円いところをぐるぐると歩いた。さうして時時、不意に、壁の長押や、障子の桟や、取り散した書棚や、或は夜更しをしすぎて何時になれば寝るものともきまらない夫を勝手にさせて自分だけ先づ眠つて居る彼の妻の蚊帳の上のどこかなどへ、身軽に飛び渡つては鳴いて見せた。「人間に生れることばかりが、必ずしも幸福ではない」と、草雲雀に就てそんなことを或る詩人が言った「今度生れ変る時にはこんな虫になるのもいい。」

こうして観察が内省を招き寄せると、彼の眼には〈シルクハットの上へ薄羽蜉蝣（うすばかげろう）のとまつて居る小さな世界〉が見え始め、自分もその世界の中で電燈の光に照らされているような気分に浸りはじめる。しかし、ふと振り仰いだ目にランプの燈が見え、そこで初めて空想と現実とを混同していた自分の錯覚に気付いて愕然となるという場面が続く。

文中の〈詩人〉がハーンを指すことは言うまでもないだろう[i]。ただし、この一文は「草雲雀」（“Kusa-Hibari”）ではなく[ii]、同じ単行本『骨董』に収録された「餓鬼」（“Gaki”）の末尾にある一節、“In fact I have not been able to convince myself that it is really an inestimable privilege to be reborn a human being. And if the thinking of this thought, and the act of writing it down, must inevitably affect my next rebirth, then let me hope that the state to which I am destined will not be worse than that of a cicada or of a dragon-fly”の方に近い。さらには、引用中に示唆される伝・松尾芭蕉作の俳句〈昼見れば首筋赤き螢かな〉も、ハーンが「螢」（“Fireflies”『骨董』所収）の中で“Oh, this firefly! –seen by daylight, the nape of its neck is red!”と英訳紹介した一句なのである（ただし芭蕉の作という記述はない）。ちなみに、前述の「小泉八雲に就てのノート」で言及されていた「或る女の日記」（“A

Woman’s Diary”）も『骨董』収録の文章である。春夫が原書で同書に親しんでいたと推測されるゆえんである[iii]。

もっとも、引用個所により直接的に関わるのは、田部隆次の『小泉八雲』第 13 章「刻苦精励と趣味」の一節だろう。なぜなら、ハーンの思想と人柄を紹介したこの章では特に「餓鬼」が大きく取り上げられ、〈実際、再び人間と生れ代ることを非常の恩沢とばかり考ふることができない。もし、かう考へて、かう書いて置くことが、来世の因縁をつくるものなら、自分は蝉か蜻蛉になつて生れたい〉（p.338）という、先の英文に対応する箇所の訳文が示されているからである。しかもこれは「草雲雀」の紹介文（p337）の直後に、同じ文脈の中で登場する。春夫が出典を取り違えた理由もこれで十分説明できるのである。

さて、田部は「草雲雀」の思想を、〈生命の大海では此一微細の小虫のうちに動いて居る魂も自分の魂も同じいことを述べた〉と要約している。「田園の憂鬱」や「「風流」論」の成立を考えるとき、田部の解説を経由したハーンのこの汎神論的な発想がどれほど重要かはいくら強調してもし過ぎるということがない。自然への没我的な愛好心は春夫文学の全体を特徴づける要素だが、その発想源には国木田独歩と並んで、ハーンの存在を想定すべきだろう。

馬追いを観察する場面で、主人公がランプの光と電燈の光とを混同しているのは、ごく常識的に解釈すれば、〈都会に対するノスタルジア〉を感じ始めた無意識領域からのシグナルと見なすことができる。だが、ここでわざわざハーンが引用されたことの意味を重視するなら、これこそ虫を見つめるうちに、自分がその虫になってしまうという生まれ変わりの幻想を語った場面なのだ。田舎暮らしを始めた当初、主人公は羽化したばかりの蝉の生命力に感動し、〈この小さな虫は己だ！〉という無言の叫びを発して蝉になり切ろうとしている。その祈りはこの場面にも反復されているのである。

春夫が蝉への祈りやこの場面で試みたのは、凝視（精神集中）によって個体の殻から解き放たれ、己が他なるものに成り代わってしまうという一種の催眠状態、あるいは仮死状態の感覚を言葉に置き換えてみせることだった。『仏の国の落穂』（Gleanings in Buddha-Filds, 1897）所収「生神様」（“A living God”）において、ハーンにも同様の試みが見られることは、二人の作家に共通の資質が存在することを裏付けるものだろう。この文章の中で、ハーンは神社に参拝するとき何かに憑依される感覚に陥ると言い、その何者か（日本の神）になってしまった場合の実に奇妙な知覚作用を様々に想像してみせるのである。

> 空気の鳥に対するごとく、水の魚に対するごとく、あらゆる物質は私の本質に対して透過性のものとなる。それだから私は自分の住居の壁を思いのままに通り抜けて金色の陽光を浴びて長く泳ぐこともできれば、花の芯の中にふるえながら忍びこむこともできる。またやんまの首に跨って飛び廻ることもできる。（平川祐弘訳）

日本の神になった自分は小さな社の中で、そこを訪れる様々な人々、例えば若い娘の恋の願いを聞きながら、自分もまた切ない願いを持つ若者だった時分の記憶を蘇らせている。

仮にこの文章を、「田園の憂鬱」とほぼ同時代の志賀直哉の一文「城崎にて」（『白樺』1917.5）と比較してみると、三者の想像力の親疎は歴然としている。

> 自分は別に蠑螈（ゐもり）を狙はなかつた。狙つても迚も当らない程、狙つて投げる事の下手な自分はそれが当る事などは全く考へなかつた。（略）蠑螈にとつては全く不意な死であつた。自分は暫く其処に踞（しやが）んでゐた。蠑螈と自分だけになつたやうな心持がして蠑螈の身に自分がなつて其心持を感じた。可哀想に想ふと同時に、生き物の淋しさを一緒に感じた。

〈蠑螈の身に自分がなつて其心持を感じた〉と志賀は言う。だが、そのように感じる〈自分〉には、〈生き物の淋しさを一緒に感じ〉る一方で、〈可哀想に想ふ〉気持ちも〈同時に〉存在し続けている。志賀が説く対象への共感は揺るがぬ〈自分〉を根拠とするもので、それは決して「没我」を意味しない。知覚の主体を全面的に他なる存在へと明け渡す「個の放棄」の発想は、思えば「風流」を脱意志の享楽と規定するいかにも春夫らしい想像力であった。この発想を育てる上で、春夫が理想的〈文人〉と述べたハーンからの思想的摂取は重い意味を持っている。とりわけ「田園の憂鬱」は、ハーンからの影響があるどころか、その世界観自体がまるごとハーンの思想を母胎に生み出されていると言っても過言ではないほどなのである。

４．文体獲得の試行――「孟沂の話」の翻訳

春夫は『田園の憂鬱』の決定版を上梓した直後に「孟沂の話」を訳した。中村三代司はこの訳業を、春夫が唐代の妓女・薛濤に関心を抱く契機になったと論じているが[iv]、ここではより具体的に、春夫がハーンから何を汲み取ったかを表現面から問題にしてみたい。

春夫は訳出にあたり、ハーン自身が典拠にしたと明かす『今古奇観』（*Kin-Kou-Ki-Koan*）の第三十四巻「女秀才移花接木」を自分も参照したと〈訳者附記〉で述べている。また春夫は、ハーンが拠ったフランス語訳の原訳者（Gustave Schlegel）が、『情史』第二十「情鬼類」の類話も参考にしたと考えられることから、これも〈併せ見た〉と称している。中国語（白話文）からフランス語経由で英語に移されたテクストを日本語に訳すという、重訳に次ぐ重訳の問題を孕んだ本作であるが、ここでは『今古奇観』をハーンがどう改変したかという問題と、春夫の翻訳は何を目指したのかという 2 点の問題に絞って考察したい。なお、引用に付した記号は、〔原典〕が『今古奇観』を、〔ハーン〕が“The Story of Ming-Y”（*Some Chinese Ghosts, 1886* 所収）を、〔春夫訳〕が「孟沂の話」（『解放』1919.7）を、〔参考訳〕が平川祐弘訳

「孟沂の話」（講談社学術文庫版『クレオール物語』1991.5 所収）を指すものとする。

まず、〔原典〕と〔ハーン〕を比較した時、ストーリー上特に重要な改変が三点あることに気付く。一点目は、孟沂と薛濤の馴初めの場面である。〔原典〕では妓女の薛濤が若い学生の孟沂を寝室に誘うが（美人延入寝室，自薦枕席）、〔ハーン〕では孟沂の方から薛濤に口づけする（Ming-Y could not restrain himself from putting his arm about her round neck and drawing her dainty head closer to him, and kissing the lips that were so much ruddier and sweeter than the wine）。また〔原典〕には、薛濤が「独り寝が久しいので平静ではいられぬ」と言い（妾獨處已久，今見郎君高雅，不能無情）、露骨という程ではないが、着物を脱いで歓を尽くすエロチックな描写がある（兩個解衣就枕，魚水歡情，極其繾綣）。しかし〔ハーン〕にはこの閨房の描写が存在しない（the night grew old, and they knew it not）。

二点目は、二人の密会が露顕する場面である。〔原典〕では、夜間の外出を父に咎められた孟沂が、「誘ったのは薛濤だ」と卑怯な言い訳をするのに対し（此乃令親相留，非小生敢作此無行之事）、〔ハーン〕では“the son refusing to obey his father shall be punished with one hundred blows of the bamboo”（父の命に叛く子は一百の鞭撻を以つて罰せらるべし〔春夫訳〕）という律法を恐れた孟沂が、孝行心と愛情の板挟みに苦しんだ経緯を強調している。

三点目は、後日談である。〔原典〕では、すでに進士に及第して大を成した孟沂が、薛濤からもらった２つの記念品を証拠に、自分の情史を好んで人々に語り聞かせたとされるのに対し（常對人**說**，便將二玉物為證）、〔ハーン〕では、子供たちが記念品の由来を尋ねたときでさえも、孟沂は薛濤との思い出を口外しなかったとされる（he never spoke of her,—not even when his children begged him to tell them）。

以上を比較してみると、〔原典〕の孟沂は軽薄かつ受動的で、無節操に薛濤の愛情を踏みにじるのに対し、〔ハーン〕の孟沂は薛濤に心からの敬意を捧げ、秘めた愛を貫く男とされている。〔原典〕の薛濤は飽くまでも妓女としての粗略な扱いしか受けていないが、〔ハーン〕の薛濤は純愛の対象であり、孟沂にも騎士道的な責任感が与えられているのである。

このようなハーンの創意は、春夫の関心を十分惹き付けたに違いない。1919 年当時、春夫は近隣に住む親友の谷崎潤一郎と親密に往来するなかで、夫に冷遇される谷崎千代に同情を深めていた。1920 年末、離婚を決意した谷崎の勧めで春夫は千代と交際するが、結局谷崎の翻意で夫妻と絶交を余儀なくされる。その苦しみの中から生まれた『殉情詩集』（1921.7 新潮社）の第一章には、薛濤の「春望三」にちなむ〈同心草〉のタイトルがつけられ、エピグラフにも同詩の全文〈風花日將老／佳期猶緲緲／不結同心人／空結同心草〉が掲げられることになった。春夫は別にこの詩を〈しづこころなく花散れば／長息（なげき）ぞながきわがたもと／なさけをつくす君をなみ／摘むやうれひのつくづくし〉（「支那の詩より」『蜘蛛』1921.8）と訳し、「つみ草」に改題して『我が一九二二年』（1923.2、新潮社）に収録、さらに「春のをとめ」に改

題して『車塵集』（1929.9、武蔵野書院）に収録している。会えない恋人に思いを寄せる男の「殉情」のテーマは、まさにハーンが造型した孟沂像に自らをなぞらえたものだろう。同様の心情を現実の薛濤が詠っていたことも、春夫の関心を深く捉えたに違いない。『殉情詩集』の自己演出には、ハーンのテクストが大きく関与していたと言えるのである。

さて次に、〔ハーン〕と〔春夫訳〕を比較してみたい。春夫の訳は厳密すぎるほどの逐語訳で、いわゆる名訳ではない。例えば森の中で薛濤の姿を初めて見る場面、“a sound caused him to turn his eyes toward a shady place where wild peach-trees were in bloom”を春夫は〈物音が彼をして、花盛りの野生の桃のある日蔭の所へ、彼の目をそむけさせた〉と、無生物主語の構文をそのままに訳し下している。〈振向くと向うに影深い場所があって野性の桃の花が咲き乱れているのが見えた〉という〔参考訳〕と比較すると、どちらが自然な日本語かは明白である。日本語を不自然なものにしてまで、春夫は逐語訳にこだわったということだ。

別の問題もある。例えば、薛濤の眼の美しさを形容した〔ハーン〕の、“the brightness of her long eyes, that sparkled under a pair of brows as daintily curved as the wings of the silkworm butterfly outspread”の部分が、〔春夫訳〕では〈蚕の蝶のつき延した翅（勿論蛾眉の誤り）のやうに繊美に曲つた眉の下で閃めいた、その長い目の耀き〉と訳されている。黙って〈蛾眉〉に直しておけば良いものを、あえてそうしなかったのは、春夫の目的が流麗な訳文を目指すのとは違う所にあるからだと考えざるを得ない。同様の例は、〈彼の女に関しての何事かを君が知らうと思ふならば、誰か Kiang-kou-jin――多少の tsien（伝？譚？）即ち過去の伝説を参酌して、耳を傾けてゐる人人に夜話をする名高い支那の物語作者たち――から、それを知るがいい〉という冒頭部分にも指摘できる。中国語の発音がアルファベット表記されているため文意が摑めない箇所でも、春夫は省略してごまかす手段をとらないのである[v]。

そもそも、もしこの翻訳が薛濤の故事の紹介を目的とするものならば、『今古奇観』を直接日本語に移せば済む。それをわざわざフランス語訳に基づくハーンの英文から訳出したのだから、春夫の関心は、東洋の物語が西洋人の眼からどのように異化されているか、それを対訳作業によって検証する所にあったことは明らかである。その一つの収穫として、春夫はハーンが改変した孟沂の性格の中に、「殉情」という理想を見出したことになる。

一方、日本語としての自然さを損なったり、不明な箇所を原文のまま残したりしてまで忠実な逐語訳を心掛けたのはなぜだろうか。そこで得るものがあるとすれば、英語にあらわれたハーンの文体に学ぶということ以外には考えにくい。春夫は「孟沂の話」発表に続く 1919 年 11 月、同じ『解放』誌上にエドガー・アラン・ポーの「アモンチリャドウの樽」を発表している。後年春夫はその動機を、〈一度自分で訳してみる（といふことはつまり最も詳しく読み味ふことだと思ふが）、ことによつてポオの文体をよく知りたいと思つたから〉と述べ、その結果、ポーの文章が〈簡潔明確〉な〈柳宗元や韓退之の文〉に似通う趣を持つこと、またその特徴で

ある〈余情ならぬ余情〉が、〈読者の空想力を刺戟して置いて、わざと書き残し飛躍して表現力の隙間を読者自身に補はせる〉省筆の手法にあることを学び得たとしている（「幽玄の詩人ポオ」『ポオ全集』月報②1963.8）。後年「しやべるやうに書く」をモットーに掲げた春夫が、デビュー当座、〈ドライな金石文か法律文書か何かのやうな、今日自分の書く文章とは全く対蹠的な文体を求めてゐた〉（「うぬぼれかがみ」『新潮』1961.10）ことはよく知られている。つまり、当時の春夫にとって、翻訳とは流麗な訳文を読者に提供するためのものでなく、自分の日本語を改造するための手段だったことになる。それは訳し方を見る限り「孟沂の話」にも全く当てはまる。ハーンは文体獲得の面でも春夫にとっての手本だったのである。

本稿では、1918 年前後の出発期の佐藤春夫にとって、ラフカディオ・ハーンがいかに目標となり、また発想の源となる存在だったかを確認してきた。課題として残された、1934 年の『妖魔詩話』『尖塔登攀記』の出版を中心とする春夫と小泉家との関りや翻訳の問題については、稿を改めて考察する機会を持ちたいと考えている。

〔付記〕本稿は、「富山大学ラフカディオ・ハーン研究国際シンポジウム」（2017 年 12 月 23 日於富山大学）における研究発表「ハーンと大正日本の想像力―佐藤春夫を中心に―」に基づくものです。会場から数々の貴重なご意見を頂戴しました。心から感謝申し上げます。

---

i 後年の随筆『白雲去来』（1956.2、筑摩書房）の中で春夫は同じ言葉を引用し、〈ラフカディオ・ハーンは人間に生れるばかりが幸福とも限るまい。次の世には鳴く虫になるのもよいと言つてゐる〉と述べていて、これが出典の確実な種明しになっている。

ii 強いて言えば、“There are human crickets who must eat their own hearts in order to sing.”（歌うためには自分の心臓をくらわなくてはならない人間の姿をしたこおろぎもいるのである）という末尾の一文に類似の発想が窺われる。

iii ただし『佐藤春夫記念館所蔵　佐藤家旧蔵洋書目録』（2011.3 新宮市立佐藤春夫記念館）に『骨董』は含まれておらず、その他のハーン著作も後年購入したものが多い。

iv 中村三代司「佐藤春夫とハーン」（『国文学：解釈と教材の研究』1998.7）。

v ちなみに〔参考訳〕では〈彼女にまつわることはもしやひょっとして講古人に訊けばなにか教えてくれるかもしれません。講古人というのはあの有名な中国の講釈師たちの名前です。何銭か恵んでやれば、夜な夜な聴きに集る人々に昔の伝説を物語ってくれる人々のことです〉とある。Kiang-kou-jin は講古人、tsien は銭である。

【概要】

文学教育の題材としての小泉八雲

――富山大学の近年の実践例をもとに――

小谷　瑛輔

１、富山大学の教育における小泉八雲

富山大学では、小泉八雲の蔵書をヘルン文庫として保管しているが、学生生活の複数の局面で八雲に親しんで貰う仕掛けが用意されており、また、教育においても多様な形で八雲を活用した実践を行っている。文学教育においては、まず作家の存在を知り、身近に感じるかどうかが対象に向き合う学生の姿勢を規定する大きな要素であるため、はじめにそれぞれ簡単に確認しておきたい。

まず、五福キャンパスの学生が学修の拠点とする中央図書館では、入り口に常にヘルン文庫の案内が掲示されており、毎月第 2・第 3・第 4 水曜日にはヘルン文庫の部屋を開放してボランティアスタッフなどによるガイドが受けられる。またヘルン文庫の部屋の前には、閉室中も八雲について基礎的なことを知ることができるような展示物が常時置かれている。

学外者にはあまり知られていないことだが、学生が八雲の存在を感じるのはこれだけではない。富山大学では、履修登録システムが「ヘルンシステム」と名付けられており、ログイン画面で大きく八雲の写真が表示される。「また Hearing（聞く）、Network（ネットワーク）という意味を込めた、皆さんの意見に耳を傾けながら実現していくネットワークシステムです」との説明もあり、学生主体の教育理念の象徴としての位置が八雲に与えられている。

さらに、生協食堂では 2012 年から「ヘルンランチ」という名のメニューが提供されており、これは八雲が *La Cuisine Creole: A Collection of Culinary Recipes*（1885）で紹介した gumbo という料理をアレンジしたものである。現在は「ガンボライス」という名称で提供されているが、このように、学生は多くの局面で「ヘルン」の名や存在を身近に感じる環境が作られている。

さて、具体的な教育の中でどのように八雲が扱われているかを紹介するのが本報告の趣旨であるが、まず人文学部の 1 年生向け教養教育「基礎ゼミナール」について触れておきたい。富山大学では、1 年生で教養教育を受け、2 年生から学部の専門教育に移っていくという形になっているが、人文学部の 1 年生が受ける数少ない専門の科目として、「基礎ゼミナール」というものがある。この授業では、中央図書館の協力のもと、図書館の使い方ガイドの回を設定する教員が多いが、学生はそこで図書館職員にヘルン文庫を案内して貰い、八雲という人物についての基礎情報や、ヘルン文庫の来歴などについて一通りのレクチャーを受けることになる。人文学部の学生の多くは、入学して間もない時期に、八雲やヘルン文庫についてのあらかたの知識を得ることになって

いるのである。

人文学部以外の 1 年生が受けることのできる授業として「教養原論」科目の中の一つに「日本文学」というものがあり、稿者はこれを担当している。この授業では明治期に日本がいかに西洋文学を受容していったかという文脈で、八雲について触れるようにしている。　また、人文学部の 1 年生が後期から履修可能な授業として「日本文学史」があり、ここでも同様に八雲を扱い、よく知られている「雪女」「耳なし芳一」「ろくろ首」などの怪談の作者が八雲であることを説明するが、普段八雲の名を頻繁に目にしている学生も、親しんできた作品の作者であるというようには結び付いていない場合も多く、ここで初めて知るという反応がよく得られる。その八雲が東京大学で英文学を講じ、日本の西洋文学受容において重要な役割を果たしたことを述べて、文学史の流れの中に八雲を位置付けて貰う。

人文学部の学生は、2 年生からコースに分かれ、それぞれの分野で卒論執筆に向けて専門的な学修を開始する。そこから開始される演習形式の授業「日本文学演習」「日本文学講読」では、学生が自ら題材を選択して発表を行うが、稿者はこれらの授業で八雲を扱うことを慫慂し、あるいは八雲を題材として選びやすいようなテーマ設定を与えており、その結果、毎年複数の小泉八雲に関する発表がなされている。以前に聞いた八雲についての発表から得られた知見や問題意識を生かして、自身の八雲についての研究発表に活かす、という連鎖が続いており、ゼミ全体で八雲への理解が深まっていっていることを感じているが、こうした中で、卒業論文のテーマに八雲をテーマとして選ぶ学生も毎年見られるという状況が生じている。ヘルン文庫は、八雲の蔵書に加えて、八雲関係の研究書など二次資料も収集しているため、八雲をテーマとした研究は行いやすい環境が整っている。日本文学研究一般のための資料面でいえば、富山大学は全国的に恵まれた環境とは言えないが、八雲を研究する上では非常に恵まれた状況となっているのであり、富山大学で八雲を研究テーマの候補として考える学生が出てくることは、望ましいことと言える。

また、富山大学ヘルン（小泉八雲）研究会では、原則メンバーのみの参加のもとで例会を行ってきたが、教育上の効果を考慮して、2017 年度から、学生の聴講を認める試みを始めている。これに加え、毎年開催される八雲関係の講演会やシンポジウムには積極的に参加するよう学生たちに呼びかけており、八雲の研究の最先端の状況を知る機会を与えるよう努めている。

２、人文学部の学生・卒業生による研究成果の紹介

シンポジウムの発表では、日本文学教育において小泉八雲を扱う中で見えてきた教材としての特徴や課題について述べたが、これについては今回の報告原稿では割愛し、ここでは人文学部の学生・卒業生による研究成果についての報告のことをまとめておきたい。

稿者の着任前の学生のものになるが、精力的にハーンについての研究に取り組み、現在もその成果の報告を続けている今村郁夫のものをまず挙げておきたい。今村は、ヘルン文庫の和漢書の書き込みを網羅的に調査し、それをまとめるという「ヘルン文庫書き込み調査：和漢書を中心に」

（『富大比較文学』2008 年 11 月）、「ヘルン文庫の和漢書 ： 蔵書傾向と書き込み調査」（『富大比較文学』2010 年 12 月）などの論文を発表している。また、今村はこれらを通じて得られた成果として、『狂歌百物語』への書き込みを分析した「小泉八雲のヘルン文庫――『狂歌百物語』への書き込みの考察」（『社会文学』2009 年 2 月）や、書き込み調査に基づく八雲の「常識」の典拠論・生成論である「小泉八雲『常識』研究―ヘルン文庫書き込み調査から―」（『富山大学大学院人文科学研究科論集』第 9 集、2011 年 2 月）、「原典の書き込みから見る小泉八雲「常識」――ヘルン文庫調査から」（『群峰』第 3 号、2017 年 3 月）を発表している。「常識」には典拠について複数の説が唱えられている中で、ヘルン文庫にある「宇治拾遺物語」に、小泉セツによると見られる書き込み、しかも典拠から八雲の作品への変更に直接関わる書き込みが多数あることを整理したものである。

これらの論文は個別の研究成果として堅実なものと言うべきで、また前者の網羅的な書き込み調査も、八雲の日本古典文学受容を検討する上では最も基礎となるべき仕事と言うべきだが、残念ながら、これらに関わる研究動向において、上記の研究が参照され、十分に活かされているとは言いがたいのが現状のようである。

たとえば「常識」論でいうと、今村の研究は 2011 年に発表されているが、その後に刊行された長谷川洋二『八雲の妻』（今井書店、2014 年）や中井孝子「ハーンの妻セツの役割の再検討」（『多元文化』2017 年 2 月）など、今村と同様に「常識」について典拠や妻セツとの関わりから検討している文章では、今村の研究は触れられていない。これは、八雲の研究において、それまでの研究の成果を集約して全体的に把握できる体制が整っていないという問題によるものと思われる。加えて、今村の研究が発表された『富山大学大学院人文科学研究科論集』は、全国の多くの大学の図書館に寄贈され、所蔵されてはいるものの、論文題目がデータベースに拾われておらず、検索において見落とされてしまうという事情もある。

文学研究の現在の状況というのは、踏まえるべき知見や論文が膨大になり、一人の研究者がそれら全てを把握することの困難が増しているのを、電子技術の進展が補っているようなところがある。すなわち、論文データベースの検索で発見可能な論文は参照され、そうでない論文は参照されなくなっていく必然があるわけだが、こうした時代において、リポジトリへの搭載や、少なくとも主要なデータベースのいずれかには論文題目が登録されることが、研究成果の共有のためには重要になってくる。

今村の富山大学での指導教員でもあった金子幸代が立ち上げた「富山文学の会」という研究会で毎年刊行している研究雑誌『群峰』というものがあるが、今年度から富山大学のリポジトリに論文を登録することが可能となった。今村の論文も、「常識」論の成果をまとめ直す形でここに掲載され、稿者も協力してリポジトリでの閲覧やデータベースでの検索が可能な形となったわけである。

最後に、富山大学の学生による近年の研究成果も紹介しておきたい。2016 年度卒業論文をもと

にした三島佳音「ラフカディオ・ハーンにおける日本語の音」(『富大比較文学』、2017 年 3 月)は、八雲が『骨董』『怪談』で日本語の音をローマ字表記によって取り入れた箇所を網羅的にまとめ、セツの出雲方言の影響が見られるものを抽出して、方言研究の成果を参照しつつ考察したものである。2017 年度の卒業論文としては濱野美典「児童文学史における小泉八雲の位置づけについて」があり、こちらもリポジトリなど何らかの形で公開できることを目指しているので、内容はそちらを参照されたい。今後の学生や卒業生による研究成果も、新たな時代に対応した発信の体制を維持していきたい。

Ⅱ　ラフカディオ・ハーン研究の今

【論文】

ラフカディオ・ハーンの再話と日本人の文化的記憶の変容

――「和解」を中心に――

結城　史郎

はじめに

ラフカディオ・ハーンは、日本の文化遺産に拠って立ち、エキゾチックな要素を残しながら、西洋の読者に向けて物語を再話化したとされる。だがその西洋の読者の価値観がいかなるものかについては一定した答えはない。また現代の日本人読者にとっても、ハーンが再話の典拠とした物語はすでに異文化となっている。ハーンの物語と現代の日本人読者との接点を測定することも必要である。テクストの意味は読み手次第で、あるいは文化を異にすることによって違ってくる。一律な読みなどありえない。ハーンの再話の意義を検討すべき時代にある。

そのような問題への糸口として、本稿では『影』(*Shadowings*,1900)という作品に収められている、「和解」("The Reconciliation") という物語を取りあげたい。そこで初めに「和解」という物語をめぐり、原話とハーンの再話の相違について考察することにする。次にハーンの物語をめぐる二つの対照的な読みを取りあげ、日本人の文化的記憶の変容を論じたい。またハーンと同時代のアイルランドの文学との関わりを検討することにする。アイルランドはハーンの文化的背景であるだけでなく、亡霊や転生にまつわる物語にあふれ、日本人の文化的記憶と通じるところが大である。そして最後に再話の手法について、文学一般との関わりへ向けて論を広げ、むすびとしたい。

原話と再話

ハーンの「和解」は夫が妻を離縁した後、妻への恋心を募らせ、再び先妻の家に戻る話である。物語は以下のような具合の流れとなっている。

> 京に貧乏な侍がいた。そんな彼に知人から地方の国守に就くので、彼の下で働いて欲しいとの誘いを受ける。そのため侍は困窮した生活から抜け出す好機と受け止め、妻と離縁し、その人物の下で仕事に就くことにする。同時に侍は裕福な武家の娘を娶り、有利な手づるをつかむ。だがこの後妻は先妻と対照的であった。先妻がやさしく思いやりにあふれていたのに、後妻はきつく利己的な人柄であったのだ。かくして侍は先妻のことを想い、後悔の念に苛まれる。そして京に戻った折に、再び先妻と一緒に暮らそうと決意し、しばらく奉公に励む。ようやくのこと、任期も終わり、侍は子どもがいないこともこれ幸いと、後妻を実家に帰し、京の先妻の家に急ぐ。帰りついてみると家は荒れ果てていた。それでも中に入ってみると、先妻は昔のとおり、いつもの部屋におり、行灯の明かりに照らされ、

縫い物をしていた。先妻は昔のままで、細やかな情愛を示し、夫を温かく迎えてくれた。そして侍は妻に対するかつての過ちをわび、二人の間に和解が成立する。こうして二人は床に入り、時の流れを回顧する。翌日、目を覚ました侍は、隣に先妻の遺骨と黒髪があることに気づき、恐怖にとらわれる。・・・・・侍はゆっくりと身を起こし、絶望しながら、隣家の人に事情を聴く。こうして女が夫であった侍に離縁され、間もなく亡くなり、埋葬する人もなく放置されていたという次第を知る。[1]

この物語を創作するに際してハーンが参照したのは、ヘルン文庫に所蔵されている辻本尚古堂版の『今昔物語』の「亡妻霊値旧夫語」（「亡妻の霊旧夫にあう語（こと・はなし）」）である。この物語も亡霊となった妻が化け、夫と一夜をすごすという話である。侍が出世のために離縁した先妻に恋慕心を抱き、後妻と別れ、再び先妻を訪れる。先妻は侍を温かく迎え、夫婦は一夜をともにするが、目覚めてみると妻は遺骨になっていた。近くに住む人が教えてくれたところでは、侍に離縁された後に女は亡くなり、埋葬もされないままであったという。夫婦の性的な結びつきの部分を除くなら、ハーンの再話もこの流れに即している。

ハーンの再話にはもう一つの種本があったと言われる。それは上田秋成の『雨月物語』所収の「浅茅が宿」である。こちらの夫婦も貧しい暮らしを送っており、夫は妻の懇願するのも聞き入れず、京の都へ織物を売りに出かける。この夫は妻を離縁するどころか、ほどなく戻るとの言葉を残して旅立った。そして品物も売れ、帰郷しようとするが、道中で盗賊に金を奪われ、戦乱の世で通行も制限され、さらに病をわずらい帰郷も遅れてしまう。それでも帰郷してみると、少しばかり老いた妻が温かく迎えてくれる。こうして一夜を共にするものの、目覚めてみると妻の姿はなく、庭に墓が建てられていた。その墓は妻のためのもので、その死を悼む老人が埋葬してくれたという。

『今昔物語』と『雨月物語』のこれらいずれの物語も、亡霊の妻と夫が交わっている。しかもその交合は夫に対する亡霊の妻の恋慕によるものであるとされる。しかし「亡妻霊値旧夫語」では夫により妻が離縁されるのに対し、「浅茅が宿」では夫が意に反して妻と疎遠な状況に陥る。そのため物語の趣は大きく異なるが、亡妻の夫に対する恋慕ということでは変わらない。どちらかと言えば、「浅茅が宿」の方が説得力のある物語である。ハーンの「和解」は「亡妻霊値旧夫語」の筋を踏襲し、「浅茅が宿」の底に流れるペイソスに倣ったものと思われる。

かくしてハーンは『今昔物語』をよりどころとする一方で、男女の力学を覆し、時代に即する物語に修正することになった。夫の妻に対する一方的な離縁は、『今昔物語』の書かれた平安時代には許容されたとしても、ハーンが対象とした西洋の読者のみならず、同時代の日本人読者にとっても、倫理的に大きな問題を抱え込んでいた。復縁にはそれなりの理由づけをし、物語に正当性を与える必要があった。事実、ハーンは先妻に寄せる夫の心の内を綴り、同時に後妻と先妻との相違を際立たせている。このあたりがハーンの力業であると思われる。

さらにハーンの再話においては、侍の離縁が貧困と若気の至りによるものであることを前景化し、彼にその非を悔いさせている。侍は国守の下で働きながらも、京に残してきた先妻の姿を目に浮かべている。そのような郷愁を際立させるのが後妻の性格である。この女のことについては原話には何も描かれていないが、ハーンは利己的な女であるとしている。さらに侍の役職が終わり先妻のもとへ帰る際に、後妻には子どもがいないことを指摘している。こうして侍の先妻に対す恋慕が正当化され、物語は彼女と再会し、先妻が亡霊であったというサプライズ・エンディングへと進行している。読者への配慮によるものか、性的な部分は空白にされている。

二つの読み

ハーンの物語は「和解」と冠せられているが、タイトルの解釈をめぐり二つの読みがある。一つはタイトルどおり夫婦の「和解」とする読みである。もう一つはタイトルには皮肉が込められ、女による「復讐」とする読みである。二つの読みの論拠を順次探っておきたい。

平川祐弘氏は、「男は一切を打明け、前非を悔い、愛情を告白し、償いを申し出て、許しを乞います。これは[……]十九世紀末年当時の倫理観や結婚観と関係することで、それだけの手順を踏まなければ女として自尊心を傷つけられた以上、近代西洋においては和解が成り立ちがたいことを示唆していると申せましょう」[2] と指摘している。要するに、ハーンの物語はタイトルそのままに、夫婦の間の「和解」へと向けられているということである。

平川氏はさらにアメリカの女性読者を念頭に、ハーンの物語は日本の女性の夫に対する忍従の美学を描いており、アメリカ人を読者としつつも、自己主張を叫ぶ今日のフェミニストの価値観とは異なるといった趣旨のことを述べている。そしてハーンは「在来の日本の女の伝統的美点を西洋に伝えたいと思ったに相違ない。それからまたハーンの愛読者だった二十世紀初頭のアメリカ女性たちは、今日の〈解放された〉女性たちと違って、帰宅した夫が前非を悔いれば、許すだけの雅量をなお持ちあわせていたでしょう」[3] と論じている。ハーンは先妻の心の内を語ることはせず、その温かな仕草に忍従の美学を示唆したということになる。

もう一つの「和解」の支持者は門田守氏で、平川説を丁寧に捕捉してこう述べている。「亡妻霊値旧夫語」と「浅茅が宿」という、これら「二つの日本の原話の意図するところは女による男への復讐の実現であったと解釈しても構わないように思われる」が、「復讐実現の物語としてのこれらの版に対する解釈は、あくまで現代の視点から見た上でのプロット展開を梃子にした読み方の一例にすぎない」。「女の亡霊が出てきた理由は彼女の男への断ち切りがたい恋慕心である」。そして二つの版のエンディングをめぐり、門田氏は「女が幽霊になって表れた理由は男への思いが募り、どうあっても性関係をむすびたかったからである」[4] と指摘している。

そうした原話と対照的に、ハーンの「和解」は男の心の内にある呵責の念を描くと同時に、後妻のきつい性格と先妻の優しさを対比させ、エンディングを和解へ向けている。そうであれば先妻は恋慕

の気持ちから、夫の前に登場したということになる。にもかかわらず、読者という問題をめぐり、門田氏はこうも指摘している。

> 人は生まれ育った文化や環境によって人生観や世界観に当然影響を受ける。だから文学作品の解釈にしても、時代、文化、地域、環境、そして個人によって、ある一定の変化があるのはごく自然なことである。ハーンは『今昔物語集』の一つの話を「和解」としてドレスアップして異文化発信したが、ある西洋人は日本女性の優しさに感銘を受けるだろうし、別の西欧人はこの侍の妻を封建制に圧迫された可哀そうな犠牲者、死んだ後にささやかな復讐を果たした悲劇のヒロインと見るかもしれない。現代の日本人にしても、このような無私の優しさに満ちた女の存在を否定し、「和解」をありえない話、まるでお伽噺のようなものとして受け取るかもしれない。和解か復讐かは読者反応の仕方によって変わるものだし、無闇にどちらかの読みを押しつけるのは多文化時代の現在、間違ったやり方だと思う。[5]

実のところ、「和解」を復讐の物語と捉える読みもある。その一つは小林正樹監督の映画「黒髪」である[6]。物語はハーンの再話を基にしているが、男の利己的な部分が際立っている。家を出る前に、女が男をとどめようとするが、男は女を無碍に捨ててしまう。その一方、再婚した相手は性格がきついため、男は先妻に想いをはせる。映像では後妻が男を蔑視しているような感じを受ける。そうした事情から男は後妻と離縁し、先妻の家へ戻り和解する。が、翌朝、女の白骨ともつれた黒髪を目にする。そのため男はあわてふためき、必死になって逃げる。すると背後から黒髪がかすかにうごめき、男の狼狽する様子に復讐が果たされたことがわかるという設定だ。

もう一つの「復讐」説も取りあげたい。三成清香氏は平川氏が批判する現代のフェミニスト的な読みを試み、ハーンの手法が単純ではないとしている。そして先妻の立場から以下のように述べている。

> 復讐説を否定し和解が成立してしまうと[……] 女性はだまされても、裏切られても、思いを貫く、健気で一途、純粋で無垢な存在にならざるを得なくなってしまう。[……] ハーンは長々とした描写で〈夫〉を善良化し、彼が誠実であればあるほど〈先妻〉は復讐する正当な理由を失ってゆく。それにより彼女は文脈的に理論づけされ、最終的に復讐することができないよう固められてしまったと言えるのである。[……] 〈先妻〉は〈夫〉に単なる一瞬の恐怖だけでなく、心底に悶々と残る残酷な虚無感、孤独、罪悪感を与えた。それは前夜が楽しければ楽しいほど、強烈に埋め込まれるのである。そして、もぬけの殻となった〈先妻〉はどうなったか。この世に何の未練もなく、ようやく爽快な気持ちで浄土へと旅立つことができた。[7]

いずれの読みも興味深く、結末を読者の想像力にゆだねようとする、ハーンの手法と接続していると思われる。が、侍が妻の死骸を前に驚愕した後、空白の時間の流れを示唆する［……］が挿入され、以下の一文がある。侍は先妻との一夜が悪夢であったことに思い至りつつも、その事実を否定しようとしていると読める。英文と平川氏の日本語訳を併記しておきたい。

> Slowly, as he stood shuddering and sickening in the sun, the icy horror yielded to despair so intolerable, a pain so atrocious, that he clutched at the mocking shadow of a doubt.
>
> 男はぞっとして、身震いしながら、白日の下、起き上がった。だが氷のように冷たい恐怖は次第になんとも耐えがたい絶望、残酷な苦痛して変わっていった。男はそれでもなお一縷の迷いにしがみついた。己を嘲笑う疑惑の影であった。[8]

下線を付した英文は二つの文に訳されている。男は昨夜の夢を疑惑としながらも、それでもその疑惑にしがみついている。したがって先妻との間には「和解」が成立しているということらしい。

門田氏も平川氏に同意してこう説明している。

> 平川氏は “a doubt” を侍が抱いた、わが妻が死んだというのは嘘だろうという〈疑惑〉として読まれている。しかしながら、目の前に妻の死骸がある以上、その疑惑はすぐに打ち消されてしまう、はかないものにすぎない。だからこそ、その疑惑は〈疑惑の影〉“a shadow” と呼ばれるのが相応しい。それでも、妻の死を否定しがたい彼はそうした疑惑に “clutch at” つまり〈縋りつく〉のである。ところが、妻の復讐物語として「和解」を解釈する人は “a doubt” を女が自分を騙して、残酷な幻滅と絶望を味あわせるつもりだったかという、男の〈疑念〉として読むと、平川氏は言われる。そしてこの場合、“clutch at”〈縋りつく〉はその動詞に込められた感情や心理的態度から考えて、女の復讐説とは相容れないことになる。[9]

以上の見解に対して、多少の修正によって、女による復讐という読みの可能性を指摘しておく。まず英文の読みに留意したい。「男はそれでもなお一縷の迷いの影にすがりついた」は、「男はそれで一縷の迷いの影にすがりついた」の意である。男は「氷のように冷たい恐怖」や「残酷な苦痛」に圧倒されたため、「まさかそんなことはないだろうというかすかな疑惑の影」に縋りついたはずだ。平川氏は「男はそれでもなお一縷の迷いにすがりついた」と訳されているが、英文は “so~ that…” の

構文であり、何よりも前半の男の驚愕に重きが置かれていると思われる。

おそらく絶望した男は「藁をもつかむ」心境で、眼前の事実を否定しようとしたはずである。さらにこの男は絶望に打ちひしがれ、隣人に昨夜の出来事を打ち払うかのような答えを期待している。男は女の怨念に苛まれ、「和解」といった心境にはない。「和解」というタイトルは皮肉と読めよう。梅本順子氏もその点をめぐり、「男に一夜なりと気をもたせた分だけ、男の無慈悲に対する女の執念の深さを表すもの」と指摘している。さらに梅本氏は先妻の家に帰ろうとする一方的な男の宣言についても、「読者の反発を買うように仕立てられている。女だっていつも男のご都合主義に振り回されているばかりでないことを、ハーンは前もって読者に期待させる効果を狙っているとの解釈もできる」[10] と述べている。

こうした二つの読みは「和解」に限られたことではない。日本人の文化的記憶も変容している。文化的記憶とは個人や国家のアイデンティティ構築に関わる「記憶」の意で、ハーンとの関わりで言えば、テクストの読みは読者の文化的背景によって、さらには男女の読者の間でも異なることになる。たとえば、門田氏は『怪談』(*Kwaidan*, 1904) 所収の「お貞のはなし」を、女の「優しさの権化」[11] の物語としている。それと対照的に、遠田勝氏は異なる指摘をしている。これは、「両親」と「妻」そして「ただ一人の子」の受難の物語[12] であるという。したがって、お貞は並外れた魔女ということで、杏生とめぐりあうため、これらの人々を殺す女ということになる。遠田氏の読みはお貞に母性の化身を認める門田氏の読みとまったく異なるだろう。

そうした事情に鑑み、再び門田氏の指摘を借りるなら、現代の日本においては「優しい女の実在性を疑う人もいるかもしれない。日本人の西洋化も作品読解に影響を与えている」[13] に違いない。文化的記憶もつねに変容を遂げているのである。また太田雄三氏も『ラフカディオ・ハーン――虚像と実像』においてこう指摘している。「日本人の多数がハーンの日本についての著作の愛読者になるためには、日本のいっそうの近代化、産業化、都市化などが進み、ハーンの描いたような日本が、半ば消え去った世界として日本人自身にエキゾチックな感じを与えたり、ノスタルジアを感じさせるたりするようになるまで待たなければならなかったのではないだろうか」[14] 。

時代が下るとアメリカにも女性の怨念の物語が誕生する。ウィリアム・フォークナーが 1930 年に発表した短篇、「エミリーへの薔薇」である。女が離れてゆく男を殺し、その傍らで 30 年にわたり添い寝した物語だ。白骨化した男の傍らには、女の髪の毛が認められる。こうした文脈を念頭に入れるなら、「西洋」の価値観も多様で、固定した女性観も変容していることがわかる。

ハーンとアイルランド文学

日本文学と同じくアイルランド文学にも亡霊が多い。J. M. シングの劇『海に騎り行く者たち』(1903) はアラン島での日常を描きながらも、ギリシア劇のような運命に忍従する物語である。すでにキリスト教が広まっているが、島民の心の内にはいまだ古来の文化の伝統が残っている。ここは海が荒れ、

岩石でできた不毛な島である。主人公のモーリァはすでに 5 人の息子を海に奪われ、残った 6 人目の息子まで溺死する。その息子が亡くなる寸前、息子 2 人の亡霊を目にしている。アイルランド人の精神の地層には、異界との交流が可能となっている。時は日本の盆に相当するハロウィーンの季節である。

ハーンはアイルランド文学のうちでもとりわけ W. B. イェイツに関心を向けていた。イェイツは『アシーンの放浪』(1889) や『ケルトの薄明』(1893) を刊行していたが、若き詩人であり、名声はそれほど確立していなかった。ハーンはアイルランドの動向に目を向けていたらしく、偶然のことながら、イェイツに着目したに違いない。『東の国から』所収の「夏の日の夢」において、日本の「浦島物語」の結末に疑義を呈しているが、イェイツの『アシーンの放浪』が念頭にあったと思われる。二つの物語は大枠において変わりがない。それでも結末には微妙な相違が認められる。アシーンの物語はケルト伝説に収められており、ハーンがイェイツを念頭に入れていなかった可能性もあるが、ハーンのその前後の発言から、イェイツの作品を示唆していると思われる。

事実、ハーンは東京帝国大学の講義において、イェイツのある詩を取りあげた折、こんな説明を行っている。イェイツがハーンより 15 歳も若いことを考えるなら、同胞への大らかな姿勢が認められるし、同時に詩人としてのイェイツの開花を予想していたらしい。

> Let me now quote to you a very beautiful poem, of the symbolic class written by a poet of whom you may not yet have heard—for he is still a very young man, and has only begun to make his reputation. His name is William Butler Yeats; and he has printed only two small volumes of poems, mostly mystical; but these are of such rare excellence, that in France, where literary merit is much more quickly recognized than in England, one of his books has been crowned by the Academy. He is an Irishman; and a great many of his poems have been inspired by ancient Celtic literature.[15]

ハーンが題材とする「ある詩」とは "Aedh tells of the Rose in his Heart" で、1892 年にイギリスの『ナショナル・オブザーヴァー』紙に掲載されたものである。アイルランドもしくは永遠の恋人モード・ゴンを賛美する詩である。ハーンはジャーナリストでもあったことから、文学の動向にも機敏に反応していたのだろう。

イェイツに寄せるハーンの関心の高さは、もう一つの詩を教材に取りあげたことにも明らかだ[16]。これは 1893 年に文芸誌『ザ・ブックマン』に掲載された、"The Stolen Bride" である。ハーンは現代で並びない最高の妖精文学であると絶賛している。そのような期待のためか、この詩が "The Host of the Air" とタイトルを変え、一連を削除して詩集『葦間の風』(*The Wind among the Reeds* , 1899)

に再録された折、ハーンは憤りを覚えた。こうしてハーンはイェイツに旧に復して欲しい旨の手紙を書く。1901 年のことである。ハーンがアイルランドやケルトの文化と密であったことを示唆する逸話でもある[17]。

ハーンは東京帝国大学の講義で、ウィリアム・アリンガムやサミュエル・ファーガソンの詩なども取りあげている。またフランスのボードレールやゴーチエといった詩人に親しむことになったのも、アイルランド系アメリカ人のエドガー・アラン・ポーの作品に接したからだ。それぞれ吸血鬼の物語を書いている。ポーの「ベレニス」(1835)、ボードレールの『悪の華』(1857) の「吸血鬼」、ゴーチエの「死霊の恋」(1836) にも明らかだ[18]。ハーンがアイルランドの幻想物語に惹かれていたことは間違いない。アイルランドとの関連では、ポール・マレーがハーンについてこう述べている。

> Had he stayed in Ireland, he would, in all likelihood, have earnestly immersed himself in the culture and folklore of the Irish peasant, like Yeats, Lady Gregory, Synge and other figure of the Irish literary revival. As it was, he found himself in Cincinnati and it was the levee, with its Southern negro hue, which claimed his attention. The levee was, in Hearn's view, primitive and savagely simple, with an emotional range little beyond the animal. Here we see the superior Northern observer, recording 'the peculiarities of this grotesquely-picturesque roustabout life' and finding it all 'pitiful.'[19]

アイルランド文芸復興運動は 1890 年から 1920 年の間、アイルランド人のアイデンティティの確立を目的に開花した。当時のアイルランドはイギリスの支配下にあり、文学によって国民の文化的記憶の統一を図るものであった。そして運動の指標となったのが農民であり、彼らにアイルランド人のアイデンティティを投影した。その一方、アイルランド文芸復興運動の作家のほとんどがイギリス系アイルランド人であった。彼らの祖先は土着のケルト人を征圧することでアイルランドに定着したが、支配者としての地位に翳りがでてきていた。そのためアイルランド人のアイデンティティという彼らの模索は、国民的な相貌をかこちながらも、自らの立場を再定義するためのものでもあったのだ。こうした文脈から顧みるならば、彼らの幻想物語は内部に抱え込んだ不安の投影であっただろう。ハーンもイギリス系アイルランドであったことを想起しておきたい。

ハーンの遠縁のブラム・ストーカーによって、『ドラキュラ』(*Dracula*, 1897) が刊行されたのも同時代である。これはレ・ファニュの『カーミラ』(*Carmilla*, 1871-1872) と同じく、女の吸血鬼化を扱った作品だ。吸血鬼というのは怪奇な存在で、ハーンの亡霊とも一脈通じるところがある。いずれの作品も舞台を東欧に設定し、異国情緒をたたえ、異教とキリスト教の対立がその主要なモチーフになっている。その意味で、『ドラキュラ』は文化研究の対象となっている。その一つが逆帝国主義

の視点で、世界に冠たる大英帝国が辺境のトランシルヴァニアからの侵入者によって恐怖に陥ることの意として読まれる[20]。

ストーカーはイギリス系アイルランド人であり、ドラキュラはアイルランド人の表象と読まれることもできる。イギリスへの貧しいアイルランド人移民も多く、彼らはロンドンのスラム街を拠点とする不穏分子になっていた。アイルランド側からすればドラキュラは自国を搾取する大英帝国に相当するが、物語としては被支配者による支配者への報復であることに間違いない。そもそもアイルランドはイギリス側からは女性として見做されていたのである。アイルランドは「黒髪のロザリーン」や「ヒベルニア」と呼ばれ、イギリスの支配下にある国とされてきた。その意味で、ドラキュラはイギリスやイギリス系アイルランド人が内部に抱えた不安の化身でもあったのだ。

このように『ドラキュラ』が男女の力学の隠喩として読まれるとき、ドラキュラの毒牙にかけられた女性を想起しておきたい。その名前はルーシー・ウェステンラ（Lucy Westenra）であり、「悪魔ルシファー」と「西洋の女性」の意である。西洋の女性が悪魔に変貌することを示唆している。そうであるなら、時代の変貌も関わってくる。イギリスでは理想の女性は「家庭の天使」と呼ばれ、夫や子どもを慈しむ存在とされてきた。そうしたベクトルを崩したのがフェミニズムの登場で、父権制に反逆する存在となっていた。このあたりの事情をめぐっては、アイルランド出身の作家であるオスカー・ワイルドが「宿命の女」である『サロメ』（*Salomé*, 1893）を書いている。その淵源はロマン派詩人ジョン・キーツの「つれなき乙女」（1819）に由来し、日本でも 1900 年に泉鏡花が『高野聖』で模倣している。

こうした事情はハーンの描く女性とも無縁ではない。「和解」について、忍従する女性と復讐する女性という、二つの読みを述べた。西洋の事情に即するならば、前者が望まれる姿であり、後者は恐怖の対象である。同じことは 1900 年前後の日本の文化においても言えるはずである。近代化の道を歩み始めた日本においても、すでにその文化的記憶は変わりつつあっただろう。ハーンもその事実を知っていたはずだ。そして男に復讐するような強い女性に蠱惑されていたとも思われる。

むすび

先行する物語の改作が「再話」であるとするならば、文学はおしなべて再話であるだろう。シェイクスピアの劇はすべて原話を基に書かれたものであるし、そのシェイクスピアの作品もさらに改作されている。そうした背景にあるのは、時代の価値観の相違である。没後 400 年が経過した今日、シェイクスピアの作品は異文化となっている。たとえば、『ヴェニスの商人』という劇は、ユダヤ人のシャイロックとヴェニスの商人アントーニオの対立を描いた喜劇として読まれてきた。だがユダヤ人の虐殺というナチスの行状を知る読者は、あるいはこの劇の観客も、この物語に違和感を覚えるはずである。

もう一つの例としてイギリスの女流小説家アンジェラ・カーターを挙げておきたい。彼女の『血染

めの部屋』(1979) は民話の再話集であり、表題の物語はシャルル・ペローの「青髭」の再話である。青髭は新妻を娶り、一つの部屋を開けぬとの条件を付け家を留守にするが、好奇心にかられた新妻がその部屋を覗いてしまい、約束を破ったとして殺されそうになる話である。その部屋には先妻たちの死体がしまわれていたが、運よく新妻は殺される寸前に兄弟の手で救出される。それでもペローは「女性の好奇心はいけない」との教訓を付している。カーターはこの物語を支えている父権制に不満を抱き、母親による救出の物語に改作したのだ。倉橋由美子の『大人のための残酷童話』(1984) はその流れに即している。

こうした手法は「再話」以外に、パリンプセスト、アダプテイション、リライティングなどと呼ばれている。ハーンの愛読していたピエール・ロティの小説『お菊さん』(1887) は、ジョン・ルーサー・ロングの小説『蝶々夫人』(1898) へ、またデイヴィッド・ベラスコの劇『蝶々夫人』(1900) を経て、ジャコモ・プッチーニのオペラ『蝶々夫人』(1904) へと変貌した。きわめて短い期間の間にこれほど多くの改作が行われ、その後も改作は続いている。こうした系譜をたどってみるなら、ジャポニズムへの関心が挙げられる[21]。

プッチーニの『蝶々夫人』は、アメリカ人の夫ピンカートンによって、標本にされる蝶でもあるかのように、捨てられ死を選ぶ日本人妻・蝶々夫人の悲劇である。この物語における西洋と東洋という対立図式は、支配と被支配に他ならない。そして夫への愛のために自刃して果てる蝶々夫人は、西洋によって想像された日本女性のステレオタイプであるだろう。その一方、蝶々夫人は西洋が欲する女性の化身でもある。彼女は日本的なものでありながら、同時に西洋的なものを併せ持っている女性である。「和解」の亡霊に日本人女性の忍従を読み込もうとしたとするなら、ハーンも同じ矛盾を抱え込んでいると思われる。

＊本稿は 2017 年 12 月 24 日に富山大学で開催された、ハーン国際大会での口頭発表に加筆したものである。

注

---

[1] 要約は Lafcadio Hearn, *The Writings of Lafcadio Hearn*, ed. Elizabeth Bisland, vol. 10 (Boston: Houghton, 1922) 3-8.

[2] 平川祐弘、『小泉八雲カミガミの世界』（東京：文芸春秋、1988 年）147。

[3] 平川 157。

[4] 門田守、「『和解』における再話の方法――ラフカディオ・ハーンが望んだ夫婦愛の姿――」、『奈良教育大学紀要』vol. 54-1（2005 年）：205。

[5] 門田 210。

[6] 「黒髪」、『怪談』、小林正樹監督、東宝、1965。

[7] 三成清香、「海を渡った物語――ラフカディオ・ハーンと再話、そして女性――」、博士論文、宇都宮大学、2016 年、188-93。

[8] 平川 141。
[9] 門田 208。
[10] 梅本順子、『浦島コンプレックス』（東京：南雲堂、2000 年）182-83。
[11] 門田 210。
[12] 遠田勝、『〈転生〉する物語――小泉八雲「怪談」の世界』（東京：新曜社、2011 年）232。
[13] 門田 210。
[14] 太田雄三、『ラフカディ・ハーン――虚像と実像――』（東京：岩波新書、1994 年）188。
[15] Lafcadio Hearn, *On Poetry*, ed., Tanabe, R., T. Ochiai, and I. Nishizaki (Tokyo: Hokuseido, 1941) 145.
[16] Lafcadio Hearn, *On Poetry* 254-55.
[17] manuscript （ハーンの手紙）。
[18] 福澤清、「ラフカディオ・ハーンとブラム・ストーカー」、平川祐弘・牧野陽子編『ハーンの文学世界』（東京：新曜社、2009 年）264。
[19] Paul Murray, *A Fantastic Journey: The Life and Literature of Lafcadio Hearn* (Kent: Japan Library, 1993) 36.
[20] Stephen D. Arata, "The Occidental Tourist: 'Dracula' and the Anxiety of Reverse Colonization," *Victorian Studies* 33-4 (1990): 621-45.
[21] 小川さくえ、『オリエンタリズムとジェンダー ――「蝶々夫人の系譜」』（東京：法政大学出版局、2007 年）136。

【概要】

ハーンはアメリカでどう読まれたか
――『日本――一つの解明』を中心に

水野　真理子

１．はじめに

本発表は、ハーンの日本関連書籍をアメリカの読者がどう評価し、そこからどのような日本観を得たのかに焦点を当てたものである[1]。日本観についての先行研究に関しては、ハーンを含め、作家、著名人が執筆した日本論の内容に焦点を置く研究が主流であった。しかし、人々の日本観を知るには、それらの作品がどう読まれたかという受容の側面も考慮する必要がある。そこで、ジョージ・グールド『ラフカディオ・ハーンについて』（*Concerning Lafcadio Hearn*）（1908）[2]の巻末に整理されている、同時代の雑誌に掲載されたハーン評・作品評の書誌情報を利用し、以下の点について考察を試みた。第一に、ハーン評・作品評を掲載雑誌ごとに整理し、概略的な傾向や特徴をつかむ。第二に、ハーンの日本関連著作の集大成である『日本――一つの解明』（*Japan: An Attempt at Interpretation*）（1904）[3]（以下、『日本』と記す）に絞り、入手可能な書評の内容を分析して、作品の評価やそこに表れる日本観の特徴をつかむ。そして第三に、それら書評記事の内容、執筆者、また掲載雑誌の特徴を調査し、読者層の傾向を推測する、の３点である。

２．書評に表れるハーン評

グールド『ラフカディオ・ハーンについて』の「9 章ハーンに関する記事と批評」の書誌情報を整理すると、表１のようにまとめられる。書評のほとんどが、ハーンの日本関連書籍を扱ったものであることから、ハーンと言えば日本研究の作家とのイメージが流布していたのではと考えられる。

さらにハーンの評価については、日本の精神についての素晴らしい理解者であること、彼の優れた文学的特徴が日本の事物について描写するのに効果的であること、また日本に帰化したという境遇だからこそなし得た日本理解である、などの評価がなされている。さらに注目したいのは、ハーンを他の日本研究家や日本研究の書物と比べる視点である。例えば、ハーンにも影響を与えたパーシヴァル・ローウェル、またアルフレッド・ステッド編『日本人による日本』（*Japan by the Japanese: A survey by Its Authorities*）（1904）[4]と比較されている。その上で、ハーンはどの日本研究家よりも優れた理解者だとの高い評価がなされている。

３．書評に表れる日本観――『日本』を中心に

『日本』の書評を分析する前に、この作品におけるハーンの意図、主眼を確認する必要がある。第１章で述べているように、ハーンは日本の不思議さ、美しさの魅力の根源を宗教に探り、日本国民の特質を、民族の信仰の歴史のなかに、そして宗教を本源とし、そこから発展した日本の社会制度のなかに見出すことを、この著作で試みようとした。さらにその際には、ハーンが多大な影響を受けていた、哲学者ハーバート・スペンサーの理論を援用して、日本の不思議さに、科学的、合理的な説明を施すことを試みた。スペンサーは大著『総合哲学体系』（*System of Synthetic Philosophy*）（1862-1892）の、『社会学原理』第３巻（*The Principle of Sociology*）で、最古の祖先崇拝は霊（ゴースト）への祭礼に始まり、神道の祖先崇拝は埋葬の儀式から発達すると述べていた[5]。ハーンの見解では、日本の祖先崇拝の発達過程は、スペンサーの社会進化論における宗教発達の法則を証明するものと考えられた。

それではハーンの意図を確認したところで、次に『日本』についての書評に目を転じよう。書評には以下の６種類があった。①無署名、『インディペンデント』（1904 年 10 月 27 日）②無署名か、『パブリック・オピニオン』（1904 年 10 月 27 日）（今回、未入手）　③ウィリアム・グリフィス、『ダイアル』（1904 年 12 月 1 日）　④無署名、『ネイション』（1904 年 12 月 8 日）　⑤エドモンド・バックリー、『アメリカン・ジャーナル・オブ・ソシオロジー』（1905 年１月）　⑥ウィリアム・グリフィス、『クリティック』（1905 年２月）である。ここにはたとえば、ウィリアム・グリフィス『皇国』（*Mikado’s Empire*）（1876）と比較し、ハーンは神道の祖先崇拝、政治・道徳への影響力について「より完全で、親密な記述」を成しえたとの指摘（⑤）や、心情的な側面を強調する前作までの特徴と異なり、『日本』は科学的な手法で描写されている、そして日本の社会制度はまさに祖先崇拝のうえに成り立っているとの指摘（③）がある。したがって、評者たちはハーンの意図をおおむねよく理解し、『日本』を読解したようである。

しかし、科学的な説明をハーンが施し、それが理解された一方、依然としてハーン評や書評には、合理的な説明のつかない不可解な国、神秘的な国日本のイメージが貫かれている。例えば、日本人は、外面は、条約、外交、政府、法典、帝国議会、軍隊、艦隊など、すべて近代的で客観的なものに覆われているが、内面は、ゴーストによって支配されているとの指摘（⑥）がある。またハーンの遺作となった『天の河縁起』（1905）の書評でも、「日本は天の河のもとに横たわるファンシーを咲かせた豊かな土地」「日本の土地は酸素に乏しくゴブリンたちがひしめき合っている」「竹と桜の国の農夫や詩人たちの奇妙な想像力を理解することにおいて、ハーンを超えられる作家はいなかった」（『インディペンデント』1905 年 12 月 21 日）など、神秘的で不可思議、おとぎ話のような異国情緒に溢れた日本イメージが、受け継がれている。

なぜこのような評価や印象が貫かれたのか。そこには、『日本』の冒頭で記された、日本に

関する奇妙さ、不可思議さ、神秘さを表現する記述が印象深いこと、また西洋的価値観では日本の精神がやはり理解しがたいものであったことが、一因としてあるだろう。

４．ハーンの読者層

以上述べてきたような日本イメージ、すなわちスペンサーの理論に当てはまる神道の国、祖先崇拝の国、しかし依然として理解しがたい不可思議な国日本、というものが書評から推測された。それではこの日本観はどのような読者に引き継がれたのだろうか。

読者の傾向を見るために、まず雑誌の特徴を明らかにしよう。書評が掲載された雑誌は、『ネイション』『クリティック』など、政治、文学に特化したオピニオン雑誌である。また、読者でもある評者の傾向はどうであろうか。それは政治的な関心の高い評者たちである。ハーンが、『日本』において、近代化を成し遂げ、西洋列強の仲間入りを目指す日本の将来と西洋諸国との関係について関心を向けていたように、評者も日本の国のありかた、政治、西洋諸国らをめぐる国際関係に強い関心を抱いており、日本の政治的行動の根幹にある神秘性や精神的側面をハーンの著作から正確に知りたいと思っていたようだ。そこには、日本が日清戦争で勝利し、国際舞台に躍り出てきたという社会的背景が影響しているだろう。また、『クリティック』の女性編集者レオナルド・ギルダーや、ハーンの生涯の友人エリザベス・ビスランドが象徴しているように、ジャーナリズムに登場した知識人女性編者、読者の存在も否定できない。

これらの読者層との違いを対照的に示すのが、ハーンの作品と同時代に流行していたジャポニズム小説の読者層である。ジャポニズム小説は、ジョン・ルーサー・ロング「蝶々夫人」(“Madam Butterfly”)(1898)などに代表される、1880 年代から 1920 年代頃にアメリカで流行した小説群である。日本人の生活習慣、日本の史実が織り交ぜられるが、そこには間違いも多く、描かれる日本人娘も外見は日本人の姿であるが、行動様式はアメリカ人女性によく見られる特徴を帯び、日本人女性の描写としては不自然さが見られる。しかし、ジャポニズム小説の読者たちにとっては、ハーンの作品に求めたような正確さは問題ではなく、感情移入できるかどうか、また疑似ジャパン体験ができるかどうかが重要であった[6]。ジャポニズム小説の掲載誌は、女性を主な読者とした『レイディース・ホーム・ジャーナル』などの家庭雑誌だったが、それらも、ハーンの書評が掲載された雑誌との相違を示していよう。

５．おわりに

以上述べてきたように、アメリカにおける、同時代の読者たちによるハーンの評価は、優れた真の日本理解者というものであり、ハーンを通して得られたと考えられる日本観とは、科学的に説明できる祖先崇拝の国、神道の国でもあり、また依然として説明の難しい不可思議な国

日本であった。そしてこうした日本観が、政治的関心の高いリーダー的、エリート的な読者層に受け継がれた。ハーンを通した日本観が、その後どう継承され、あるいは変容していくのかは、今後明らかにしていくべき課題である。たとえば『武士の娘』（1925）がアメリカでベストセラーとなったエツ・スギモトの初期のエッセイには、日本の類まれな清潔さや妖精のような日本人など、ハーンの日本に対する印象と似通った記述が見受けられる[7]。またアメリカ陸軍情報将校のボナー・フェラーズは、ハーンの愛読者でもあり、彼が書いた報告書「日本兵の心理」（1936）には、巻末の参考文献に『日本』を含むハーンの著作が載せられ、フェラーズの日本論がハーンの著作の多くに依拠していることがわかる[8]。このように、日本関連の書籍を著した著述家たちに、ハーンは様々な影響を与えたようである。したがって、この日本観というテーマをより敷衍させ、19 世紀から 20 世紀初頭に形成されたその日本イメージを、体系的に分析していくとすれば、その中でハーンは、日本観の一つの型を提示し、後世に影響を与えた作家として、特に重要な位置を占めるであろう。

（表１）

ハーンに関する記事と批評

掲載誌	種類	出版地	日本関連書籍の書評・ハーン評数および内訳(1894-1908)	
1. *The Academy*	雑誌	イギリス	6	『仏』『日本』『天の河』、ハーン評、『手紙』、作品リスト
2.*The American Journal of Sociology*	雑誌	アメリカ	1	『日本』
3. *The American Monthly Review of Reviews*	雑誌	アメリカ	1	ハーン評
4. *The Athenaeum*	雑誌	イギリス	10(1)	『面影』『東』『心』『異国』『影』『雑記』『骨董』『怪談』『天の河』『書簡』（『ユーマ』1890）
5. *The Atlantic Monthly*	雑誌	アメリカ	7	『面影』『東』『霊』ハーン評(3)、『怪談』
6. *The Author*	雑誌	アメリカ	(1)	（ハーン評、1890）
7. *The Bookbuyer,*	雑誌	アメリカ	4	ハーン評(2)『心』『骨董』
8. *The Bookman*	雑誌	アメリカ	3	『影』『怪談』ハーン評
9. *The Chautauquan,*	雑誌		1	『怪談』からの抜粋
10. *The Chicago Evening Post*	新聞	アメリカ	1	ハーン評
11. *The Critic*	雑誌	アメリカ	6	『仏』『影』『日本』ハーン評(3)
12. *Current Literature*	雑誌	アメリカ	4	『心』ハーン評(3)
13. *The Dayton, Ohio, Journal*	雑誌	アメリカ	2	ハーン評(2)

14. *The Dial*	雑誌　アメリカ	5	『異国』『影』『日本』『天の河』ハーン評
15. *The Evening Sun, NY*	新聞　アメリカ	1	ハーン評
16. *The Evening Post, NY*	新聞　アメリカ	1	『手紙』
17.*The Evening Transcript, Boston*	新聞　アメリカ	(1)	(『チタ』1889)
18. *The Fortnightly Review*	雑誌　イギリス	1	ハーン評
19. *The Harper's Monthly*	雑誌　アメリカ	(1)	(ハーン評 1887)
20. *The Independent*	新聞　アメリカ	3	『仏』『日本』『天の河』
21. *The International Studio*	雑誌　アメリカ	1	作品評(Stories and Sketches)
22. *The Literary World*	雑誌　アメリカ	5	『面影』『東』『心』『仏』『雑記』
23. *The Living Age*	雑誌　アメリカ	1	ハーン評
24. *The Messenger*	雑誌　アメリカ	1	ハーン評
25. *The Nation*	雑誌　アメリカ	10(3)	『心』『仏』『影』『雑記』『骨董』『日本』, *Stories and Sketches,* 『天の河』『手紙』ハーン評 (『ゴンボ・ゼーブ』1885、『中国霊異談』1890,『ユーマ』1891)
26. *The Nineteenth Century and After*	雑誌　アメリカ/イギリス	1	ハーン評
27. *The North American Review*	雑誌　アメリカ	1	『手紙』
28. *The Outlook*	雑誌　アメリカ	2	『仏』『天の河』
29. *Poet-Lore*	雑誌　アメリカ	1	ハーン評
30. *Public Opinion*	雑誌　アメリカ	3	『仏』『影』『日本』
31. *Putnam's Monthly*	雑誌　アメリカ	1	ハーン評
32. *The Spectator*	雑誌　イギリス	5	『面影』『東』『心』『仏』『日本』
33. *The Times-Democrat, New Orleans*	新聞　アメリカ	4	ハーン評・作品評(3)
34. *The Times, New York*	新聞　アメリカ	1	『手紙』
35. *The New York Tribune*	新聞　アメリカ	2	『手紙』ハーン評

※略記～『知られぬ日本の面影』(1894):『面影』、『東の国から』(1895):『東』、『仏の畑の落穂』(1897):『仏』、『霊の日本』(1899):『霊』、『異国情趣と回顧』:『異国』(1898)、『日本雑記』(1900):『雑記』、『日本――一つの解明』(1904):『日本』、『天の河縁起そのほか』(1905):『天の河』、エリザベス・ビスランド『ラフカディオ・ハーンの生涯と手紙』(1906):『手紙』

1本発表は、マイグレーション研究会の共同研究「『移民・越境者』たちの日本観」における研究成果、水野真理子「ラフカディオ・ハーンはアメリカでどう読まれたか―『日本――一つの解明』を中心に」河原典史・木下昭編著『移民が紡ぐ日本―交錯する文化のはざまで』（文理閣、2018 年 3 月刊行予定）に基づき、内容を加筆修正したものである。

2 Gorge M. Gould, *Concerning Lafcadio Hearn*, (Philadelphia: George W. Jacobs and Company, 1908).

3 Lafcadio Hearn, Japan: An Attempt at Interpretation, rev. ed.(1904; repr., New York: Macmillan, 1924)；ラフカディオ・ハーン、柏倉俊三訳注『神国日本―解明への一試論』（平凡社、1976）。

4 Alfred Stead ed. *Japan by the Japanese: A Survey by Its Authorities*. 2 vols. rev.ed. (London: William Heinemann, 1904; Washington D.C.: University Publications of America. 1979).

5 『哲学事典』（平凡社、1971）；『ブリタニカ国際大百科事典』（ブリタニカ・ジャパン 2013）。

6 羽田美也子『ジャポニズム小説の世界』（彩流社、2005）、49-62。

7 Etsu Sugimoto, "In the Land of the Mikado," *The Brooklyn Daily Eagle*, June 1, 1902.

8 Bonner F. Fellers, "Psychology of the Japanese Soldier" (individual research papers, Command and General Staff School, 1935), http://cgsc.contentdm.oclc.org/cdm/ref/collection/p4013coll12/id/802,27-46.

【論文】

Some More Lafcadio Hearn Materials at the University of Virginia

WILLIAMSON, Rodger Steele

Here in Japan, Lafcadio Hearn (1850-1904), or Koizumi Yakumo, is synonymous with ghost stories or nostalgic and exotic tales of folklore from the Japanese cultural heritage. The fact the Japanese media often spotlights his works in regular publications is clear proof of this. However, if we mention him in the two major American cities of Cincinnati or New Orleans that he called home for a total of almost twenty years, he is still relatively unknown to most of the general public. As most Hearn scholars are aware, for the mere fact he had become a naturalized Japanese to ensure the safety and stability of his family he lost his standing with the American public after the Second World War. Thanks to the dedication of Hearn's great grandson Professor Bon Koizumi and his wife Shoko Koizumi the revamping of the Hearn museum has made Matsue a powerhouse and magnet for those interested in Hearn. These efforts have spawned a Hearn center in Greece and the Lafcadio Hearn Gardens in Ireland. Still, ironically, some Japanese are not aware of his origins and the fact his writings are all in English! Another interesting irony is that Toyama University and the University of Virginia are depositories of some of his most precious manuscripts and materials thanks to benefactors, yet he never visited either in his lifetime.

Perhaps the most important archive of Hearn's private notebooks, letters and manuscripts can be found in the Clifton Waller Barrett Collection of the Albert and Shirley Small

Special Collections Library of the University of Virginia. Clifton Waller Barrett (1901-1991), 1920 alumnus of the University of Virginia, writes in 1983 that, "In 1939 I made a decision that brought about a radical change in my life. I decided to amass a comprehensive collection of American Literature" (Davenport). He believed,

> One writer who stood out in this group was Lafcadio Hearn. His amazing originality, combined with the unusual beauty and quality of his writing had won praise from discriminating critics; however, in the years of World War II and the decade following he was neglected. (Davenport)

It is also an irony that Barrett perceived Hearn as an American writer as he clearly states that his objective was a collection of the most influential American writers from 1776.

Barrett's notion is important, as it is a clue as to how Hearn was accepted by the public in general that continued to read his works by major American publishers such as Harper during his lifetime and before the World War II. Hearn was a valued travel writer and even received substantial advanced payments for his work. Some materials in the archive do give an indication of this awareness among his American readership. For instance on August 18, 1933 *The Detroit Times* showcases Lafcadio Hearn in its Robert L. Ripley's *Believe it or not* segment. The fact that Hearn is the centerpiece of this illustrated article clearly proves his predominance as an American writer in the stream of consciousness of the average reader. Ripley was a famous explorer, and reporter who traveled the world in search of the mysterious and unbelievable which makes him kin to Hearn in some respects. The whole point of this piece is to shock the public with unbelievable facts about the subject. He describes Hearn as a "distinguished author" that "was born in the Ionian Islands of a Greek Mother and an Irish Father. He was raised in Wales,

worked in the United States and West Indies – Married a Japanese – Became a naturalized Japanese and a Buddhist and changed his name to Yakumo Koizumi" (Barrett). Thus, he assumes the ignorance of the general public giving a final punch at the ending to convey the "unbelievable" fact that he changed his citizenship, religion and his name. The public knows Hearn's books on Japan but the fact that Ripley himself manages to make his own errors in Hearn's biographical information again emphasizes the assumptions and misconceptions of the American public.

Barrett's unlimited enthusiasm and wealth from his business success resulted in a great depository with Hearn related materials and original manuscripts that has preserved his legacy for generations to come. This archive of great American writers has attracted visitors from all walks of life and all over the globe. For instance, Hollywood starlet Elizabeth Taylor visited the collection with her then husband Senator John Warner in 1977 for the donation of his papers to the Barrett Collection as can be seen on the online portion of the archive. On his first visit to the archive Lafcadio Hearn's great-grandson Prof. Koizumi Bon of the University of Shimane was amazed at the impressive collection of Hearn family photos and memorabilia of which even includes two figurines that Hearn picked up on his visit to Izumo Taisha. According to Prof. Koizumi, these two wooden carvings are representations of "Ebisu and Daikoku" and "It is said that they bring good luck. Ebisu (Kotoshironushi) is shrined at Miho-Jinjya, and Daikoku (Ookuninushi) is shrined at Izumo Taisha" (Koizumi). He said that Hearn would collect figurines and good-luck charms on pilgrimages and that he had donated some of them to overseas institutions. Prof. Koizumi was also surprised at the fact that there are two tablets with the Buddhist names of Lafcadio Hearn and his wife in the collection as well. Upon searching through

the materials and documents the origin of these Buddhist tablets become clear. One might think they had been acquired from a source in Japan but they were in fact the results of the labor of great Hearn admirers in the United States.

According to a news article clipping from December 2, 1932 of *The Montebello News* of Montebello, California, a ceremony had been held at the Montebello Library. A Buddhist monk named Nyogen Senzaki conducted a ceremony in honor and memory of Lafcadio Hearn. According to the article,

> A large picture of Hearn was placed above the mantle and underneath upon an improvised shrine were placed two small lacquer tablets. One tablet was inscribed with the Buddhist name of Hearn and the other that of his beloved wife. It was before this shrine that Senzaki conducted the twenty-eighth annual ceremonies. A poem composed by the Buddhist monk and dedicated to the author was placed right at the shrine. (Barrett)

The article also states that, "the Montebello library was chosen this year because of the fact that Mr. and Mrs. Perkins live in this city. Mr. Perkins and his wife have long been literary admirers of Lafcadio Hearn"(Barrett). This ceremony was timed to commemorate the twenty-eighth anniversary of his death and the recent passing of "Mrs. Hearn" on February 18, 1932. Again this is clear evidence that Hearn's works were greatly admired in America at this time by the general public with this ceremony being held in California and covered by the news media. Yet another article from Nov. 26, 1932 was published in the *Illustrated Daily News* of Los Angeles, California with photos of the event and the Buddhist tablets.

P.D. Perkins, also known for publishing a comprehensive bibliography of Hearn in

1934, becomes an important contributor to the Barrett collection. In a signed letter from 1955, P.D. Perkins states that his collection of the *Unpublished Articles Written by Lafcadio Hearn for the "Japan Chronicle", Kobe Japan, Oct. 26, 1894 – Oct. 26, 1895,* are "the only record of Hearn's articles" (Barrett). According to Perkins, he "spent two weeks in September 1941, three months before the start of World War II going over the files of the newspaper for 1894-95" (Barrett). He writes that, "the file of the Chronicle from which I obtained these articles was destroyed during the bombing of Kobe during the war. To the best of my knowledge there is now no file of the Chronicle in existence" (Barrett). An article accompanying these manuscripts from The Japan Chronicle of August 7, 1941 details the "Lafcadio Hearn Symposium" held by the Kansai Branch of The Japan Times of which Perkins describes in a partially typed and handwritten manuscript about his journey to Japan at this time. Obviously this article verifies his journey to Japan at such a dangerous time as well as highlights his willingness to risk his life to preserve Hearn's writings. Again one feels the irony that few scholars visit the collection today.

Professor Koizumi Bon happens to be named after another great admirer of Lafcadio Hearn. Brigadier General Bonner Fellers, who served in the Pacific Theater under the command of General Douglas MacArthur from 1942 to 1946, had visited Japan before the war on several occasions to write his graduate thesis on Japan. Fellers completed it in 1934 on the "Psychology of the Japanese Soldier" just when Perkins publishes his biography on Hearn. We can assume that this significantly impacted his research and possibly served as his anchor for advising General MacArthur in Japan. He was a great admirer of Hearn's writings on Japan and he would visit the Hearn family on several occasions before and after the war. His daughter, Nancy Jane Fellers, would later edit a publication for Hearn's eldest son about his father.

This publication is significant as it helps give the origins of many of the notebooks and letters acquired by Barrett. In his 1957 publication of *Re-Echo* Kazuo Koizumi writes that "During World War II I was afraid that Father's treasured manuscripts would be burned in an incendiary bomb attack. I divided his mementos into three packages, two of which I left with friends. I kept one packet. One package my friend stored in a warehouse which was burned; the other package was stolen" (Koizumi 157). The original manuscripts of *Re-Echo* are also preserved at UVA along with all clippings from the notebooks for the publication. It is easy to see that the clippings of artwork and notes used in the publication of *Re-Echo* come from the other notebooks acquired by Barrett. All these materials now find a home in this collection. One can also see original artwork by Hearn's eldest son that to my knowledge has remained unpublished in any form.

Perhaps one forgotten piece of the collection is the artistic renderings of Lafcadio Hearn's ghost stories by his eldest son. They are beautifully painted on traditional Japanese canvas and signed "O'Giglamp (Kazuo Hearn Koizumi)." There are two full separately handwritten and painted sets of these images with a synopsis for each story on the back of each piece. For instance, one of the most notable stories, Mimi-Nashi Hoichi" (Hoichi-with-no-ears) has the following excerpt,

> Hoichi, sitting alone in the rain before the memorial tomb of Antoku Tenno, making his biwa resound, and loudly chanting the chant of the battle of Dan-no-ura. And behind him, and about him, and everywhere above the tombs, the fires of the dead were burning, like candles. Never before had so great a host of Oni-bi appeared in the sight of mortal man. . . .(Barrett)

His most likely earliest version of this story can be found in one of the notebooks kept at the University of Virginia. Lafcadio Hearn's wife Setsu relates here collaborative experiences with her husband's creative process in her memoirs. He particularly felt the imagery of the opening of the gate should be foreboding and ominous. His wife details his decision to use the Japanese phrase "Kaimon" in his English version of this ghostly tale. She writes that, "He thought that the expression "Mon o hirake!" in the original sounded too weak for the samurai's call at the gate, and replaced it by "Kaimon!" after pondering alternative expressions" (Hasegawa 24-25). This notebook is possibly the one used in this encounter, as there is an impressive illustration of the gate to be found alongside yet another surprising fact.

The story of Hoichi is a folktale with several iterations in Japanese folklore. One version collected by famous folklorist Kunio Yanigata in his *Hitotsume Kozo Sono Ta* from the region of Tokushima located near Dannoura is entitled "Mimikiri Danichi." Obviously folklorists have speculated that this was probably a variant of Hearn's tale and in this notebook the title "Mimi-Kiri Hoichi" is clearly penciled in bold capital letters in Hearn's handwriting. In comparison with the contents of Hearn's final published version it becomes clear that he had initially intended to use the name Mimi-Kiri Hoichi at the end of his version. After presenting this at the symposium Prof. Bon Koizumi was kind to share the fact that the final manuscript can be found at the Morgan Library in New York and a note can be found saying that the original title was indeed "Mimi-Kiri Hoichi." This note was removed at the time of publication. An examination of these notebooks adds an interesting dimension to current scholarship and could still bring new discoveries and revelations.

A brief autobiographical essay for an alumni journal dated March 28, 1893 for the

Shimane Prefecture Common Middle School and Normal School of Matsue can also be found in the archives at the University of Virginia. Hearn had written it to be translated by his student Masanobu Otani from Matsue who would later become his student assistant at Tokyo Imperial University.

> I was born in the town of Lencadia（sic）in Santa Maura, which is one of the Ionian Islands, in 1850. My mother was a Greek woman of the neighboring island of Cerigo. My father was an army doctor attached to the 76th English Regiment of the Line . . . . My parents took me to England when I was only five or six years old. I spoke Romaic which is modern Greek and Italian; but no English . . . . Myself and brother were brought up by rich relatives and educated at home. My father and his wife died in India of fever . . . . I was 18 years of age when my friends lost all their property; and I was obliged to earn my own living. I went to America in ’69 and learned the printing business. After some three years more, I gave up printing to become a newspaper reporter. . . Then I went South to become a literary editor of the chief paper of New Orleans, and I remained there for 10 years. In the meantime, I had begun to publish some books, novels, translations and literary sketches（sic）for newspapers, and I went to the French West Indies and to South America to write a book about the tropics, returned to America 2 years later, and after publishing my books, resolved to go to Japan. And then I became a teacher.（Barrett）

This self-portrait, while lacking the depth of his biographers, is significant as it clearly shows how he perceived his own origins and how he saw his life as journey shaped by a movement away from them. He would spend a large portion of his life in states of physical and

psychological separation but he would eventually come to a point in his life when he would have nostalgia for the home of his youth.

On September 24, 1901, just three years and two days before his passing from this life, Lafcadio Hearn would write another letter to a young W.B. Yeats after an earlier protest to the new publication of his favorite ballad. He had been unhappy with Yeats' revisions of the poem "Folk of the Air" and Yeats' promise to partially restore it to its "original strange of beauty" had seemed to reinvigorate him in the twilight of his life. While he tells him that he, himself, had been one denied the "gift of song," he still continues to implore him to make further changes. "And as I have long been a teacher – that is to say, an earnest student, - of English literature, you will not, perhaps, object to some further protests and disputations"(Hearn Letter to W. B. Yeats). This poem had awakened something in him; he was Irish. At the close of this letter he tells Yeats that "But forty-five years ago, I was a horrid little boy "with a crack in my heart" who lived in Upper Leeson Street, Dublin and I had a Connaught nurse who told me fairy-tales and ghost stories. So I ought to love Irish things, and do"(Hearn Letter to W.B. Yeats).

The beginnings of an unpublished story about Catherine can be found in another notebook housed in Barrett's collection. In regards to his nurse he writes, "The name of my nurse is Catherine Costello, - a tall girl from Connaught." He describes her as having a strong rebellious constitution to the point that he was afraid of her but had great respect for her "goodness" and ability to stand up for herself. He writes that "Catherine does just as she pleases; and sometimes flatly refuses to obey even the Powers, who have learned that she has a will . . . . Catherine is insolent at times; Catherine calls people ridiculous names in Irish. . . ." (Barrett). One cannot help but see the parallels of a great esteem for a strong individual with insolent yet

righteous eccentricities. This attempt to record his childhood influences is partly an attempt to find those qualities of his own character that reconnect him with his Irish origins.

Manuscripts of his letters to editors such as Horace Scudder give greater insights into his life and Hearn, himself, as an individual. For instance we can see his feeling of self-confidence when he tells Scudder that "The difference between myself and other writers on Japan is simply that I have become practically a Japanese – in all but knowledge of language; while other writers remain foreigners, looking from outside at riddles which cannot be read except from the inside . . .You can see how conceited I am; but my conceit is based on facts"(Barrett). One of his most humorous letters to *Harper & Brothers* in 1890 details his anger and proficiency in profanity when he loses his temper with editors upon arrival in Japan. Upon reading one might be impressed with the eloquence of his words and embarrassed by the shocking diatribe of vulgar vocabulary.

> Liars, -- and losers of mss. - employers of lying clerks and hypocrite thieving editors, and artists whose artistic ability consists in farting sixty-seven times to the minute, -- scaliwags, scoundrels, swindlers, sons of bitches; - Pispots-with-the handles-broken-off-and-the-bottom-knocked-out, - ignoramuses with souls of slime composed of seventeen different kinds of shit, --（Barrett）

These letters give one the feeling of being able to see his life, eccentricities and self-exploration from a first-person perspective. As Hearn suggests to Yeats that "Very complex beings we all are – made up of countless billion selves"(Hearn Letter to W.B. Yeats), he had been driven by his own search for "self" or identity while observing and cataloging culture to not only grasp the heart and soul of others but his own. His initial quest to paint a unique portrait of Japan would

become a personal quest; an amalgam of his own cultural baggage; a mishmash of an Irish patrician upbringing with a westernized layer always at odds with himself.

It is the hope of the author that we might be able to find more connections between the materials at the University of Virginia archive and those at Toyama. According to guide for the Lafcadio Hearn Collection at the University of Virginia Library, "There are nearly three hundred letters, some of them to Ernest Fenollosa and to Japanese friends, twenty-five groups of manuscripts, including those of *Kwaidan* and the description of feudal customs, *Glimpses of Unfamiliar Japan*, over thirty notebooks, and innumerable periodical appearances and translations"(*University of Virginia Special Collections*). It represents all "Hearn variant bindings, later editions, periodical printings, translations, [and] inscribed association copies" according to essayist Guy Davenport, writing for the exhibition on Hearn in 1983 (Davenport). Upon browsing through this treasure-trove of Hearn papers housed at the Barrett Library, one comes to realize the importance of family bonds, and the dedication of those willing to risk so much in pursuit of the preservation of these materials. In this global age it is the opinion of this author that his works can be a vehicle to encourage young Japanese to rediscover their own cultural identity along with sharing his fantastic stories and experiences with students and visitors from abroad. Recently, the "Open Mind of Lafcadio Hearn" global forums in locations such as New Orleans, Greece, and Ireland have helped create a greater awareness of his contributions as a writer and this momentum has led to greater activity in academia by scholars across the globe. It is the hope of this author to collaborate with other scholars to find more interesting revelations in the future.

References

Barrett, Clifton Waller. *Papers of Lafcadio Hearn [manuscript] 1849-1952.* Charlottesville: Special Collections, University of Virginia.

Davenport, Guy. *The Art of Lafcadio Hearn: An Exhibition of Books, Manuscripts, and Art from the Clifton Waller Barrett Library.* Charlottesville: Alderman Library, University of Virginia, 1983.

Hasegawa, Yoji. *Lafcadio Hearn's Wife: Her Memoirs and Her Early Life.* Tokyo: Micro Printing Company, 1988.

Hearn, Lafcadio. *Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things*. Tokyo, Japan: Charles E. Tuttle Company Inc., 1971.

Hearn, Lafcadio Letter to W. B. Yeats. 22 Sept. 1901. MS., Private Collection.

Koizumi, Kazuo Hearn. *Re-Echo*. Caldwell, Idaho: The Caxton Printers, Ltd., 1957.

Koizumi, Bon. "Bunka Shigen To Shita Saka To Bungaku: Lafcadio Hearn No Kanosei." Toyama University, Toyama City. 24 Dec. 2016. Lecture.

Kunio, Yaigata. *Hitotsume Kozo Sono Ta*. Tokyo: Oyama Shoten, 1941.

Perkins, P. D., and Iona Perkins. *Lafcadio Hearn: A Bibliography of His Writings*. Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1934.

Sangu, Makoto. *Lafcadio Hearn: Editorials From The Kobe Chronicle*. Tokyo: The Hokuseido Press, 1960.

Williamson, Rodger Steele. *Glimpses of Lafcadio Hearn in Virginia.* The Blog of the Albert and Shirley Small Special Collections Library, 10 Dec. 2015. Web. 22 Nov. 2016.

【概要】

ハーン作品のドイツ語版とユダヤ系文化人たち

岩本　真理子

始めに

富山大学のヘルン文庫に保管されているハーンの蔵書には、意外なほど多くのドイツ文学作品が含まれている。それらはすべて英語またはフランス語訳であるが、これらの本はハーンがドイツ文学に深い関心を寄せていたことを示している。これを手掛かりの一つとしてハーンとドイツ文学の関係を調査し始めたところ、ドイツ語圏でのハーン受容に関して興味深い事実が明らかになってきた。ハーン作品のドイツ語版が初めて出版されたのは彼の他界の翌年、1905年である。ドイツ語版は1905年の *Kokoro* を皮切りに毎年一冊ずつ出版され、1910年には六巻からなるハーン著作集が出揃った。このドイツ語版著作集を詳細に調べると、ドイツ語圏でのハーン受容にユダヤ系文化人たちが関わっていたという意外な事実が浮かび上がってくる。

ドイツ語版に関わった人々

ハーンの著作初のドイツ語版を手がけたのは、ウィーンの翻訳家ベルタ・フランツォス(Berta Franzos 1850年～1932年)である。彼女はオーストリア領ガリツィア地方のブロディ[1](現ウクライナ領)出身のユダヤ系女性で、ハーンの作品多数とパーシヴァル・ローウェルの『極東の魂』を翻訳している。ドイツ語版ハーン著作集の第一巻となった *Kokoro* には、オーストリアの作家フーゴー・フォン・ホーフマンスタール(Hugo von Hofmannstahl 1874年～1929年)が序文を付したが、彼もまたウィーンのユダヤ系文化人であった。さらに、六巻本の装丁と挿絵（版画）を担当した画家・版画家エーミール・オルリク(Emil Orlik 1870年～1932年)はプラハ出身のユダヤ系オーストリア人であり、主にウィーンで活躍していた。オルリクは1900年4月に来日し、10ヶ月ほどの滞在中に狩野友信から日本の絵画技法を、また版画の摺り師や彫り師から日本の多色刷り版画の技法を学んでいる。

この六巻本は好評だったようで、1911年には作品を抜粋して一冊にまとめた抄本 *Das Japanbuch eine Auswahl aus den Werken von Lafcadio Hearn*（以下 *Japanbuch* と略)が出版された。巻頭にはウィーン出身の作家シュテファン・ツヴァイク(Stefan Zweig 1881年～1942年)による評伝「ラフカディオ・ハーン」が付されたが、彼もまたユダヤ系であり、1934年にナチス政権から逃れて亡命し、ブラジルに移住した後自殺している。

1925年には *In Ghostly Japan* と *Kottō* から六巻本に含まれなかった作品を抽出してドイツ語に翻訳した *Japanische Geistergeschichten*（『日本の怪談』）という本が出版された。翻

訳者は『ゴーレム』*Der Golem*（*Die Weißen Blätter* 誌に 1913～14 年に連載）の作者グスタフ・マイリンク（Gustav Meyrink 1868 年～1932 年）である。ウィーン生まれの彼はユダヤ系ではないにもかかわらず、女優だった母が同姓同名のユダヤ系女性と混同されていたため、またユダヤ神秘主義カバラの知識を活用して『ゴーレム』を書いたため、しばしばユダヤ系と勘違いされている。このように、六巻本の翻訳者、装丁担当者、序文執筆者、抄本の評伝執筆者すべてがウィーンのユダヤ系文化人であり、その後のハーン翻訳者もユダヤ文化と深いつながりを持つ人物であったことは決して偶然ではない。

ドイツ語版に関わった三人の作家ホーフマンスタール、ツヴァイク、マイリンクには、「ウィーンのカフェ文士」という共通点がある。当時のオーストリアは現在の数倍の領土を持ち、十以上の民族・言語が同居する多文化国家であり、ウィーンのカフェでは数十カ国の新聞や雑誌を検閲無しで読むことができ、文化人たちの情報収集・情報交換の場となっていた。

ウィーンでユダヤ系文化人の活動が盛んだったのは、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の政策に拠るところが大きい。彼はユダヤ人にも土地の所有権や選挙権を与えて平等化を図り、1857 年末からのウィーン大改造に際してはユダヤ系資本家にも土地を売却してその収入を都市改造に充て、文化方面でも画家グスタフ・クリムトのような才能ある人材は民族を問わず採用した。その結果ウィーンには数多くのユダヤ人が住み、ユダヤ系文化人たちが活躍していたのである。さらにユダヤ系女流画家が多数いたなど、ユダヤ系女性の活躍が盛んだったのも当時のウィーン文化の特徴のひとつだった。

〈フランツォス訳六巻本とドイツ語圏でのハーン受容〉

フランツォス訳の六巻本はフランクフルト・アム・マインのリュッテン＆レーニング社から *Kokoro*（1905 年）、 *Lotos*（1906 年）、 *Izumo*（1907 年）、 *Kyūshū*（1908 年）、 *Kwaidan*（1909 年）、 *Buddha* （1910 年）の順に出版された。各巻はホートン・ミフリン社のハーンの著作のうち六冊をほぼそのまま訳したものであり、*Kokoro* はハーンの *Kokoro* の全訳（巻末の Appendix を除く）に加えて巻頭にホーフマンスタールによる序文が付され、*Lotos* は主に *Glimpses of Unfamiliar Japan* 第一部から、*Izumo* は主に *Glimpses of Unfamiliar Japan* 第二部から作品を収録、*Kyushu* は *Out of the East* の全訳、*Kwaidan* は *Kwaidan* の全訳、*Buddha* は *Gleanings in Buddha-Fields* の全訳、さらに各巻末にはハーンの原註の独訳が付されている。1911 年の抄本 *Japanbuch* はツヴァイクによる評伝 *Lafcadio Hearn* を巻頭に置き、*Lotos*、*Izumo*、*Kokoro*、*Kyūshū* から作品を収録している。

ドイツ語版に二人の著名な作家が寄稿した序文と評伝から、ドイツ語圏でのハーン受容について何が読み取れるだろうか。まず、*Kokoro* のためにホーフマンスタールが著わした序文冒頭を見てみよう。

私は電話口に呼び出され、ラフカディオ・ハーンが亡くなったことを知らされた。東京で昨日、あるいは今日の未明か今朝早くかに亡くなったのだ。[2]

ハーンの死を知らせたのが誰だったのかは不明であるが、1904 年のハーンの死の直後に書かれたような筆致である。また彼がこの序文で *Glimpses of unfamiliar Japan* や *Gleanings from Buddha fields* といった英語原題をそのまま用いていることから、ドイツ語版以前にハーンの作品を英語で読んでいたことが推測できる。

一方、*Japanbuch* のためにツヴァイクが執筆した評伝 *Lafcadio Hearn* を 1906 年刊行のエリザベス・ビスランド編 *Life and Letters of Lafcadio Hearn* と比較してみると、ツヴァイクが同書を参考にして評伝を書いたことが明らかになる。[3]たとえばツヴァイクはハーンのアメリカ到着を次のように表現している。

この若くて未熟で、何もまともに習ったこともなく、元々虚弱で、しかも片目の 19 才の少年は、友も親類も仕事もこれといった技能もなく、今やニューヨークの無情な通りに立っている。[4]

この文章が以下のビスランドの文に基づくものだということは明らかである。

Sometime during the year 1869 the exact date cannot be ascertained Lafcadio Hearn, nineteen years old, penniless, delicate, half-blind, and without a friend, found himself in the streets of New York.[5]

またツヴァイクは、ハーンがアメリカ移住直後に移民列車の中でパンを恵んでもらったというエピソードを紹介しているが、これも *Life and Letters of Lafcadio Hearn* に見られるものである。さらに彼はハーンのアメリカ時代について「このもの静かで柔和な人間が『攻撃的な利己心(agressive selfishness)』の国でどんなに苦しまねばならなかったかは、筆舌に尽くしがたい」[6]と評しているが、agressive selfishness は日本移住後のハーンが書簡や作品中で西洋文明を批判する際に度々用いた言葉である。この他にも、ツヴァイクが *Life and Letters of Lafcadio Hearn* を参考にしたと思われる箇所がいくつかあり、彼がハーンの評伝を書くにあたって同書を熱心に読んだことが推測できる。

ドイツ語圏でのハーン受容の状況は公共図書館のデータからも読み取ることができる。ベルリン公共図書館連合とオーストリア国立図書館の蔵書を検索すると、ベルリンでは 1927 年の

英語版、オーストリアでは1922年のフランツォス版以降ハーン作品が途絶え、次に現れるのは第二次世界大戦終了後である。1933年にヒトラー政権が誕生、1938年にドイツがオーストリアを合邦し、ドイツ語圏が完全にナチス化してユダヤ人迫害が強まると、ユダヤ系文化人が活動の場から締め出され、悲劇的な状況に置かれたのみならず、ハーンのようなハイブリッド作家が好まれなくなったのであろう。

しかしユダヤ系文化人によるハーン受容は、上海という意外な場所で続いていた。上海はビザ無しで入れる自由港だったため、多くのユダヤ人が迫害を逃れて移住していたのである。1939年から1948年にかけて上海のドイツ・オーストリアのユダヤ人コミュニティー向けに発行されていた新聞『上海ジューイッシュクロニクル』の1942年4月16日版にフランツォス訳の『英語教師の日記から』の一部が「日本の現代教育システム」という題で、また同月23日にはフランツォス訳の『おしどり』全文が掲載されている。さらに1943年10月3日には「ラフカディオ・ハーン　エッセイ」と題する評伝が載せられたが、そこには次のような記述がある。

> 熊本で彼は有名な本『オリエントの光』を書いたが、この本はヨーロッパで憤激の嵐を引き起こした。この作品で彼は東アジアの宗教、哲学、風習、習慣が優っていることを証明している。[7]

『オリエントの光』(Licht vom Orient)は *Out of the East* の誤記かと思われるが、このエッセイはフランツォス訳のハーン作品がドイツ語圏で議論を巻き起こしていたことを示す貴重な記録である。それにしても、このような苦難の時期にユダヤ系文化人が亡命先でまでハーンを紹介し続けたのはなぜなのだろうか。ユダヤ神秘主義「カバラ」は一即多・多即一という仏教思想に近い。それゆえにハーンの説く日本の姿や東洋思想、仏教的思想は、ユダヤ人にとってはむしろ馴染み深いものに思えたのだろう。ツヴァイクはハーンの特徴を Weltbürgertum（世界市民性）と表現したが、迫害とその結果身につけた世界規模での活動能力ゆえに否応なしに「世界市民」となったユダヤ人たちが、ハーンの世界市民性に共感を覚えたであろうことは想像に難くない。ユダヤ系の人々に関する資料はその多くが失われ、また生存者の亡命や移住によって世界各地に分散している。残されたわずかな資料を捜し求めることで、ハーンとユダヤ系文化人たちの精神的なつながりをさらに解明していきたい。

---

1 ブロディは人口 2 万人ほどの小都市であるが、人口の半数以上がユダヤ系のいわゆる「ユダヤ人都市」である。第二次世界大戦中、ウクライナではナチスによる凄惨なユダヤ人虐殺が

行われ、ブロディのユダヤ系住民約 1 万人のほとんど全員が虐殺されている。
2 *Kokoro* （Rütten & Loening, 1905, p.4）
3 *Life and Letters of Lafcadio Hearn* はホートン・ミフリン版のリプロダクト版を（Rinsen Book Co.,1973）、ツヴァイクによる評伝はトロント大学が公開している *Japanbuch* の PDF 版を使用した。
4 *Japanbuch* （Rütten & Loening, 1911, p.4）
5 *Life and Letters of Lafcadio Hearn*（ Houghton Mifflin Company, 1922, Vol.1, p.35）
6 *Japanbuch* （Rütten & Loening, 1911, p.5）
7 *Shanghai Jewish chronicle* は、1942 年 4 月 16 日版、4 月 23 日版、1943 年 10 月 3 日版共にドイツ国立図書館からデジタル公開されているものを使用した。

【論文】

ヘルン文庫書き込み調査報告

――『ギリシア詞華集』と『ルバイヤート』をつなぐもの――

中島淑恵

はじめに

富山大学附属図書館所蔵のラフカディオ・ハーン（小泉八雲）旧蔵書（ヘルン文庫）に収められている英語版の『ギリシア詞華集』（書架番号[302]*The Greek anthology : as selected for the use of Westminster, Eton and other Public schools / literally translated into English prose, chiefly by George Burges, to witch are added Metrical Versions by Bland, Merivale, and others, and an index of reference to the originals*, London, G. Bell, 1893.）[1)]の書き込みについては先に論じたが、裏見返しの書き込みでオマール・ハイヤーム（Omar Khayyam）とあった 276 頁の内容について、オマール・ハイヤームの著作、すなわち『ルバイヤート』との関連で詳しく論じる機会がこれまでなかった。

ヘルン文庫には 2 冊の『ルバイヤート』がある。一つはここで論じる、フィッツジェラルド訳（書架番号 [97] Fitzgerald, Rubaiyat of Omar Khayyam in English verse / Edward Fitzgerald. – New York, Houghton Mifflin. 1888.）であり、これには数多くの書き込みがある。いま一つは、マクミランの教科書版シリーズ（書架番号[398] Rubaiyat, Rubaiyat of Omar Khayyam, the astronomer-poet of Persia: rendered into English verse. – London, Macmillan. 1899. Golden treasury series.）で、こちらには全く書き込みはない。フィッツジェラルド訳は 1859 年にまずは匿名で出版され、すぐに注目されたわけではないが、やがてロセッティやスウィンバーン、フートン卿によって評価され、1868 年の改定版発表以降は、まずは英国の文学に大きな影響を与え、わが国の文壇においても、蒲原有明の和訳（明治 41（1908）年）などによって、アラビア語からの直訳が紹介されるまでの長きにわたって、大きな影響力を及ぼしてきたものである。

ヘルン文庫所蔵のフィッツジェラルド訳『ルバイヤート』は 1888 年の版であり、来日後に入手したものと考えられるが、ハーンがいつからこのフィッツジェラルド訳の存在を知っていたかについては不明である。アメリカ時代にはすでにその評判を耳にしていた可能性が高いのではないかと思われる。

小論では、ヘルン文庫所蔵の『ルバイヤート』の書き込み調査の結果をもとに、1903 年に東京帝国大学で講じられたとされるハーンの「エドワード・フィッツジェラルドとルバイヤート

（Edward Fitzgerald and Rubaiyat）」[2] の内容を吟味しながら、『ルバイヤート』がハーンに与えた影響について考察を試みることにする。

１．英訳版『ギリシア詞華集』の「オマール・ハイヤーム」の書き込み

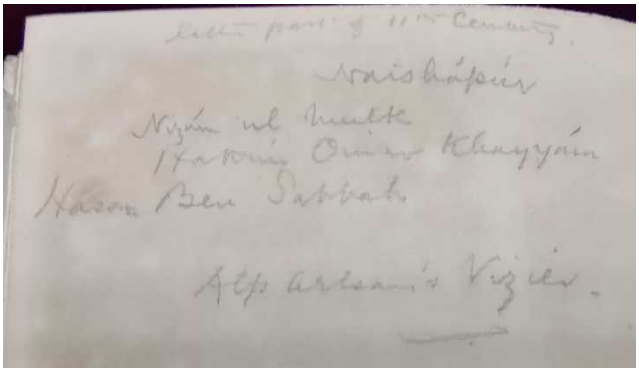
同書裏見返しに「オマール・ハイヤーム（Omar Khayyam）」の書き込みのある 276 頁には、傍線等の書き込みはないが、詠み人しらずの以下のような詩が収められている。

> How was I born? Whence am I? For what have I come? To go away again. How can I learn anything, knowing nothing? Being nothing. I was born. I shall be again as I was before. The race of voice-dividing (men) is nothing and nothing. But come, prepare me the pleasure-loving stream of Bacchus; for this medicine is the antidote of ills.
>
> どのようにして私は生まれたか, 私はなぜ存在しているのか, 何のために私は来たのか, もう一度行ってしまうために。何も知らずして私は何かを学ぶことが出来るのか，何ものでもなく，私は生まれた。私はかつてそうであったものにまた戻るのである。声によってより分けられる種族（人間）は無の無である。しかしここに来てバッカスの楽しみを愛する小川を私に用意せよ，この薬は病を癒すものであるからには。

この詩は人生の無常なることを詠ったもので、たしかに『ルバイヤート』にしばしば示される無常観と通底する境地が物語られていることは一見してわかる。とりわけ現世の憂さを酒で晴らそうとする末節はいかにも『ルバイヤート』を思わせるものである。この他に同書裏見返しの書き込みには、同じような無常観を述べる 117 頁の「空の空なるかな（vanitas vanitatum」や 165 頁のグリコンの詩なども見られるが、これについては先に論じたので、小論ではヘルン文庫所蔵『ルバイヤート』の書き込み調査の結果をまず示すことにしたい。

２．ヘルン文庫所蔵オマール・ハイヤーム『ルバイヤート』の書き込み

以下に、ヘルン文庫所蔵フィッツジェラルド訳の『ルバイヤート』の書き込みについて確認しておきたい。まず同書裏見返し左側冒頭には、以下のような鉛筆による書き込みがみられる。なお、右側に筆者による転写を示す。



Alabian poet of 11th Century

Naishapur

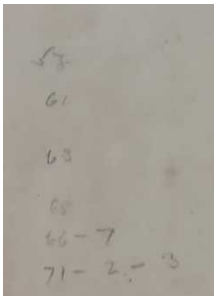
Nizam ul Mulk

Hakim Omar Khayyam

Hassan Ben Sabbah

Alp Arslam's Vizier

さらにこの下には、以下のように数字が縦に書かれている。右は筆者による転写である。



58

61

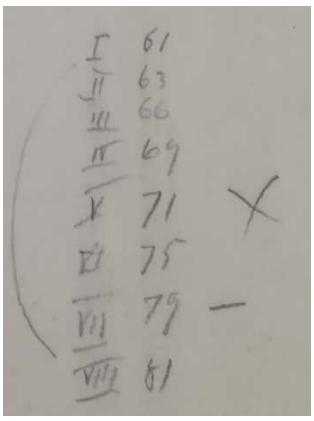
63

65

66、7

71、2、3

また、同じ裏見返しの右側には、ローマ数字とともに、以下のように数字が縦に書かれており、その左側には大きくまとめるような弧が、また右側には、Ⅴ 71 の右に×印、Ⅶ 79 の右に－印が記されている。これも該当箇所の写真と筆者による転写を以下に示す。



Ⅰ 61

Ⅱ 65

Ⅲ 66

Ⅳ 69

Ⅴ 71 ×

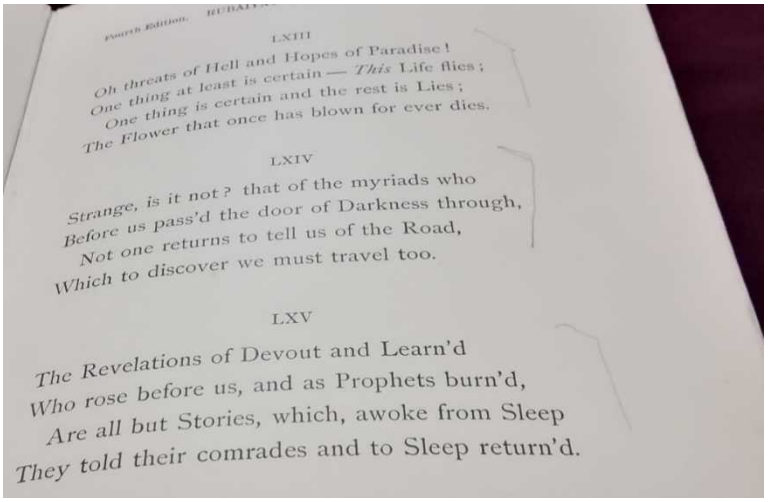
Ⅵ 75

Ⅶ 79 －

Ⅷ 81

これまでの通例として、算用数字は本文中の関心のある頁、×印や－印の付いている箇所は、はとくにハーンが注目した箇所であると考えられる。たとえば 71 頁には、以下のように三つ

の詩の右余白に傍線の書き込みがみられる。


Fourth Edition. RUBAI

LXIII

Oh threats of Hell and Hopes of Paradise!
One thing at least is certain — This Life flies;
One thing is certain and the rest is Lies;
The Flower that once has blown for ever dies.

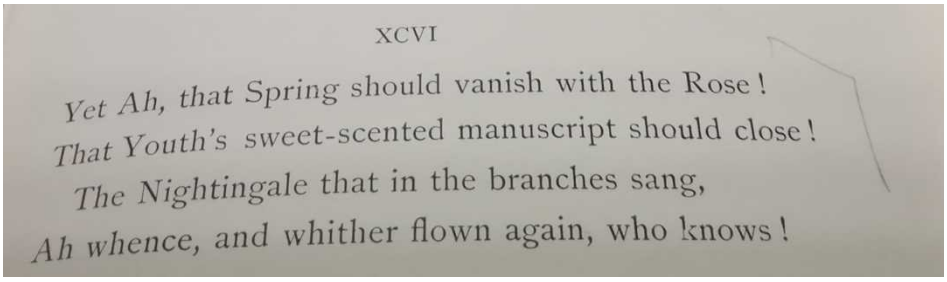
LXIV

Strange, is it not? that of the myriads who
Before us pass'd the door of Darkness through,
Not one returns to tell us of the Road,
Which to discover we must travel too.

LXV

The Revelations of Devout and Learn'd
Who rose before us, and as Prophets burn'd,
Are all but Stories, which, awoke from Sleep
They told their comrades and to Sleep return'd.

同じように 79 頁にも、 一つの詩の右余白に傍線がみられる。


XCVI

Yet Ah, that Spring should vanish with the Rose!
That Youth's sweet-scented manuscript should close!
The Nightingale that in the branches sang,
Ah whence, and whither flown again, who knows!

このようにして精査してみると、同書裏見返しに書き入れられていた頁には必ず上記のような傍線が余白に書き入れられていることが判明した。もちろん頁によって、1 篇の詩のみに傍線が引かれている場合もあれば、2 篇以上の詩に傍線が引かれている場合もある。また、裏見返しに数字の記入がない箇所の本文の余白に傍線が引かれていることはなかったことも追記しておく。

3. 東京帝国大学講義録「エドワード・フィッツジェラルドとルバイヤート」から

3−1. フィッツジェラルドの訳業に対する高評価

フィッツジェラルドの『ルバイヤート』訳を取り上げた表題の講義だけでなく、講義録の端々から、ハーンがフィッツジェラルドの訳業を高く買っていた様子をうかがうことができる。たとえばハーンは、「卓越した散文の研究」の講義の中で、英語は、英語で書かれた文学資源のみを学ぶだけでなく、世界中の人類の英知を学ぶことができるために有用であると説いている箇所で、フィッツジェラルドの翻訳を以下のように高く評価している。

> But you have certainly learned how great some English translators have proved themselves, even in verse, - for example, Fitzgerald; and scarcely less interesting and

sympathetic than Fitzgerald is Palmer's volume of translation from the ancient Arabian poets[3].

しかし、君たちはしかと学んだはずである。英国の翻訳家のうちには、韻文でもその偉大なる力量のほどを示した者がいたことを。たとえばフィッツジェラルドである。そしてフィッツジェラルドに比肩しうるほどに興味深く共感を呼ぶものは、パーマーによる古代アラビア詩人の訳業くらいである。

あるいは、「偉大なる翻訳家」について論じた講義の中でも、基本的に古典語で書かれたものの翻訳はフランス語やドイツ語で書かれたものの方がよい、としながら、フィッツジェラルドの訳業を英訳の例外として称賛している。

We prefer the French and German translations. There is indeed one astonishing exception - Fitzgerald's translation of Omar Khayyam. But this is much more than a mere translation: it is a recombination, and the work of a very rare genius. For one Fitzgerald, you have a hundred Brownings[4].

我々はフランス語またはドイツ語による翻訳をよりよいと認める。確かに驚くべき例外が一つある、フィッツジェラルドによるオマール・ハイヤームの翻訳である。けだしこれは、実に単なる翻訳以上のものである。すなわちそれは（翻訳というよりむしろ）再構築なのであり、たいへん稀な天才の力業なのである。一人のフィッツジェラルドに、百人ものブラウニングがいるほどである。

3－2. 講義「エドワード・フィッツジェラルドとルバイヤート」から

このようにハーンが常に称賛するフィッツジェラルドを正面から取り上げた講義が、1903年に講義されたとされる「エドワード・フィッツジェラルドとルバイヤート」である。講義はまず、フィッツジェラルドの紹介から始まり、さらにまずその訳業を以下のように称賛している。

Therefore you might well wonder how mere translation could rise to the dignity of the very highest place in literature. The only possible answer is that Fitzgerald was probably the best translator that ever lived. He did not make literal translations; he translated only the spirit, the ghost of things[5].

そこで諸君は、単なる翻訳が如何にして文学において最高位の高みに上り詰めることができ

るのかといぶかしく思うかもしれない。それに対する唯一の回答は以下の通りである。すなわちフィッツジェラルドはこれまでに生きた翻訳者のうちで最良の翻訳者であると。彼の翻訳は逐語訳ではない。彼はその精神を、事物の魂を訳出したのである（下線部筆者）。

ここでハーンの述べている「魂（ghost）」の解釈については紙幅の関係もあり、ここでは詳述しないことにするが、ハーンがフィッツジェラルドの訳業をいかに高く評価していたかが伺える箇所である。

これに続いて、オマール・ハイヤームが紹介される箇所を見ておきたい。まずは導入部である。

In the eleventh century at a little school in the Persian City of Naishapur, there were three students studying Mohammedan law together, under a very famous teacher[6].
ペルシャのナイシャプールという町で 11 世紀に、たいへん高名な先生について一緒にモハメドの方を学ぶ三人の学生がいた（下線部筆者）。

これに続けて、この 3 人の学生の名が明かされる。

One of these students was the famous Nizam ul Mulk, who afterwards became Vizier to the great Sultan Alp Arslan: the second student was our poet Hakim Omar Khayyam; and the third who afterwards made a most terrible name in the history of the world, was Hasan Ben Sabbah.
これら 3 人の学生のうちの一人は、ニザン・ウル・マルクであり、のちにスルタン・アルプ・アルスランの大臣となった人物である。もう一人は我らが詩人ハキム・オマール・ハイヤーム、そして三番目は、のちに世界の歴史の中でもっとも凶悪な悪名を上げたハッサン・ベン・サバーである（下線部筆者）。

こうして見てくると、この箇所に羅列された固有名詞が、先に見たフィッツジェラルド版の裏見返しの冒頭に書き込まれていたものであることが分かる。こうしたことから、裏見返しの書き込みは講義で説明するためにキーワードをまとめて記したものなのではないかと推測される。

この後さらにオマール・ハイヤームの紹介をした後で、ハーンは、オマール・ハイヤームの詩が今日読むに値する詩である理由を、「しかし、彼の詩作の偉大なる、不朽の魅力は、この宇宙の重大な問題を不安に思うようなことではないと助言することにある（But the great,

immortal charm of his composition happens to be in the way that he treats this very problem of the universe which he advises us not to worry about.)」[7]と説いている。 なんとなれば、オマール・ハイヤームが、「メランコリーと皮肉なユーモアを交えた奇妙な合成物としてその最高に成功した美しい詩の中で考察するのは(which Omar Khayyam has considered in the most winning and beautiful verse with a strange mixture of melancholy and of ironical humour)」[8]、「存在のはかなさ、死の恐怖、若さの移ろいやすさ、説明不可能なことを説明しようとする哲学の愚かしさ(the impermanence of existence, the riddle of death, the fading of youth, the folly of philosophy in trying explain the unexplainable) (*Ibid.*)」といった、人類普遍のテーマについてだからである。

全般的なこのような導入に続いて、具体的に詩を紹介する前に、ハーンはフィッツジェラルドの英訳が『ルバイヤート』の形式的な押韻形式をも反映させていることを説明している。

> The English translator has correctly imitated the Oriental measure in these quatrains, --- Which contain four lines all rhyming together except the third. The third line has no rhyme; the other three rhyme. Occasionally you may find the whole four rhyming together; but that is an exception to the general rule of the verse. The imitation of this Oriental measure may thus be said to have given to English literature an entirely new form of verse[9].
>
> この英国の翻訳者（フィッツジェラルド）は、これらの四行詩で、東洋風の韻律を正確に模倣している。すなわち、3 詩行以外はすべて韻を踏んでいるのである。3 詩行目は韻を踏んでいないが、ほかの行は韻を踏んでいる。場合によっては 4 行とも韻を踏んでいる場合があるが、それはこの韻文の一般的な規則から見れば例外である。このような東洋風の韻律の模倣が、英国の文学に全く新しい韻文の形式を与えたといわれている。

四行詩自体はヨーロッパの韻文でも古来から存在する形式であるが、通常は 1 行目と 4 行目を押韻する抱擁韻か、2 行ずつ韻を踏む平韻、あるいは 1 行おきに韻を踏む交差韻が常であり、3 行目のみを押韻しないというあり方はヨーロッパでは確かにそれまで行われなかった形式である。ここでハーンはフィッツジェラルド訳が英文学に及ぼした影響についても簡単に触れているが、このような発言から、ハーンの知識の背景に、同時代のフィッツジェラルド訳の英国における受容史があったことが伺われる。

奇妙なことに、以下『ルバイヤート』から詩を引用しながらその内容を学生たちに説明するといった具合に講義は進行するが、フィッツジェラルドの訳についての言及や説明はこの後す

っかり影を潜め、まるでハーンが、オマール・ハイヤームの『ルバイヤート』の内容を講ずることに徹しているかのように思われる展開となる。

最初に引用されるいくつかの四行詩は、「人生のはかなさ(impermanency of life)」を物語るものであるが、ここでまず引用されているのは、いずれも上で見たヘルン文庫所蔵のフィッツジェラルド訳で、裏見返しに頁数の記載のあったものである。まず最初に引用されているのは、66 頁にある 45 番目の詩であり、ハーンはこの詩を引用する前にオマール・ハイヤームの思想を「存在とは何か、と彼は問う。それは果ての無い旅路の途中のつかの間の休息所以上のものではない(What is this existence, he asks. It is not more than a momentary resting place during the course of an infinite journey」[10]と詩の内容を先取りしながら紹介し、「彼のここでの思想は、人生を旅路の旅籠で過ごすつかの間にたとえる仏教のことわざによく似ている(His thought here is much like that expressed in a Buddhist proverb which likens life to a short time passed at a wayside inn.)」とし、その心象風景を東洋的なものとしている[11]。このような前置きに続いて引用されるのは以下の詩であり、もとのフィッツジェラルド訳では余白に傍線が引かれているものである。

Tis but a Tent where takes his one day's rest
A Sultan to the realm of Death addrest ;
　The Sultan rises, and the dark Ferrash
Strikes, and prepares it for another Guest.
それは彼が一日の休息を求めるテントに過ぎない
あるスルタンが死の国に向かってゆく途中で
スルタンが旅立つと、褐色のフェラーシュが
テントをはたき、次の客のために仕度する

この詩の内容はまさしくハーンが先に紹介した「人生は仮の宿り」という仏教の無常観に通底する思想を表明したものであることが分かる。ハーンはこの引用に続いて、おそらく学生には分からないフェラーシュについて、「フェラーシュは、毎晩旅行者のためにテントを開き、朝になるとテントを畳む部屋付きの使用人のことである(Ferrash is the chamberlain the man who prepares the tent for the traveler each night, and strikes it (That is, removes and folds it up) in the morning.)」[12]と説明している。

これに続いて引用されるのは、同じく人生を、砂漠のオアシスでつかの間休息する隊商にたとえたものであり、フィッツジェラルド訳 67 頁から 68 頁までに至る、48 番から 51 番までの

4 つの四行詩がまとめて紹介されている。

A Moment's Halt – a momentary taste
Of BEING from the Well amid the Waste -
And Lo! - the phantom Caravan has reacht
The NOTHING it set out from - Oh, make haste !

Would you that spangle of Existence spend
About THE SECRET - quick about it, Friend!
A Hair perhaps divides the False and True,
And upon what, prithee, does life depend?

A Hair perhaps divides the False and True;
Yes; and a single Alif were the clue -
Could you but find it - to the Treasure-house,
And peradventure to THE MASTER too;

Whose secret Presence, through Creation's veins
Running Quicksilver-like eludes your pains;
Talking all shapes from Mah to Mahi; and
They change and perish all - but He remains.(Ibid, p. 347)

束の間の休息、一瞬の憩い
塵埃にまみれた命の井戸のほとりで
そして見よ！亡者の隊商が達する
虚無に、そしてそこからは逃れられない、ああ急げ。

存在の輝きがが明かすのをあなたは望むか
かの秘密を。急ぎたまえ、友よ。
偽りと真実を分かつのは一筋の髪
そして、どうか、人生は何に依るのであろうか。

偽りと真実を分かつのはたぶん一筋の髪
そう、そしてただひとつアリフがその鍵
　あなたはただそれを見つけるのみ―宝物殿への
そして神への道もまた同じ

その神の秘密の存在は、被造物の血脈を
水銀のように流れ、あなたたちの苦痛を取り除く
　マー（魚）からマヒー（月）まであらゆる形を取りながら
彼らは変化し、やがて滅びる。しかし彼は残る。

これらの詩はいずれも難解なもので、講義で突然これらの詩を紹介されても、学生たちにとっては禅問答のようで意味も分かりかねるようなものであったに相違ない。ハーンはそれを見越したのか、これらの詩についてほとんど逐語訳といってもよいような解釈を続けて講じている。以下に少し、ハーンのこの詩の解釈を見ておきたい。詩の引用に続いてハーンは、一つ目の詩の解釈を以下のように説明している。

Life is, he says, only like the waiting of travelers for one moment at an oasis in the desert to drink a little water. The desert is the unknown Infinite; the Well of Being at which we halt, is the present world into which we came out of mystery, out of nothingness. And we drink and pass on and vanish back into the nothingness out of which we came[13].

彼（オマール・ハイヤーム）は言う。人生は、水を少しばかり飲むために砂漠でオアシスに束の間旅人が立ち寄る休息のようなものに過ぎない。砂漠は未知の無限である。我々が立ち止まる人生の井戸は、我々が神秘から、虚無から立ち寄るこの現世である。そして我々は水を飲むと、元のやってきた虚無に立ち戻るのである。

このようにして見てみると、ハーンの解釈がかなり自らの心情に引き付けてみたものであることが分かる。難解なこの四行詩の意図するところを分かりやすく、またハーンの抱く無常観に合うように説き直したもので、全体に「我々」と一人称複数で述べることによって、ハーン自身も誰も人皆同じく虚無より生まれて虚無に戻ることが強調されている解釈であるといえよう。

これに続けて 2 番目以下の四行詩について、ハーンはまとめて以下のように解釈している。

まずは人生の無常と知りえぬことを知ろうとする人間の努力の虚しさについてである。

In the immeasurable darkness of mystery each life is but a tiny sparkle – the light upon a spangle; therefore what is the use of trying to find out the secret of things? The secret is infinite, while we are of a moment only; why waste that moment in trying to find out what we cannot find out? You say that we should try to discover truth; but who knows what is truth? [14)]

神秘の測り知れない暗闇の中で、それぞれの命は小さなきらめきに過ぎない。ほんの小さな明かりである。そうであれば、物事の秘密を知ろうとすることに何の意味があるのか、秘密は無限であり、我々はほんの一瞬に過ぎない。そうであればなぜ、見つけられないものを見つけようとして時間を浪費するのか。あなたは真実を発見しなければというが、しかし何が真実かなど誰が知ろうか。

この箇所は、先に引用した詩の逐語訳的な解釈というよりは、四行詩によって喚起された無常観をハーンが独自の見解によって再解釈し、学生に分かりやすく説いている箇所であるといえる。これに続く箇所も、四行詩の内容をパラフレーズしているというよりは、これらの四行詩からハーンが敷衍して考えたことを披露しているように思われる説明が続く。

Very possibly the difference between the true and false may be no wider than the thickness of a hair, or the difference of a single letter, if you could just find out that one little difference (but you never can find it out) then you might find yourself at once in all secrets. But of Him you shall never in this life learn anything[15)].

実に確かなことであるが、真実と偽りとの間の違いは、髪の薄さよりも広いものではない、あるいは文字の一つの違いである。もしもこの小さな違いを見つけることができたとすれば（しかしそれを見つけることは決してできないであろうが）、それですべての秘密が氷解するかも知れない。しかし、「彼」について、現世の中でわかることなど何もないのである。

真実と偽りの差を髪の厚みにたとえているところは先に引用した四行詩の解釈そのものであるが、文字の違いにたとえるところはハーンが加えたものである。また、それに続く説明もここで引用した四行詩の意味のパラフレーズというよりは、ハーンの解釈が存分に加えられた内容となっていることが分かる。

Everywhere He is, everything is full of Him; but you can no more find Him than you can pick up a drop of quicksilver between your fingers. One thing only is sure; that He is all forms, all things from fish to moon; and that all their forms perish and disappear – through He himself remains eternally unchanged[16].

「彼」はどこにもいる。すべては「彼」に満ちている。しかしだからと言ってあなたは、指の間の水銀の粒をつかむよりも彼を見つけることは難しい。一つだけ確かなことがある。それは彼がありとあらゆる形を取っているということ。魚から月まであらゆる形を。そしてそれらすべての形は滅び消滅するが、彼自身は永遠に変化しないままに残る。

ここで注意すべきは、実はフィッツジェラルド訳の中では、ハーンがここで何度も述べているような「彼」という三人称は出てこないことである。だからと言ってフィッツジェラルド訳の中で「神」と名指されるわけでもないこの三人称は、講義の中では、しかし、アッラーを指すものであることを暗示するかのように三人称とともに描写されている。これは、四行詩の中で言葉少なに述べられている思想を、ハーンが敷衍させながら学生に説いている場面であると言えよう。とりわけ上に引用した最後の四行詩については、「インド哲学の教えと似ている(resembles the teaching of Indian philosophy)」[17]と述べているが、これもハーン自身の見解であり、ハーンはさらにここでいま一つの四行詩を引用して、『ルバイヤート』の思想がインド哲学とどのように似通っているかについて説明する。

A moment guess'd – then back behind the Fold
Immerst of Darkness round the Drama roll'd
Which, for the Pastime of Eternity,
He doth Himself contrive, enact, behold[18].

一瞬は慮られ、暗闇の無限に巡らされた檻の中で
芝居は演じられる。それは永遠のつかの間の慰みに
「彼」ひとりだけが、趣向を凝らし、演じ、見つめる。

この詩を引用する前にハーンは、インドの哲学者の世界観を、「ある古いサンスクリットの詩人は、この見える世界を神がほんの暇つぶしに一人遊びしているチェス になぞらえている(An old Sanskrit poet compared the visible universe to a game of chess which God was playingwith Himself, just for amusement)」[19]と簡単に説明し、上の四行詩でオマール・ハイ

ヤームが同じような考えを表明していることを述べている。人生はこのような「人形劇（puppet-show）」に過ぎないというのである。このようなインド哲学についての知識は、とりわけアメリカ時代のハーンが単独したインド哲学関係の思想書の記述に裏付けられるものであり、ハーンにおける原始仏教の理解に大きな影響を及ぼしたものであると考えられる。この後さらに、人生の無常観を嘆くような四行詩が 30 篇近く引用され、それについてのハーンの見解が説明されているが、個々の詩の解釈と検討については、紙幅の関係もあり、別に機会にさらに細かく検討を加えることにしたい。

そのうえでここでは、東京帝国大学の英語および英文学講師という身分のハーンが、フィッツジェラルドの訳業を英語による最も卓越した訳業として紹介するはずのこの講義の中で、フィッツジェラルド訳の素晴らしさは冒頭に簡単に述べただけで、あとはむしろオマール・ハイヤームの『ルバイヤート』に表明されている思想を述べているのは何故なのかについて考察してみることにしたい。

ところでフィッツジェラルド訳ではこれらの詩のうち 3 つが 67 頁に、1 つはその続きの 68 頁に収められている。このうち 67 頁の 3 つの詩については余白に傍線が書き込まれており、ハーンが講義を用意する際に、学生に紹介すべき重要な詩として準備していたことが伺われる。これとは裏腹に、68 頁は、裏見返しに数字の記載はないが、67 頁の詩から続けて読み進めると、同じように人生の無常を物語る詩として連続性があることから、ハーンは講義の中でまとめて紹介することを思い立ったのではないかと考えられる。

３－３．日本の無常観との相同性

ハーンが東京帝国大学の講義の中で、フィッツジェラルド訳の紹介に事寄せてオマール・ハイヤームの『ルバイヤート』を学生たちに紹介しようと思い立ったのは、ハーンが他で説いている、英語を媒介することによって世界の様々な知を自らのものとすることができる、という知的活動の実践であり、そのために実は日本人学生には容易に内容が理解しやすい、仏教の無常観と通底するような四行詩を敢えて選んで紹介したのではないかと思われる点もある。

たとえば以下のような、人生の無常を酒で慰めるような詩である。

Perplext no more with Human or Divine,
To-morrow's tangle to the winds resign,
　　And lose your fingers in this tresses of
The Cypress-slender Minister of Wine.

人間であるか神であるかもはや迷うことはやめよ

明日は計り知れず、風に任せておこう
そしてワインを注ぐ係の糸杉のように細い女性の
束ね髪に指を埋めたまえ。

この詩についてハーンは、「宇宙の謎を解こうとするすべての人間の努力は絶対的に無駄なのだから、詩人は「世界をあるがままに受け入れることに敏感であることが必要であり、決して知りえないことを知ろうとして心乱されるより、自然が我々に与えたもう美や愛や喜びをそのまま受け入れればよい(Since all human effort to read the riddle of the universe is utterly vain, the poet says, "Let us at least be sensible enough to take the world as it is, to accept the beauty and the love and the pleasure Nature offers us, without troubling our minds concerning that which never can be known.)」[20] と述べている。また、この詩に出てくる酒のことを、イスラム世界では酒は法で禁じられており、この詩における酒も、文字通りの酒ではなく、現世の快楽のことをたとえたものであると考えるべきであること、糸杉のように細身の女性がイスラム世界ではもてはやされることなど、イスラム世界についての知識も一通りこの箇所でハーンが披歴していることが分かる。

いずれにせよ、酒が具体的なものであるにせよ、女性の体形がどうであるにせよ、現世の快楽によって憂さを払う、という思想は日本のそれにも通底するものであり、ハーンは講義を聴いている学生にも容易に理解しやすい心の在り方としてこの四行詩を引用したのではないかと思われる [21]。

また、万物の移ろいやすさを物語る詩として、以下のような詩が引用されてもいる。

Yet Ah, that Spring should vanish with the Rose!
That Youth's sweet-scented manuscript should close!
　That Nightingale that in the branches sang,
Ah whence, and whither flown again, who knows(*Ibid.*, p.365)!
しかしまた、春は薔薇とともに消える。
青春の甘く薫る巻物は閉じられる。
かの夜啼鶯が枝で鳴いたように
そしてもう一度現れるのはいつか、どこなのか、誰が知ろうか！

日本の学生に分かりにくい箇所として、「美しい巻物に麝香で香りをつける東洋の習慣(the Oriental custom of perfuming beautiful manuscripts with musk)」と、青春がそのように素

早く閉じられる巻物になぞらえられていることのみをハーンは説明しなおしているが、それ以外の意味は学生自らがおのずから理解できるかのように、詩のみを引用してそれを詳しくパラフレーズすることは控えている。

『ルバイヤート』の四行詩が、日本人の感性に相通じるものがある事の証左として、ハーンはまた月を見ての以下のような詩も講義中で引用している。

Yon rising Moon that looks for us again -
How oft hereafter will she wax and wane;
How oft hereafter rising look for us
Through this same Garden - and for *one* in vain![22)]
あそこに月が再び昇る
これまでも何度も月は満ち欠けし、
これまでに何度も昇る月は私たちを探し
この同じ庭から、そしてむなしくも一人の人のために。

この詩についてハーンは言葉少なに、しかし確実に、「庭に昇る月を見てすら、詩人は物悲しくなる。そして彼は、かつて日本の詩人がそうしたように、その感動を表現している(Even the sight of the moon above the garden makes the poet sad; and he expressed his emotion somewhat as more than one Japanese poet has done in the past.)と、日本の詩との相同性を述べているのである。

英語を学ぶハーンの学生たちにとって、このような親近性のある思考を学ぶことが、内容の理解に大いに資するところがあったことは想像に難くないが、結果としてハーンは、『ルバイヤート』と日本の無常観の間には相通じるものがあったことを講義における解釈を通して証明していることが分かる。また、ヘルン文庫の蔵書の書き込みから、おそらくハーンがこれらの思想の相同性を驚きをもって発見した様も想像できる。講義の中で引用している四行詩のほとんどに鉛筆による傍線が引かれており、裏見返しにその頁の記述があることからもそれはある程度証明できるのではないだろうか。ただし、講義の中でハーンは、必ずしもフィッツジェラルド版の順番で詩を引用しておらず、なぜこのように紹介する順番を操作したのかについては、むしろ『ルバイヤート』に流れる無常観をある論理に従って説明しようとしたためではないかと考えられるのである。また、左見返しの書き込みのローマ数字の意味も、講義録の精査からは分からなかった。このことからフィッツジェラルド訳の『ルバイヤート』は、単なる講義の準備のために書き込みがなされたのではなく、いずれ随筆などの作品の中に反映させるつもり

でもなされたのではないかという推測が成り立つのである。

おわりに代えて

ハーンの晩年である 1902 年に発表された『骨董』に収められた随筆「露の一滴」には、以下のような記述がみられる。

> There is no loss - because there is not any Self that can be lost. Whatsover was, that you have been; - whtasover is, that you are; - whatsover will be, that you must become. Personality! - individuality! - the ghosts of a dream in a dream! Life infinite only there is; and all that apprears to be is but the thrilling of it - sun, moon, and stars - earth, sky, and sea - and Mind and Man, and Space and Time. All of them are shadows. The shadows come and go; - the Shadow-Maker shapes forever[23].
>
> 喪失はない――なぜならいかなる自我も失われることはあり得ないからである。どのようなものであったにせよ、あなたは存在した。――どのようなものであるにせよ、あなたは存在する。―どのようなものになるにせよ。あなたはそれにならねばならぬ。人格！――個性！――夢の中に出てくる幻影にしかすぎない！あるものは無窮の命だけである。あるかに見えるすべてのものはその命の震えでしかない――太陽も月も星も――大地も空も海も――精神も人間も、空間も時間も。それらはすべて影なのだ。影が現れては消えてゆく。――影を作る者が永遠に影を作るのである[24]。

この記述は、従来ハーンの仏教思想を物語るものとして説明されることが多かったが、こうして『ルバイヤート』の無常観、少なくともヘルン文庫所蔵のフィッツジェラルド版に書き込みがあり、東京帝国大学の講義の中でハーンが引用しながら説明している『ルバイヤート』の無常観と比較してみると、必ずしも仏教のそれと狭義でそれをとらえるのではなく、むしろ宗教はどのようなものであれ、東洋一般に、あるいはハーンが大きな影響を受けたものと考えられる『ギリシア詞華集』にも通じる人間一般に通底する無常観のようなものと考えることもできるのではないかと思われる。『ギリシア詞華集』に見られる無常観も、広義には東洋のそれであるということもできようが、いずれにせよ、ハーンと『ルバイヤート』の出会いは、ハーン晩年の思想形成に無視しがたい影響を及ぼし、それが講義だけでなく作品にも反映されていると考えることができるのではないだろうか。

参考文献

The Writing of Lafcadio Hearn, Boston and New York, Houghton Mifflin company, 1922.

Lafcadio Hearn, *Complete Lectures on Poets*, The Hokuseido Press, 1934.

Lafcadio Hearn, *Complete Lectures on Art*, *Literature and Philosophy* , The Hokuseido Press, 1934.

Fitzgerald, Rubaiyat of Omar Khayyam in English verse / Edward Fitzgerald. - New York, Houghton Mifflin. 1888.

平川祐弘訳『骨董、怪談』、河出書房新社、2014 年

竹友藻風訳『ルバイヤート』、マール社、2008 年

注

1) ヘルン文庫収蔵図書の書誌情報は以下すべて、『富山大学附属図書館所蔵ヘルン（小泉八雲）文庫目録改訂版』富山大学附属図書館、1999 年による。

2) ラフカディオ・ハーンの講義録からの引用は、北星堂出版の Lafcadio Hearn, *Complete Lectures on Poets*, The Hokuseido Press, 1934.および Lafcadio Hearn, *Complete Lectures on Art*, *Literature and Philosophy* , The Hokuseido Press, 1934.を使用し、以下書名とページ数のみを示す。

3) *On art, literature and philosophy*, pp. 315-316.

4) *Ibid.*, pp. 511.

5) *On Poets*, p. 343.

6) *Ibid.*, p. 344.

7) *Ibid.*, p. 346.

8) *Ibid.*, p. 346.

9) *Ibid.*, p. 346.

10) *Ibid*, p. 347.

11) *Ibid.*, p. 347.

12) *Ibid.*, p. 347.

13) *Ibid*, pp. 346-347.

14) *Ibid.*, p. 348.

15) *Ibid.*, p. 348.

16) *Ibid.*, p. 348.

17) *Ibid.,* p.348.

18) *Ibid.*, p. 348.

19) *Ibid.*, p. 348.

20) *Ibid.*, p. 353.

21) ちなみに、この四行詩の最終行（原詩では 3 行目となる）「束ね髪に指を埋め（lose your fingers in this tresses）」という記述は、ボードレールの韻文詩「髪」および散文詩「髪の中の半球」を髣髴とさせるものであるが、ハーンがこのことに気づいていたか否かは今のところ不明である。ただ、アメリカ時代のハーンがボードレールの「髪の中の半球」の英訳を『タイムズ・デモクラット』のコラムに掲載していたことからも、この詩に関心を寄せていたことは確かであり、他にも「髪の一本が運命を分かつ」という四行詩を講義中で引用していることからも、ハーンが「髪」を重要なモチーフとして考えていた可能性は高いと言えるだろう。

22) *Ibid.*, p. 356.

23) *The Writing of Lafcadio Hearn*, Boston and New York, Houghton Mifflin company, 192, pp.111-112.

24) 平川祐弘訳、『骨董、怪談』、河出書房新社、2014 年、116 - 117 頁。

執筆者一覧（掲載順）

小森陽一　　東京大学
小泉　凡　　島根県立大学
川澄亜岐子　東京大学大学院生
服部徹也　　慶應義塾大学大学院生
水須詩織　　富山県美術館
河野龍也　　実践女子大学
西田谷洋　　富山大学
小谷瑛輔　　富山大学
結城史郎　　富山大学
水野真理子　富山大学
WILLIAMSON, Rodger Steele　The University of Kitakyushu
岩本真理子　北九州市立大学
中島淑恵　　富山大学

ヘルン研究第３号

２０１８年3月２０日　印刷
２０１８年3月３１日　発行

発行者　　富山大学ヘルン（小泉八雲）研究会
発行所　　９３０―８５５５　富山市五福３１９０
富山大学人間発達科学部西田谷洋研究室
０７６―４４５―６２２２

Printed in JAPAN　　ISSN 2432-8383

平成29年度学長裁量経費　科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究16K 13215）採択事業　富山大学ヘルン（小泉八雲）研究会主催
富山大学人文学部　富山大学附属図書館共催

2017年度富山大学ラフカディオ・ハーン研究国際シンポジウム

2017年12月23日（土）・24日（日）富山大学人文学部第6講義室

12月23日（土）日本におけるラフカディオ・ハーン

研究発表1　11:00～11:30
戦後高等学校国語教科書の中の小泉八雲・序説
西田谷洋（富山大学）

研究発表2　11:30～12:00
文学教育の題材としての小泉八雲
―富山大学の近年の実践例をもとに―
小谷瑛輔（富山大学）

基調講演Ⅰ　13:00～14:00
ハーンの『心』と漱石の『心』
―日清戦争認識をめぐって―
小森陽一（東京大学）

研究発表3　14:20～14:50
ラフカディオ・ハーン「守られた約束」について
―原話と再話の比較から見えるもの―
川澄亜岐子（東京大学大学院生）

研究発表4　14:50～15:20
帝大講師小泉八雲
―講義「読書論」「創作論」「文学と輿論」を中心に
服部徹也（慶應義塾大学大学院生）

研究発表5　15:20～15:50
ハーンと日本人の表情
水須詩織（富山県美術館）

研究発表6　15:50～16:20
ハーンと大正日本の想像力－佐藤春夫を中心に―
河野龍也（実践女子大学）

総括・全体討論　16:40～17:20

12月24日（日）ラフカディオ・ハーン研究の今

研究発表1　11:00～11:30
ラフカディオ・ハーンの創作と文化的記憶―「和解」を中心に
結城史郎（富山大学）

研究発表2　11:30～12:00
ハーンはアメリカでどう読まれたか―『日本―一つの解明』を中心に
水野真理子（富山大学）

基調講演Ⅱ　13:00～14:00
文化資源としての作家と文学
―ラフカディオ・ハーンの可能性―
小泉凡（島根県立大学）

研究発表3　14:20～14:50
Some more Lafcadio Hearn Materials from the University of Virginia
WILLIAMSON, Rodger Steele （The University of Kitakyushu）

研究発表4　14:50～15:20
ハーン作品のドイツ語版とユダヤ系文化人たち
岩本真理子（北九州市立大学）

研究発表5　15:20～15:50
ヘルン文庫書き込み調査報告
―『ギリシア詞華集』と『ルバイヤート』をつなぐもの―
中島淑恵（富山大学）

総括・全体討論　16:10～17:00

問合先：富山大学人文学部中島研究室（toshie@hmt.u-toyama.ac.jp)
富山大学附属図書館担当松島（076-445-6895）
富山大学ヘルン研究会HP　http://www3.u-toyama.ac.jp/hearn/